
ダリア、それは愛の序曲

憂愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダリア、それは愛の序曲

【Nコード】

N5743N

【作者名】

憂愛

【あらすじ】

この大陸には多くの国が存在する。その中でも藩属国を持ち帝国と呼ばれる国が2つ。ガイヤ帝国とアイリス帝国である。ディアは母国であるアイリス帝国では暮らせなくなりガイヤ帝国へと移住する。偶然、出会った彼は…ガイヤ帝国の皇帝で。偶然が重なり2人は心を通わせて行く。しかしディアの驚くべき出自によって大きな波乱が起こる。両国の皇帝の間で揺れるディアの運命が動き始める。

ガイヤ帝国

この世界には一つの大陸しか存在しなかった。

大陸に存在する数多の国。大小を合わせれば二五カ国以上がある。そんな大陸の中にも他に類がなく、藩属国を持つ”帝国”と呼ばれる国が二つあった。

一つはアイリス帝国が統べる緑豊かな国。一つはガイヤ帝国が統べる工業国。

相対する二つの大陸はお互い無干渉でいて月に限られた数の輸出、輸入がされている。

アイリス帝国は先帝が亡くなり国民は賢帝の死に嘆いた。それに続いて先帝が最も寵愛した公爵家の側室も亡くなった。それだけでは留まらず先日、起こった火災では先帝と側室の間に産まれた唯一の皇女も亡くなった。

災いがアイリス帝国に降り注いでいると他国は口をそろえて言った。

「ディア様…こちらです」

「…ここがガイヤ帝国……」

一つの商船がガイヤ帝国に着港したその数少ない商船に不釣り合いな青年二人と少女が一人。三人はロングのコートを着用し目深くフードをかぶっていた。身分の分からない面倒な人は乗せたくないという船長にそれを忘れさせるほどの金や宝石類を渡し、なんとか船に乗ることが出来たのだ。

「とりあえず宿を借りましょう」

「そうだね、それよりロイ？様はもう付けないでって言うてるでしょ？」

「っしかし…！」

「ね？バルトは、そうしてるでしょ？」

「そうだぞー？お前のせいで怪しまれたら、どうすんだよ？な、デアア？」

「そうそう」

「っ！バルト！！お前…デア様は何て口の聞き方してるんだ！」

「ロイは頭でっかちだね。」

「な、困っちゃっうよな？」

「バルト…！」

怒鳴るロイに二人は笑い都心部へ向かった。ロイとバルトは一つ違いの兄弟であった。容姿は似ているにも関わらず兄弟と言われな理由の一つに、それぞれが纏う雰囲気がある。ロイもバルトも黒髪に深紅の瞳を持つ、幻想的で美しい青年だった。そして二人が守るように歩く女性はディア。美しいオーロラのように輝くプラチナの髪は金にも見え銀にも見える。その不思議だが美しい輝きに多くの男は心を奪われたがロイとバルト、父親、兄弟の過剰なまでの愛を乗り越えることが出来た者がいなかったためディアと恋仲になった者は一人としない。

「…やっぱり駄目だ！このような所でディア様がお眠りになるなんて！」

ロイが真っ青な顔でワナワナと震えている。それをバルトが呆れたように近づいて肩をぼんぼんと叩いた。当人の彼女は苦笑いを浮かべながら目の前にある質素な寝台を見つめていた。

「お前馬鹿だろ。高いところ行って、どうすんだよ。身分証でもあんのか？」

「しかし…っ」

「大丈夫だって、ロイ…ディア様は強いお方だから。」

その言葉にふと部屋の中の窓を開け遠くを見つめるディアを追う。その瞳は何があるかと下がることはない。まるで不死鳥のように彼

女は何度も見上げるように青空を見る。何にも侵攻できない存在。彼女は、いつも泣きそうなきとき…辛いときに空を見上げ涙を堪える。己の身に降りかかる全てを己のみで解決するために。

それは…彼女自身の産まれにも関係するのだろう。

「……」

「どこに居たって、あの方の産まれは変わらない。」

「…そうだな。」

二人はそう言って小さく笑いあい、もう一度彼女に目を向けた。

「ロイ、バルトー！見てー！街が一望できるよ！」

二人の会話を知らず笑顔で呼び寄せる彼女に吸い寄せられるように近寄った。産まれたときから、そばにいた。決められた運命の中にいても彼女だけは自分たちと向き合い、つねに笑ってくれた。権力を強引に使うことなく、守るために権力を使う彼女に何度、救われてきたことだろう。

…。
そして思うのである。この笑顔を守るのは自分たちしか居ないと

「おおー確かに綺麗だな」

「ディア様、俺たちは家を探しに行きますが、ご一緒なされますか？」

「うんっもちろん！」

三人で窓の枠に手をつきガイヤの国を眺める。市場が開かれ賑やかな声を溢れるばかりの笑顔が飛び交っていた。工業国と聞いてはいたが市場には見知らぬ品物で溢れ交易の盛んさが窺える。

「ついでに仕事も探さなきゃな。」

ふ、とバルトは咳くとディアは、はいはい！と手を挙げた。フードコートで隠れていた手は細く白い。傷一つない、その手は働いたことがないのは歴然だった。

「あ、あたしも仕事するっ」

「ディア様はなりません！」

「ぶー」

「拗ねても駄目ですっ」

ロイが諫めても、何度かぶつぶつ呟き頬を膨らます。にぎわう街並みに三人は同化していく。夕日がディアの髪に反射し美しくきらめく。

「賑やかな町。こんな風に遊び回るのは久しぶりっ！」

「そうか？俺の記憶ではいつでも遊び回ってるように見えただけだな。」

「もう！」

バルトとディアは軽口を言い合いながら賑わう街中で「real estate」と看板の掲げられた店にバルトとディアは入る。ロイはバーに向かい国や仕事の情報を得に行っていた。

7

「妹に不憫な生活はさせられない。なにか良い仕事はないか？」

「ああーそれならガイヤの帝国軍に志願すりゃいい、戦なんて最近はめつきりだ。確かに厳しいがな。」

「体力には自信がある。助かった。」

ロイは軽くお礼を言うと店を出てオープンテラスで座っている二人の元へ向かった。周りを見渡し不審者が居ないかチェックするロイの姿に二人は苦笑いをもらし、座るように促す。それを指摘する

とバツが悪そうにクセです、と笑った。

「ロイ、どうだった？」

「噂通り平和な国みたいだな、内乱もないし安全だよ」

「仕事は？」

「帝国軍の給金が良いらしい。」

へえと笑みを浮かべたロイとバルト。しかし彼女は眉間にシワを寄せた。

「……駄目。絶対に駄目。従軍するなんて危ないよ！」

「それでもお前にドロを舐めるような生活はさせたくないんだよ。大丈夫、名前は変えていくから」

「でも！」

「ディアさ……ディアも本名を絶対に名乗らないで下さいよ。貴方はディア・シュゼールです」

「……分かった」

しびしび頷いたディアの頭をそれぞれ撫でる。ディアも二人が強

いということは嫌というほど知っている。でも、自分たちには身分を証明するものはない上に、身分を知られては困る理由があったのだ。それを二人は理解しているだろう。例え身分が露見しても二人は何も言わずに自分を守り自分が知らぬうちに罰を背負うことになる。それが分かっているからこそ、従軍はさせたくなかった。

それでも、何でもなさそうに笑い、あれこれ食べさせてくる二人に感謝せずにはいられない。二人にとって守るべきは自分なのだ。犠牲になることに躊躇しない二人と居ることを選んだ。自分は全てを背負う覚悟を持っていなければいけない。絶対に二人にだけ罪も罰もかぶせることはできない。そう心の中で誓った。

* * * * *

「おやすみなさい、ロイ、バルト」

「おやすみ」

「おやすみなさいませ」

ロイが最後にランプの灯を消して部屋が暗闇に支配される。ゆらゆらとランプの残像が脳を揺らし、過去をよみがえらせる間。未だ消えない火がある。きっと何もかも燃やしつくした火が、消えずに残っている。

ディア…きっと幸せになるのよ。

「っ」

最期に見た母は真っ黒なドレスを着ていた。その美しい髪は唯一…自分と同じモノ。あの髪が…血で濡れたのだろうか。あの炎のように紅い赤で。闇を消し去ることはない。闇はいつまでも自分の胸に。愛おしい記憶とともに。ずっと、そばにいる。

入隊

「ディアは、ここで留守番な。絶対に出るなよ」

「分かってる！何回目？」

「好奇心に負けたと言い訳するのも何回目になるでしょうね？」

「うっ」

呆れたような顔色でロイが苦笑いを浮かべる。さすがに今日は言うことを聞こうとディアは人知れず心に決めた。見た目ではロイが怒る所なんて想像もつかないが、実際：今までディアを1番怒ったのはロイだった。母よりも父よりも誰よりもロイに怒られてきたのだ。それをバルトは後ろでニヤニヤと見つめていた。

あれから三人はまず住む家を決めた。市場から一本だけ曲がった場所にある普通の家だった。でも部屋は三室ありリビングには食事をするために大きなテーブルもあり日当たりも、とてもいい。

「じゃ俺たちは城に行くから。」

「昼前に帰ってきますので昼食は一緒に食べましょう。」

「うんっ待ってるね。気を付けて！」

笑顔で2人を送り出したディアは、無意識に自分の耳に触れた。産まれた瞬間から付けられたピアス。付けた記憶なんてない。物心ついたころには何よりも大切なものと教えられた。自分の身分を証明するものだ。このピアスは死んでも外さない。これから自分に何が在るのか、そして過去に何が在ったかを自分と同じだけ知っている。自分を見届けるモノ。全てを見守り続けるもの。

何よりも…愛された記憶の形だった。

* * *

「コツチだな。」

「ああ。」

ロイとバルトは街中から見える壮大な城を目指し歩みを進めた。町は賑わい人々は笑みを作る。置いてきたディアを不安に思うが、あれだけ強く注意した。あんなにも厳しく言っただのは今まで一度もなく、自分の立場を理解している彼女が出るはずがない。

「分かってるけど不安なんだよな。」

「ああ…」

「でも仕事は早く見つけた方が逆に怪しまれないだろ。」

「ディアさ…ま……ディアにも落ち着いた生活を…普遍的な生活を早く与えたい。」

以前の生活は、つまらない、とボヤキながらも笑顔が溢れる幸せな時間だった。その証拠に彼女は純粹すぎるほど真っ直ぐに育った。自分たちの母国であるアイリス帝国と同じく城下を一望できるであろうガイヤ帝国皇城。白亜で緑溢れるアイリス城とは正反対に大門から途切れることなく城外を囲む畏怖を与えるほどの城壁に囲まれてガイヤ城はそこに建っていた。

「ひえー…城は城でもアイリスとは違うな。」

「確かに、まあ…でも軍なんかは変わらないだろ。」

「行くか。」

「ああ。」

門番をする者に声をかけ城内から軍服を着た屈強な男の後を歩き門をくぐった。鍛練場の横を通ると聞きなれた金属音の合わさる音が、どこかしこ聞こえてくる。そこを抜け室内に入ると重厚なドアを開けて一つの部屋へ入った。

「座ってくれ。」

緊張感のある良い声をしている、そう思いながら2人は指示されたソファに座る。アイリスとは違う軍服の色。それを食い入るように見つめ、心の中の靄を一扫する。

「入隊希望で合ってるな？」

「はい。」

「すぐ止めるやつはいらん、弱い心を持つ者も。お前たちは、どうだ？」

「なんともいえないです。守りたいものがある。状況次第では辞めることもあります、弱い心ではないので安心してください。」

ロイが真摯な瞳を向ければ同じように返される。軍人の瞳は嘘を見破り不徳を暴く。それを二人は、嫌というほど知っている。だから、逸らしてはいけない。守りたいものを守るために。

「…何を守る。」

「ただ一人を。」

かすかに声が変化した。重く低く、侵攻不可の領域だと宣言するように。ロイの瞳を探るように見やった後、同じ想いだというような顔をしているバルトに視線を移す。

「状況が変わればとは？」

「…変わらなければ、ここにずっと居るという意味です。」

「…まあいい、面白いしオツケー合格。」

「どうも。」

その様子を見ていたバルトがニヤッと笑うと、よろしくと軽く頭を下げた。

「俺は帝国軍5番隊長ルイシード・ヤイバだ。勤務はいつからがいい？お前たちのことだ入寮することはないな？」

「勤務は週末開けがいいです。」

「分かった。それなら軍服だな。持ってこさせよう。」

近くにあった通話石を持ち、その石に語りかける。石はかすかに光を灯し光り輝く。通話石はある程度の魔力のある者が意志を注ぎ込むことで望む場所に置いてある通話石に声を届けることが出来る。この大陸に住む者は大小はあるがほとんどの者が通話石を使える程度の魔力を持っているのだ。

「軍服を2人分。サイズは少しだな。」

『かしこまりました。すぐに持っていきます。』

「よろしく。」

その石の光が消えルイシードが顔を上げると2人に立つように命じた。上から下まで見ると、少しだけ間を開けて口を開いた。

「…2人とも元軍人だな。それもかなりの。」

「過大評価ですよ。」

「そうそう、元々は商人の護衛傭兵だったんだ。」

「そうか。とりあえず手合わせ願いたいな。」

ほどなくして軍服が届けられると3人は場所の案内をうけた。その途中、立ち寄った鍛練場で軽く挨拶を終えると宿屋への帰路へついた。

* * *

「軽く、やっていくか？」

「…それは拒否できないんでしょう？」

「そうだな、商人の傭兵程度が分らんのでな。」

楽しげに笑ったルイシードに呆れつつも、これが軍人の挨拶だということを知っていた。ここで負けるのは許されない。自分たちが舐められれば彼女にまで飛び火がいくこともあるだろう。彼女の前に立ちほだかる壁として自分たちの力を誇示していなければいけない。

「害虫になりそうなヤツが、うじゃうじゃいるからな。」

「ディアが笑えば全員、害虫になり得るだろ。」

「確かに。」

そう不敵に笑い、渡された木刀を構える。誰でもいいからこい、と手で合図すれば血気盛んな軍人が一斉に列をなした。こういう馬鹿まるだしな軍人は、嫌いじゃない。そう思いながらも傍観しているルイシードに声をかける。

「ここに居る全員に勝てば、毎日、定時で上がらせてもらいます。」

「おいおい、ここには副隊長を含めて五十人は居るぞ。二人で相手しても二十五人だ。」

「分かってます。だから、ですよ。」

「…分かった。全員に勝てば定時上がりを許可する。」

生意気な新人に目くじらをたてる目の前の軍人たちに笑いながら
一步を踏み出した二人。

「負けんなよ、ロイ。」

「お前もな、バルト。」

そして数時間後、倒れた五十人の前で息を乱しながらも傷一つない二人は約束通り、定時上がりを約束させ疲れも感じさせず笑顔で帰って行った。

家に戻った二人が、嬉しそうに定時上がりをディアに自慢したのは、そのすぐ後だった。

ガイヤでの生活（前書き）

ここからディア視点でいきます。

ガイヤでの生活

私たちはガイヤでの生活をスタートさせた。家は明るく太陽の光がたくさん入る立地を選んだ。そのためなのか市場も近いし、たくさんの方が密集している。三人いるので三部屋ある家を選んで、リビングも少し大きめトコロにした。

今まで見たこともない家事をするのは凄く大変だったけど近所の人たちやロイたちのおかげで少しずつだけ慣れて、こなせるようになった。

二人は毎日、城まで出勤し訓練をして私を養ってくれていた。疲れないかな？と思ってても、初日から変わらず涼しい顔で帰ってくるので、あえて何も言わない。二人の馬鹿みたいな体力はなんとなく知っているし。ガイヤでの生活は質素かもしれない。でも、目が覚めるように好奇心がくすぐられる毎日が私は本当に好きになれた。

「じゃディア…行ってきます」

「はい、気を付けてね？」

「おぉー」

今日も同じように二人を見送って朝食の食器を片づける。そのまま洗濯をはじめてベランダにある物干しざおにかけていく。

*

「ディア様に俺の洗濯なんて、させられません!」

*

「ふふふ、懐かしい。」

初めのころは私が料理するのも洗濯するのもロイは一々、顔を青褪めていた。別に大丈夫、と何度言っても変わります!と叫ぶロイに呆れながら説教したのは、一回や二回じゃない。バルトが、なんとか言いくるめてくれたから今はグツと拳を握って耐えている。何もかも大袈裟だ。

「あ…お昼…二人と一緒に食べようかな」

日々の生活に少しだけ余裕が持てるようになって私は城に行つて三人でお昼を食べようと隣の家の娘で同い年のユーリの元へ向かった。ユーリはロイたちと同じ城で従軍する兵士の恋人がいて時々、一緒にお昼を食べるらしい。それを聞いて、いつか三人で食べようと決めたい。もちろん二人に秘密だけれど。

「ユーリ」

「あ、ディアーどうしたの？」

「ごめんね、今日二人にお昼を差し入れて一緒に食べようと思うんだけど昼休憩が何時か分かるかなーと思って。」

「ああ、そういうことね。お昼は1時からよ、門で身分チエックされるときにロイたちの名前を出せば勝手に向こうが確認して入れてくれるわよ。」

「ありがとうっ！じゃ、お昼作ってくるね！」

「はいはい、あ、ディアー！」

「なあに？」

「気をつけなさいよ。」

「え…？」

「兵士は…特に住みこみの兵士は女に飢えてるからね。」

「ははは、分かった！でも私は大丈夫だよ！」

「…気を付けるのよ。」

「はい」

眉を寄せたユーリに笑顔を返して家に帰ると、さっそくキッチンに立った。

「よしつと…何作ろうかな…」

軽く腕まくりをしてヤル気を出した。料理も最近では手慣れたように作れる。最初は…言葉にも出来ないほど、お粗末なものだったけど。(もちろん二人は美味しいと言って食べてくれた。)疲れて帰ってくる二人に出来ることは美味しいご飯を食べさせてあげられることしかない私は、ユーリやユーリママ、はたまた市場で店を構える人たちに聞き続けて料理を教わった。

出来ることをする。それが、今…自分を支えているから。

今、思えば昔の私は何も知らなかった。材料を切るための包丁も見たことは無かったし、お皿の種類だって沢山ある。だから、毎日の新しい発見は私を新しい私にしてくれているようだった。

知識が増えるたびに二人に聞かせ、それを嬉しそうに聞く二人に満足していた。産まれた時からそばにいる二人。あの頃には感じなかった二人の子供っぽいところも、ここへきて初めて知ることが出来た。

「いつまで…続くかなあ……」

口をついた言葉にハツとして頬をパチンと叩く。しっかりしろ、考えるな。そう言い聞かせて目の前の新鮮な野菜に包丁をいれた。

ガイヤ城

ユーリに書いてもらった城への地図を見て歩いていると、途中から不要になった。賑やかな市場に出れば高い建造物はなく悠然とそびえ立つ城がすぐに目に入ったから。大きいな…。白い大理石で作られたアイリスの城とは違う。なんていうか…圧倒されるほど。そういえば…ガイヤは昔から大きな軍事力を持っていた。ぐちゃぐちゃに色々なことを考えながら大門に付くと門番をしている人に声をかけた。

「すみません、ロイ・シュゼールとバルト・シュゼールの妹ですが、二人に会うことは出来そうですでしょうか。」

「あ…は、はい！」

びつと背筋を伸ばした人が一步前に出た。その顔は熱があるの？と言いたくなるぐらい真っ赤だけどそれを拭いさるような満面の笑顔に言葉を飲み込む。

「?…お願いします。」

「ぼ、僕が案内いたします！」

「お手数かけます、よろしくお願い致します。」

門番の人にお辞儀をすると恐縮したように苦笑いをされた。一応、礼儀としてやるもの…だよな？手探りの毎日だから、こういう反応をされるとギクリとする。でも、門番の人は、もう普通の顔をして二人のことを話し出した。

「あの、お二人は凄く有名なんですよ。」

「本当ですか？」

「はい！なんせ入隊した、その日に副隊長をお倒しになって、それが軍事総帥補佐に抜擢されたぐらいですから。」

「…あの二人は凄く強いですからね。」

知らなかった二人の情報に眉を寄せる。あれだけ私に目立たないようにつて何度も言ったのに。二人だつて嫌つてぐらい目立ってるじゃない。しかもここはガイアの帝国軍。町に住む私とは危険度もかなり違つていうのに。…これは二人に確認しよう。

「ディア!?!?!」

「バルトツ!」

気が付けば鍛練場まで来ていて、懐かしい金属音をバツクに走りよるバルトの顔は最高におかしかった。焦りと戸惑いが混じって、それはそれは不思議な顔だ。だから小さく笑ってみた。

「どうしたんだ?!」

「お昼をね、作ってきたの。一緒に食べようと思って。」

「…ロイが失神するぞ……」

「大袈裟。」

はぁーと溜息をつかれて私は少し唇を尖らせた。そんなに呆れなくてもいいのに。驚かすというより困惑させてしまったようで、半分反省の半分不満だった。

「コイツは?」

「門番の方が案内して下さいました。」

「そうか…ご苦労だった、もういいぞ。」

「は、はい！それじゃ、また今度！」

「はい。」

手を振って歩いて行った門番の人にお辞儀をして、さつきより落ち着いたバルトを見上げる。さつきまでの表情とはいっぺん、優しい雰囲気を出して笑った。ニコニコしながら私の持っていたバスケットを持って開いた手を背中に当てられる。昔からいつもいつも、こうやってリードしてくれる二人。それに何度…救われたか分からない。

「じゃあ…ロイ呼び行くか。」

「うん」

「たぶん、6番隊シゴいてる時間だ。」

「それはそれは…ご愁傷様だね。」

「ははは、そうだな。」

あのロイにシゴかれてる6番隊の人たちに同情しつつ運動が出来

そんな広場につくと、まるで地獄にいるような顔で走ってる人たちが二十人ほど居た…。ご愁傷様です。そこから、ちよつと離れた私たちとはちよつと反対側に煌びやかな軍服を纏う人とロイが会話していた。気付くかな？と視線を送ると…

「デイ、デイ、ディアツ?!?!」

「…ロイツ!」

「ど、ど…どつして…」

私に気付いたロイが凄いどもりをつれて走り寄ってきた。…話しの途中だったんじゃないの?という心配はロイの焦りの前に消え失せた。

「昼飯を一緒に食おうだってよ」

「……ディア………」

「…ごめんなさい……迷惑だった?」

「まさか!?!」

複雑な顔をするロイに居た堪れなくなって俯くと、すぐに焦った表情をして頭を撫でてくれる。ありがとう、と笑顔で言われてホッとした。ロイは、いつも私を心配するけれど、こつやっって甘えさせ

てくれるのもロイだった。

「お前が動揺するなんて珍しいな」

「総帥…」

さつきロイと話していた人が近くまで来て、私はその人をしつかりと目に映す。切りそろえられた赤い髪。煌びやかな軍服の下にあるであろう引き締まった肉体。手先にある剣ダコを見ると、かなり強い人なんだと容易に想像出来る。その人にはこやかに笑って私を見る。

「ディア…こちらは俺らの上司の帝国軍総帥キリヤ殿だ」

「初めまして、帝国軍総帥閣下。ディア・シュゼールと申します。兄二人がお世話になっているようで…くれぐれも、宜しくお願い致します」

「君が噂の深窓の妹君だね」

「噂…ですか？」

「そう、侍女に貴族令嬢…言いよる女は数知れず。しかし、それは目もくれず定時で家に直帰する理由が君になるわけだ。」

「…そうなんですか……」

「総帥!!」

「ディアに余計なことというとロイがキレますよ。」

くだけたロイとバルトの態度にこの総帥という人がいかに優秀かが分かる。信頼出来る人なのだろう。昔から二人の人に対する洞察力は目を見張るものがあった。っていうか…やっぱり…と小さく笑う。軍がいかに厳しく由緒あるものであるかは、昔から二人のそばに居たので知っている。なのに二人は遅いどころか、日の長い今の時期でも明るい時間帯に帰宅していた。まだ新人だから、することがないと笑っていたけど、どうやらそうでもないらしい。

家に一人でいる自分を氣遣ってくれたのだろうと、すぐに分かって苦笑いしか出てこない。

「まあ仕事も定時まで完璧に仕上げているから文句のつけようもないがな。」

「当然です。」

ロイの言葉に総帥は豪快に笑うと、走っている隊員に休憩を告げ私たちにも挨拶をし歩いて行った。

「俺たちも昼飯にするか」

「そうだな。」

頷いて二人の後を歩こうとした時、無視出来ないほどの視線にふとそちらを見ると、さっきまで走っていた隊員の人たちが渴望とも取れる眼差しでこちらを見ている……無視ですか……さっきまでシゴいていた人たちを無視ですか……。半ば呆れたようにロイを見ても、素知らぬふりをして最高の笑顔を返される。

「……お疲れ様です。兄二人をよろしくお願いします。」

笑みを浮かべて、ペコリとお辞儀すると……。イエイエ、メッソウモゴザイマセン。オニイサマニハオセワニナツテイマスと何とも片言の社交辞令が返ってきた。どんな訓練してるの？と不安になった。

「ディアがそんなこと言うことじゃない。無視だ。無視。」

「そうです、あいつらは生粋のDMですから。」

……なんてことというの。もう。ジリジリと寄ってきている隊員の人たちを一瞥のみで退ける二人に気づかれないように溜息をして、もう一度お辞儀をしいた。

庭園と呼ぶには、おそまつだけど少しだけ色のある花が咲く庭。私たちはそこで昼食をとって談笑していると、さつきシゴかれていた隊員がきた。総帥が二人を呼んでいると告げるとビシッと敬礼をして二人を待っている。

「いいですか、真っ直ぐ帰るんですよ。」

「分かってる。」

「知らない人には付いて行っちゃいけません。つまみ食いも駄目ですよ。」

私は子供じゃない！と言いたいけど、言っても無駄。そう思って素直に頷くと呼びに来た隊員に付いて二人は行ってしまった。終わるまで待たせたいけど、野郎ばかりのここには居られない。とか、家まで送る。とか私を完璧に五歳児扱いする二人に一人で帰れるよ、と笑ったのに…無駄に終わった。仕事があるんでしょ！としぶしぶ納得させて、やっと戻って行った。

ここまで過保護なのは頂けないな。と苦笑いをこぼしながら、大門に向かう。……あれ…？ここさつきも通った？あれれれ、大門ってどこだ？

迷子ですか…まさか迷子ですか、自分。歩き続けていると、ふと花の香りがする。私にとっても縁のある花。この花の匂いを間違えるはずもない。

懐かしさ、悲しみ、苦しみ、喜び、悔しさ。色々な感情が溢れる。無意識のうちに髪の毛に隠れているピアスに触れる。

無意識のうちに足は、それを求めて歩みを進める。まるで私は幻
を見ているように懐かしい残像も思い浮かんでいた。

「……………ダリアだけ？」

辿りついた場所は一面にダリアの花が咲く。確かに愛らしいダリ
アの花は色々な場所の庭園に置かれている。でもダリアだけが一面
に咲き誇る庭園を私は一つしか知らない。なのに、ここは私の知る
庭園と同じようにダリアのみが咲いていた。

「お母様…お父様…リン……………」

無意識だった。この花を愛し、私を愛してくれた三人。失ってし
まった今はダリアを見て思い出すことしか出来ないけど。

「……………いめんね」

何度となく言った言葉は虚無感しか与えてはくれなかったけど。誰にも届かず聞きいれられることのない願いを毎夜、祈り続けた。希望に溢れた言葉は私にはあまりにも眩しすぎて。耳を塞いだの。そこは真つ暗で。祈りは無意味なことが多い、希望は鳥のように羽ばたいて消えてしまっけど。諦めることなんて出来なかったんだよ。

胸いっぱい広がる説明できない思いがある限り、私は生き続けるの。誰かが、この言葉に耳を傾けるときがくるから。私の言葉が必要になるときが来るから。

I can't suppress the hope

*

「ふふふ、ディアは本当にお父様が好きなのね」

「うん、だーい好き！」

美しいダリアの花と、その香りが溢れる幸せな…確かに幸せな空間だった

*

「真に申し上げにくきことなれど、御母上……クラリス様……ご逝去
あそばされました」

「な、に……？」

跪くロイとバルトを呆然と見たのは悲しいからではなかった。

*

私は、どこへ向かっているのだろう

ダリアの宮

「誰だ？誰かいるのか？」

「え？」

甘い響きを持つ声が短く聞こえ、美しい髪がリズムを刻みながら彼女はゆっくりと振り返る。その瞬間は、世界中の音が消えたような静寂の中で、同じく世界中の美しさをかき集めたような、わずかな時間だった。

光を浴びたオーロラの髪はいやに幻想的に映る。わずかな未来を儚くように潤んだ瞳もまた目を惹いた。しかし、その瞳は平和を映したような琥珀色の穏やかさを持って。世界中が彼女に色をつける。まるで世界中が彼女を祝福しているようだったと、後に彼は語る。

「お前…誰だ」

「あ…申し訳ございません、私は帝国軍総帥閣下補佐をしております、ロイ・シュゼールならびにバルト・シュゼールの妹…ディア・シュゼールに御座います」

戸惑いがちに頭を下げる動作に何1つ無駄はなく、美しい。何者かと問えば、今宮廷の話題にかかせない2人の男の名を上げる彼女を見やる

ロイ・シュゼール

バルト・シュゼール

軍事国家であるガイヤ帝国の軍は大陸一とも呼ばれているし、平和な今でも対抗勢力として軍力は衰えていないと軍事総帥は豪語している。俺もそれは分かっている。そんな兵揃いつわものの中でも上に立ち隊員をまとめる立場にある各隊の副隊長を入隊した、その日に倒した武勇伝は俺にも届いてきた。それから、2人の身边調査が始まり、アイリスからガイヤに流れてきた兄弟だということ。そして妹が居ることも聞き及んでいる。何かすれば…すぐに捉えることも出来るように見張らしてもいた。強い者は歓迎するが、それは脅威であり間諜であるかもしれないという総帥の懸念からだ。最近はその止めたらしい。総帥は2人を信用したのだ。故に怪しいものではないらしい。

「あの2人の妹か……」

「はい……」

直接、言葉を交わしたことはないが遠目から見たことある男2人とは似ても似つかない。兄弟であるのに男女の違いとはいえここま

で違うものだろうか。漆黒の髪を持つ2人とは対照的に彼女は銀にも金にも見え、周りの色を受け入れ反射するオーロラの髪をしている。美しいとしか形容のしようがないほど美しい。

「どつして、ここに居る」

つとめて厳しく言うと、シュンと垂れた眉を一層に下げて、そつと横に咲くダリアを見た

「兄と昼食をと思ひまして登城致しました。帰る途中でダリアの…花の香りがしましたので、つい探しているうちに…ここへ来てしまいました。」

「ダリアの花？」

「はい、申し訳ありませんでした。すぐに帰ります。」

「…いや、いい。ダリアの花なら、奥はもっと鮮やかに咲いている案内しよう」

「え…? いいんです、か？」

遠慮がちに見上げられた琥珀色の瞳に、わずかに光がともって俺は大きく頷いた。

「ああ、俺にも思いがある花だ。久しぶりに見たくなった」

後ろを付いてくる女を気になげながら、ゆっくりとその場所へ行く。数少ない王宮での癒しの場所。ここは誰にも立ち入れさせない場所だった。

「ほら、ダリアだ」

「わぁ……き、れ……」

「良い香りだ、な」

「はい」

懐かしむような微笑みを小さく浮かべた女は直後、悲しさが瞳に宿っていた。

「ディアも思い入れがあるのか？」

「はい……私が産まれた時にダリアの花が満開に咲き乱れ……香が一

層、強く香ったらしいんです。だから私の…いえ…だから両親は私によくダリアの花を贈ってくれました。」

「そうか」

思い出しているのか、少しだけ喋る速さを落としたディアを見る。俯いていると思った、彼女は清々しいまでに真っ直ぐとダリアを見つめていた。この瞳が希望を失うことはない。そう信じれるような眼差しだった。

* * * * *

誰だ、と問う声。いつかとデジャヴしたような感覚が襲った後、ゆっくりと振り返る。そこには私とは似てるようで似ていない金色の髪。周りの色を反映する私とは違って、金だけが見事に輝いている。軽く切りそろえられた、それが風になびいて、その繊細さを伝える。

目線があつた瞳は美しいまでに透き通った蒼色。母なる海。尊大なる空を思い浮かばせる、その色に…やっぱりデジャヴがよみがえる。

案内しよう、と優しくに届いた言葉は何故か心に響いて。すつと落ち付いていく気がする。さいきほどまでとは比べ物にならないほどの様々な色のダリアが広範囲に広がる、そこには澄みきった空気と静寂が相まって、よりいっそうダリアの香りを強くしていた

懐かしい…心が温まる。

「あの…貴方様も何か思い入れが？」

この人もダリアが好きなのだろうか。そうだったら…とても嬉しいと思った

「…まあな……ディア、俺はキースだ」

「キース…様？」

「キースでいい」

少し強めの言葉の中に確かに感じるのは…ロイヤバルトに似たもの。優しさが見え隠れする人。だからだろうか、普段持っている警戒心はなくなってしまった。

「…キースも従軍しているんですか？」

「え？…いや…俺は文官として城に出仕してる」

「そうなんですか」

「敬語もいい、普通に喋れ」

「…はい…じゃなくて、うんだね」

敬語に敏感に反応したキースの眉が少しだけ寄せられたのを見て言いなおすと、満足したように唇を緩めた。私は何だか懐かしい人を見ている気がして、ふと記憶をめぐらす。

「ディアもアイリスが生まれ故郷なのか？」

「え…どう、して…」

「あの新しい2人は有名だからな、その妹だろ？」

「あ、うん…」

突然ふられた話題にしどろもどろになりながらも肯定を表すために何度も頷く。言葉にしたなら、あまりにも滑稽な気がしてしまったから。ってというか、そういう設定とか教えてほしかった。

「アイリスは緑豊かで美しい国だな。」

「キースは行ったことあるの？」

「ああ、子供のころだけだな、良い国だった。」

「うん、凄くね。」

やっぱり自分の故郷が褒められるのは嬉しい。自分で言うのもな
んだけどアイリスは年中、気候が穏やかで花々はずっと咲いている。
ダリアの花も…ずっと咲いていた。香水をつける必要がないくらい身
体に染みついたダリア。遠く離れたガイヤの国でもこうして愛され
ていると知って何だか気恥ずかしい気さえした。

「どうしてガイヤへ？」

「…両親が亡くなって身よりもなくなったの。だから3人で心機一
転ガイヤで生きようって決めたの」

「…そうか、悪いな」

「ううん、大丈夫だよ」

気遣わしげな言葉に大きく首をふる。

確かに両親が亡くなったのは不幸かもしれないけど。…もちろん
とても寂しいけど。それでも私は幸せだった。愛されてるって全身
で感じれる時間が確かにあったし、今もあるから。だから…人に哀

れに思われるいわれはない。

「あ……！」

「どづした？」

いいですか、真つ直ぐ帰るんですよ。

知らない人には付いて行っちゃいけません。つまみ食いも駄目ですよ。

つまみ食いはしてないけど。他の二つは見事に破ってる……いや、でもキースは知らない人じゃない。確かに後から知ったけど。……最初、知らない人なのに付いて行ったけど。

……うん、黙ってればバレない。

「私そろそろ帰るね」

洗濯物に夕食の準備に……とヤルことは山ほどある。ここでダリアを見て何だか力を貰ったみたいに元気が出た。よおし、頑張るぞ、と気合をいれて目の前のダリアとキースにお別れを告げる。

「また見に来い。」

「え、いいの？」

「ああ、特別。」

「ありがとう！……きっと来るね！」

笑顔浮かべれば、穏やかなキースの表情が返ってくる。そういえばロイとバルト以外の男の人とこんなに話したことはない。なんだか新鮮だし、とっっても楽しい。

二人には…… うん、黙っておこう。

邪魔されるに違いない。

「ロイとバルトには内緒にしてくれる？」

「？ああ、分かった。」

「ありがとう、それじゃ……さようなら。またね。」

「……ああ。」

手を振って歩きだす。それとなくキースに聞いて大門の場所も把握したし。帰りに市場によって食材も調達しよ……あ、小麦粉きれて

たっけ。

「ディア！」

「え……？」

「絶対に来いよ」

「？うん、もちろん！」

不思議なキースに笑顔を返して帰路についた。大好きなダリアを背に笑いかけるキースに、両親の面影を感じた。愛してくれた両親。最後の…最期まで私を思ってくれた両親。自分が想っていた倍の愛情を返してくれた両親。愛してる、と何度、直接…口にされただろう。でも、今は、その人は居ない。

私を愛してくれた人はいない。それでも愛は変わらず残って、形をなし、心において続ける。それは奇跡に近いことだと思った。自分の想いを…感情を…伝えられることは。だって私は…何度、言葉にしただって聞こえない。天国に届くまで…どれだけ叫び続けられたい？

それでも…愛してる。

日常への変化

キースと約束した、あの日から一週間。私は、もう一度あの庭園に来ていた。なんで一週間も来れなかったかというと、ロイとバルトに城に来るのを止められたから。なんでも「飢えた野郎共の目の保養にディアを使うなんざ、百万年早い！」らしい……

それがやつと落ち着いたらしく、一緒にお昼を食べようと二人から誘われた。きつと一人で食べるのが嫌いな私が今までろくに昼を食べてなかったことに気付いた二人の優しさだろうな、と心の中で感謝した。

一緒に食事をした後、前みたいに仕事に戻って行った二人を見送って庭園を目指した。そこへ、つくど地面に座り込んだ一人の男性。自分の金にも銀にも見える髪とは違う、ゴールドのみの色を持った髪はいやに滑らかに風にそよいでいる。

「キース！」

「…ディア。」

「こんにちは。」

振り向いたキースに挨拶をすると愁眉をひらいたように笑顔が返ってきた。うん、やっぱりキースは笑うと凄く素敵。普段、目元は少しだけキツイ印象を与えているけど、今は違う。その目元は、ほ

んのちよつと穏やかさが増してる。

「今日は会えたか。」

「え…もしかして、ずっと待っていてくれたの？」

「ああ、俺は住みこみだから城から出られないんだ。」

「そつなの！？ごめんね。」

「別に。」

ちよつと強気なその言葉もなんだか、おかしくて笑えた。何だかんだ言つて私もこの一週間キースに会えないのがなんだか物足りない気さえしていたから。それはキースも同じだったと思うと、やっぱり嬉しかった。

「ふふふ、今日はねキースに会えたらこれを渡そうと思つてたの。」

「…？」

「サンドウィッチだよ、甘いトマトが入つたつて商人さんがくれたの。」

「くれた？買ったんじゃないか？」

「?うん…あんまり買うことはないかな?ガイヤの人は優しいからタダでくれるの。」

「(それは…下心だろ)…そうか。」

そうキースが思ってるなんて露知らず、いそいそと食事の準備をした。熱を留めることのできる魔法がこめられた小さな水筒にはコンソメスープ。もう一つには紅茶。てきぱきと広げて紅茶だけは二人分いれ私もキースの横に座った。さつきロイたちと食べていたとき赤々として瑞々しいトマトは輝いていたのにキースが持つとトマトもかすんで見える。いや、トマトと比べる自体間違ってるのか…

冗談ぬきにしてもキースは、なんて言うか…美丈夫というか。ロイとバルトも顔は整っているせいで、どんな男の人を見てもカッコいいとは思わなかったのに。それでもキースはカッコいいと思ったなあ…。お父様のお父様：私のお爺様の肖像画に書かれている姿と少し似ていた。

「いただきます。」

「美味しくないかもしれないから期待はしないでね?」

「お世辞は言えないから、期待すんなよ?」

「もっつ!」

いらぬこと言わぬの！と軽く肩を叩いた。キースは豪快に一口食べ、もぐもぐと口を動かして一言。

「…トマト本当に上手いな」

「ばかぁ！」

「うそうそ、上手いって。」

「そんな後付けされても嬉しくないっ！」

「ははは、悪かったって」

「もっつ」

申し訳ないとは絶対に思っていないであろうキースを一睨みする。素知らぬ顔で食べ続けるキースに不味くはなかたみたい、と安心した。以前、思ったようにロイとバルト以外、男性で親しい人がいなかった自分は、キースとの距離を間違えたりしていかないかが不安だったが今日、一緒にいてみてとくに違和感はない筋肉痛だの、打ち身をして全身が痛い、ブツブツ文句を言っていた。（そのわりに凄く楽しそうに話すけど）

たくさん話して間に少しづつキースのことを知れた。今年二十五歳になるらしく、今十七歳の私とは八歳の差がある。それを感じさせないのはキースの悪戯好きな少年のようなところだと思う。いつも私を意地悪な笑顔を浮かべながら、からかってくるのは頂けない

……。

「ディア」

「キースッ」

「今日は早いな」

「うん、今日はね！コーンミールケーキを焼いたのっ」

「おっ」

「でも紅茶忘れたの！もう一生の不覚だよー」

「…じゃ、中で淹れるか？」

「ええ?!」

「バレなきゃ何でも良いんだよ」

「でもっ…」

そういう問題じゃない気がする…それでも乗り気になったキースに何を言っても無駄だと諦めた。私はかなり乗り気はしない。ここはガイヤ城…何かあってバレればキースが怒られたりするの、申し訳なさすぎる。

「こっちはあまり人も通らない宮なんだ」

「そうなの？」

「ああ、だから…この庭園にも人はいないだろ？」

「確かに…」

そう言いながらも進んでいくキースの後ろを警戒しながら歩いた。慣れた手つきで窓に手をかけると、そこは給湯室のようなところだった。棚いっぱい紅茶やら珈琲やら、たくさん種類が置いてあった。違う棚にはいかにも高そうなカップがあつて、少し尻ごみした。

「うわあ〜いっぱい種類がある」

「どれがどれだか…」

「あ、ジャクソンのアールグレイもある…アッサムも…セイロンも…あ、ドルトンのだ」

「…詳しいな」

「うん、アイリスではモーニングティーにアフタヌーンティーもあったから」

「…そうか」

「ウェッジウッドのティーセットもあるっ！私もこの蒼白は持ってた！」

「…ディアア？」

「あ、ごめん。何だか懐かしくて、すぐ淹れるね」

懐かしい器具を出して紅茶を淹れる。懐かしい香りが漂う。やっぱり、ちゃんと器具をそろえて順序を守るだけで、いつもより何倍も美味しい紅茶が出来る。それは懐かしくて、それでいて、とても身に馴染む。遠慮したけど、そのまま隣の豪華絢爛な部屋で座ってコーンミールケーキと紅茶を頂いた。やっぱり紅茶があるとなじや変わるなあ…。

「ディアはアイリスのどこら辺に住んでたんだ？」

「え？…ああ…えっと色々なところを転々としてたから、あまり小さいときの記憶はないの。物心ついてからは王都に住んでたよ。」

「…そうか」

今までアイリスのことなんて聞かれなかったから、少し焦った。チクッと痛む胸を抑え込んで笑顔を浮かべるけど何とも言えない罪悪感でぐしゃぐしゃになった。

「アイリスでのことは聞かれなくなかったか？」

「あ…ううん、ちょっと…色々、思い出してボーっとしちゃった」

「そうか、悪いな」

「ううん、だいじょうぶ…」

ザワつく。何かが起こる前触れのように。おさまることなく留まる。さっきまでおいしかった紅茶もケーキも味が消えていく。ここには…もう来ちゃいけないって警告が聞こえる。それでも私は…自分の感情を最優先してロイとバルトを傷つける。なのに…分かっているのに。どうして、分からないんだろう。

今日の決断を私は、いつか運命と呼べるのだろうか。

日常への変化（後書き）

すいません、紅茶の種類はこの世界の地名を入れちゃいました…

疑惑（前書き）

前の話から視点が変わっています。読みにくいかもしれませんが、
どうぞこのままでも願います。

疑惑

あそこにあつたのは最高級の茶葉だ。ティーセットも普通の家じや買えない代物。なのに懐かしいと言つた…確かにアイリスでは紅茶を飲む習慣があるが、それは王族や貴族などの上の者だけと聞く。ディアは兵士の家柄と思つていたが違ふのか？元々ディアの物腰や喋り方…一番最初に会つた時も作法や身のこなしがとても美しくぬかりなかつた…それを考えると貴族の出か…？なんで貴族が…他国に移住を？兄とされている二人は兵士とし従軍し…ディアは、兄への差し入れで毎日、登城している。

間諜か…？

いや…それにしては純真すぎる。あれがワザとは思えない。ディアは普段、暖色系のワンピースを着てる。ふんわりと裾が広がり動くたびに揺れる。あれが上等の布と製織されていれば…間違ひなく上流階級の者だ。いや…違う。ディアは何を着ていても華やかだ。宝石など付ける必要がない。プラチナに薄くピンクが混ざつたオーロラのように輝く長い髪。何処までも琥珀の淡く美しい瞳。甘く匂いまでも香りそうな唇。

恋焦がれ、渴望するアイリスの皇女に見えただろうか。アイリス出身だからなのか、ディアも自然を愛し花を愛でている。その姿に、

幼いころのアイリス皇女を思い出す。火災で死んだという彼女は、最期にあの美しいダリアを見つめ、何をおもったのだろうか。

「キース様？」

「ああ…ネイトか。」

腹心ともいえる男を軽くあしらって、思考をめぐらす。それでも答えは出ない。俺が何者か知っていて接触しているとすれば、ディアのことを知ったネイトは迷わず剣を抜くだろう。頼りになりすぎるネイトには黙っていたほうが利口だろう。まだ証拠もない。それに…出来れば全て俺の気のせいであってほしい。

「侍従長から聞きましたが…最近、昼食を取らずにダリアの宮へ行かれるとか。」

「…食より睡眠が欲しいんだよ。」

「そうですね、しかしお食事もなさりませんと。」

「分かってる、心配はいらん。」

「…何か、ありましたか？」

「いや…ナイト、この城で優秀な侍女を1人ダリアの宮へ連れてこい。」

「?かしこまりました。」

綺麗にお辞儀をして出て行ったナイトの背中を見送り、俺は手で頭をかいた。

「お前は何者なんだ……ディア。」

*

今日、ディアと入った小さな部屋。通常、侍女たちが出入りする給湯室。茶葉が溢れかえりそんなほどある場所で怪訝そうに眉を寄せる侍女が丁寧な頭を下げて言葉を紡いだ。

「侍従長よりの推薦で参りました、侍女のシュリです。」

「悪いな。」

「いえ…なにか？」

「ここにあるもの全ての名前を言えるか？」

「紅茶の…種類ですか？」

「ああ。」

意味が分からないとでも言いたげな侍女は、周りを見渡し深々と一礼する。

「申し訳ありませんが、こちらには各地の茶葉が御座います。国内産や著名な茶葉なら分かりますが全ては分かりかねます。」

「そうか、悪かったな。さがってくれ。」

「…はい。」

出て行った侍女を見送って、そのまま庭園に出た。昼間、ディアの横で見るダリアとは一味違う。夜に咲くダリアもまた美しいが少しだけ味気なかった。違う、ディアが居ないからだ、きっと。ダリアの花が、ひどく似合う女だ。その香りは今や彼女に染みつき甘みな色味を持って漂ってる。ディアの触れるダリアは美しく、まるで喜ぶように花を咲かせる。ディアが来るようになって、ここのダリアは一層、美しく咲くようになった気さえする。それは…まるで庭園を異世界だと思わせるほどの彼女の美貌のせいだった。

「は、重傷だな…。」

吐き捨てた言葉を風がさらっていく。裏切りには慣れてる。昔から幾度となくされてきたからだ。近しい者から裏切られた時も動揺することもなく前例に従い罰を下したし。胸が痛んだこともなかった。なのに。もしかしたら、と思うだけで今は潰れそうなほどに胸が痛い。

弱い心など、とうに捨てた。自分は、それを踏みつぶし前へ進んでいかねばならないのに。

*

次の日も庭園を訪れたディアはニコニコと笑いながら、俺の隣に座る。昨夜から色々、頭の中に良からぬことがよぎった。でも、止めよう。疑うだけじゃ何も育たないと昔、親父が言っていた気がする。今はただ、この時間を大切にしたい。それだけだ。

「今日はねスコーンを焼いたの。付け合わせはポーチドサーモンです。」

「うまそー。」

「でしょ?」

「ん…だんだん上手くなってるな。」

「本当に?嬉しい。」

「スコーンも久しぶりに食べた。」

ナイトが用意するこつてりとした料理は腹は満たされるが、なんとく胃がもたれる。たまには、こういうのも用意させようと思いつながら、久しぶりのスコーンを味わう。料理人が腕をふるった料理じゃない。どちらかといえば国民が食べる料理であろう、質素な料理が彼女の手で変わっていく。差し出されるポーチドサーモンは、何度も見たことがあるにも関わらず、いつもより美味しそうだ。

自分は…かなり単純なのかもしれない。

「最近、麦がとても安いと皆が喜んでるの。もちろん私もね。」

「ああ…今年は帝国内の麦も豊作だからな。それに他国から輸入もされている。麦は今年潤うが…。」

「どうしたの？」

「国内に麦が溢れば物価は安くなる。他国の麦が売れば帝国内の農家は困るだろ？」

「あ…そっか…。」

「今こつちも危惧してんだ、どーしたもんか。」

「…輸入麦に関税をかけたら？そうすれば他国も輸出を抑えるだろうし。私たちは安い国内産の麦を買うようになるもの。物価は安定しない？」

「……………」

「キース？」

「ああ…それがいい…さっそく提案してみるよ。」

兵士の家だ。知識を持っていることはおかしくない。報告では兄

2人も博識といえるほど学問を扱うことが出来ると聞いている。妹のディアが、それを持っているのもおかしいことではない。なのに、どうして、こんなにも引つかかる？見た目、立ち振る舞い、言葉、知識。それを持っている一般人なんて、どこにでも居るとは思えない。

「キース？」

「あ、悪い。」

「ううん、少し顔色悪いよ。私もう帰るよ。ゆっくり休んでね。」

「悪い。」

「ううん、それじゃ。バイバイ。」

「ああ。」

疑っている自分が許せない。いつも無防備に笑顔を見せるディアを。信じたいはずだったのに。それだけだったのに。偽りを述べているのは自分も同じなのに。どうして許せないか。どうして…彼女を責め立てたくなるのか。

自分は…何がしたいのだろうか。

*

「ディア。」

「っ。」

体調の悪そうなキースに不安を覚えながら慣れた道を歩いて帰路についていると、目の前にロイとバルトが険しい顔をしながら立っていた。会話ははずがない。いつもなら、このまま慣れた道を歩き門を超えることが出来るのに。今日は、どうして二人が居るのだろうか。

考えなくても分かる。自分のことを心配した二人は、帰宅が襲い

のを門兵からでも聞いたのだろう。そして、こつやって私を守るために自分を悪者にする。そして……私はいつも彼らを悪者にしてしまふ。

誰かのせいに出来ることじゃないのに。全て、自分で背負うと決めたのに。愛は過去にあるものだとは知っているのに。なのに。新しいものを欲しがるのは罪であり罰なのであろう。

「ど……したの……？」

「おかしいと思ってた。最近……ディアの身体にダリアの香りが染みついてるのも。多めにある昼飯も全部。」

問いただすような視線に胸が締め付けられる。俯いても感じる。2人の責めるような瞳を見ることなんて出来なくて。私が悪いつて分かってる。心配してくれてる2人の言いつけを破ったのは私だから。自分の立場も弁 わきま えず勝手な行動を取って、2人まで危険にさらしていたんだ。

私の身分が知れば二人は逃げるだけでは済まされない。一生、逃げ続けたって追われ続ける。それを覚悟してくれていたのに。

「じめんなさ…っ！」

「もう行くな。」

「っ…。」

「ディア、もう行くな。」

「……はい。」

真剣なバルトの声色に、どれほど馬鹿げたことをしていたか気付かされる。これ以上、誰かを傷つけることなんて絶対にしないと決めたのに。私は傲慢だ。

知っていたのに。彼らが何を犠牲にして自分のそばにいてくれるか、知っていたのに。私は、それを裏切り踏みにじり…二人を傷つけた。

「…泣かないで下さい。」

「じめ…っ…じめんなさ…っ。」

「いえ、城に呼んでいた俺たちも悪いです。」

「ちがつ…悪くないっ…二人は…っ私が…!!」

「もう、怒ってません。早退してきたので、このまま一緒に帰りましょう。」

「っ…うん…。」

差し伸べられたロイの腕に縋りつく私は弱い。卑怯で傲慢な最低の人間だ。離れなきゃいけないと分かっているにも2人を離すことは出来ずに、ここまで世話をかけて。謝っても謝り切れない。

「今日は俺が腕によりをかけて晩飯を作ってる!。」

「…うん、楽しみ。」

三人で少し早い時間に家に帰ってきた。そのままバルトはキッチンに立って、ロイは紅茶を淹れてくれる。私は居間の椅子に座った。ロイが紅茶を出してくれて、私の対面に座った。

「…ロイ、バルト。」

「はい。」

「ん?。」

「話がある。」

何かを悟ったようにバルトは手に持っていた食材を置いて、ロイの横に座った。私はすっかりと前を見据えて2人を見た。まだ残ってる罪悪感をギュッと握りしめるように胸の中で潰した。

「明日を最期にする。」

「ディア……?」

「…私…凄く救われたの。あそこで会っていた人に。だからお礼を言いたい。言っつてすぐに帰ってくる、その後は一生会わない。」

「…相手はディアに気付いていないんですね。」

「うん。」

「……………分かりました。話が終わったら声を掛けてください。明日も一緒に帰りましょう。」

「ディアは頑固だからな、しゃあない。」

「…ありがとう、二人とも。」

気遣わしげな瞳に出来る限り笑顔を返す。さようなら、と伝えられることは幸せだ。二人の優しさに感謝しつつ、罪悪感が増していくばかり。ひとりで世界を彷徨っていた時、手を差し伸べてくれた二人を裏切ることなんて出来ない。

一人では生きられないと、私は知っている。誰かに縋り、支えられ私は、やっと生きることが出来るんだ。

そして、その私の行動に誰かが…犠牲になることも知っている。

真実

俺たちは第三鍛練場にいるから、済んだらすぐ来いよ。

お昼を食べ終え、キースの元へ行こうとする私に、そう告げた二人に笑顔で頷いた。そして歩きなれてしまった庭園への道を歩く。一日考えても、やっぱり会わない方がいいと思った。文官といえどキースの立ち振る舞いを見ても高貴な位についているのは一目瞭然だし、それがいつか危険と繋がらないとも言いきれない。

宮へ立ち入れることを考えても皇子：または皇帝の側近だろう。公爵、侯爵：言い始めればきりがなが、早めに縁を切るにこしたことはない。自分の中で、様々に鎮座する感情は簡単に拭い去ることは出来ないけれど。それでも確実といえるほどロイとバルトの存在は大きい。

私のために自分を犠牲にする二人だから。私は迷うことなんて許されない。実際は、キースと会うことさえも、してはいけないことだったんだ。

「キース。」

「ディア。」

名前を呼び合うのも。視線を交わして、他愛ない会話に花を咲かすのも。一緒にダリアを見るのも全て。今日で最期にする。

「もう体調はいいの？」

「ああ、昨日は悪かったな。」

「ううん、良かった。」

「…今日はディアが体調悪そうだな。」

心配そうに寄せられた眉に私は居た堪れなくなって俯く。そんな私の頬に優しげに…それでも遠慮がちにキース手が伸びてくる。

何度も会った…色々なことを話した。けど…キースはいつも触れてはこなかったのに。どうして…今日に限って触れたりするの…？

「ディア…俺は……。」

少しだけ憂いを含んだ声にはっとして顔をあげる。蒼瞳は微かに熱を含んで、それでも不安げに揺れていた。どうして…そんな瞳をしているの？

「ディアとの時間を…誰にも邪魔されたくない。」

「キース…。」

「ディア。」

ふいに呟くような声で、そう言ったキースの手が、さっきのように頬に伸ばされる。慈しむように触られて…胸が高鳴る。大切に触られることはよくあるし、あった。両親もロイもバルトも私に触れるときは優しい。愛しさを感じるほどに穏やかに触れてくれたから。でもキースのそれは少し違う。熱が籠こもった瞳が誰とも重ならない。

「…あ……………」

そつと蒼瞳が閉じて、一瞬後…柔らかく熱に近い温もりが唇に触れた。キースが色をつけた私の名前に身体の自由を奪われたように身動きが取れない。親愛の象徴としてのキスは何度も…してきたし、されてきたのに。どうして…こんなにも胸が熱くなるの？どうして…そんな瞳で見つめるの？

「…話してほしい。」

「え？」

「ディアのことを。」

「あた、し…のこ、と？」

夢見心地だった私を現実に引き戻すほど真剣な声。悪戯に笑うキースは今、どこにも居ない。真実を求める瞳に私は心が再び凍りつ

くを感じた。

「ずっと不思議だった。喋り方や身のこなしが…普通の女とは思えない。教養もあって市民というより…まるで上流貴族だ。」

「……………っ。」

「兵士の家系とは思えない。」

「……………」

「ディア……………」

「……………ごめんなさい……………」

「……………話せないのか?。」

「……………っうん……………」

それは出来ないこと。どれだけ話したくても話せない……………違う、話したくない。自分の命にどれだけの犠牲があつたのかなんて……………私には話せないよ。どうして自分だけ幸せになることが出来るの?

被害妄想とも違い、これは現実。私は幸せにはなれない。

「知りたいんだ…ディア。」

「ごめ…っごめんな、さ…っ。」

夢じゃないの。夢じゃなかったんだよ。血の赤も火の赤も全部、全部。夢なんかじゃなかったの。現実はあまりにもむごくて希望さえも打ち消したの。でも、ロイとバルトが居てくれた。あの二人だけは絶対に犠牲になんてしたくないの。だから私は選択を間違えたくない。迷いは、もう捨てた。

「ディア…頼む。」

「もう、会わない。」

早く、早く。動かなきゃいけない。ここを一刻も早く離れなきゃ。二人が待っている。平穩は人生を送れるように自分たちの夢も家も全て捨ててくれた二人が。私が…笑っていられるようにと苦勞する二人が。

「…ディア……………！」

「会わない。」

「待て！」

「会いたくない！」

必死に動かしただ足がもつれるのを何とか堪えて、もう一步前に出す。でも掴まれてしまった腕が邪魔をしてキースの胸に飛び込む形になってしまった。触れてしまえば…離れがたくなるのに。

抱きとめるようにまわされた腕。私は動くことも出来ずに呆然とする。過去。こんなにも熱が蠢くことがあつただろうか。母や父に抱きしめられた時。愛情を一身に受け止めるとき。こんなにも胸は高鳴っただろうか。

「っ…！ディア……そ、れ…！？」

「…あ……。」

キースに抱きとめられた腕の中で彼を見上げると、その視線が私の左耳に向けられていた。これは…絶対に見られちゃいけないものなのに。産まれてすぐに付けられたピアス。ある紋章を囲うように描かれたダリアの花。

「それは…アイリスの皇族が…皇位継承権のある皇子、皇女のみが…
…することを許されるというピアスじゃないのか？そのピアスにはア

イリスの紋章とともに、己を象徴する花が描かれる…それは…ダリアの花だ。ダリアの花を紋章に付けているのは…第一皇女…！クレイ…ッ」

「っ」

それ以上はダメだと、思った瞬間。抱きしめられていた身体が自由になる。目の前には私を庇うようにキースとの間に立つロイだった。

「お下がりにください、ディア様。」

「ロイ…。」

「バルト、ディア様を連れて行け。」

「ロイ…？や、めて…お願い…」

「ディア様…こちらに急いでっ。」

控えていたバルトに手を掴まれて身体ごと動かされる。違う。こんな風になってほしくないから…私はここへ来たのに。

「いやっ！もう嫌なの！自分の所為で誰か死ぬのは！」

必死に叫ぶ。お願いだから、もう誰も私の前で死なないで。私に全てを託したりしないで。私に背を向けて、私を守るロイが、あの人たちと重なる。どうして。自分は生きることしかできないのだから。人の死の上に生きているのに…私は、どうして人の死の上にか生きられないのだから。

「ディア様…。」

「早くしろ、バルト！何があっても逃げ切れ！」

「ロイ！」

私の言葉に一瞬、止まったバルトの間隙を見て私は諫めるようにロイの名前を大きく叫ぶ。お願いだから、もう誰も犠牲にならないで。もう…誰かに置いて行かれるのは嫌。もう、誰かの命の上に生きるのは…嫌なの。

「陛下?!」

「ネイトツ」

「みな出会え、皇帝陛下に刃を向ける者を捕えよ！」

「騒ぐな！」

突然、出てきた男の人の言葉に驚く暇もなく異常に気付いた軍服を着た人たちが数名、現れる。その中には以前、見た二人の上司である総帥の姿もあって、サーと血の気がひく。彼らは一斉に剣を抜き、私の前に居るロイへ切っ先を向けた。

「皇帝陛下！お下がりにください！！」

「っキースが皇帝……？」

やっと耳に捉えた言葉を理解し啞然とする。文官ではなかった。私はガイヤ皇帝と一緒に居た……？ ……違う。今はそんなことを言っている暇はない。私のすべきことは、他にある。この場を一滴の血も流すことなく終わらせるには、どうしなきゃいけないかなんて……答えは簡単だ。

「急げ！バルト……！」

「……………やめよ……。」

「え？」

焦り出したロイの声にかぶせるように言葉を落とす。不思議なくらい心は落ち付いている。

「みな、剣をおさめよ。」

その声色を聞いたバルトとロイは覚悟を決めた。というより本能で言葉を聞きいれてくれた。持っていた剣をさやに収め、私の目の前にひざまずく。本来、私は守られる者ではない。人を守る側の人間だ。何を失っても、私にはしなげないことがあるんだ。いつか父に教えられたとおり、大きく息を吸って顎を引き、前を見据える。胸を少し張り堂々と声をあげた。それは私の全て。私という存在を気付けさせるために。

「聞こえぬか！アイリス帝国第一皇女クレイディア・シュゼール」
「ダリア・アイリスの命であるぞ！」

カラン、と軍人たちから剣が離れる。持ち手を失った剣は地面に横たわる。ダリアの花とは不釣り合いな剣は、もう意味を持たない。

「……隊長方、頭が高こつございます。こちらしにおわしますのは、

アイリス帝国先帝シユリウス陛下、唯一のご皇女様：ならびに現帝ロークランド陛下の妹君…：クレイディア様に御座います。」

ロイが立ちつくした人たちを一瞥し慎重に言葉を紡ぐ。ハツとした軍人たちはロイの言葉に身体を動かし同じように地面に膝をついた。深々と下げられた頭にホツと安堵が広がる。そんな中、膝を折ることがない人が一人。他国の王さえ平伏させる存在。この大陸で何より重んじられる存在。

「…申し遅れました、偉大なる皇帝キース陛下。陛下の御察しのとおり私はアイリス帝国第一皇女クレイディア・シユゼール^{わたくし}ダリア・アイリスにございます。存せぬことはいえ皇帝陛下への無礼な言動…心よりお詫び申し上げます。」

今はキースが皇帝であったことに驚くことはするべきではない。アイリスにいる兄が皇帝であろうが、先帝の皇女であろうが、この人には遠く及ばない。今までも皇女である私が膝を折る相手はそうはいないが、皇帝は別だ。自国で皇帝にのみする最高礼をとる。

「…クレイディア姫は先日の火災で亡くなったはずだ。」

「あれは私の侍女に御座います。」

「侍女だと？」

「はい。私が逃げ伸びるために、その命を絶つように命じました。」

口を出る言葉にどんどんキースの顔が険しくなる。どんなことを私がしてきたか。皇帝には嘘をつくことは許されない。

「……………なに?。」

「どちらにしても、主である私を逃がした罪により重い罰が下ることでしょう。ならば、最期にも私の役わたくしに立つようと、命じたのです。」

「……………そなたがクレイディア皇女という証はあるか?。」

「私の身分を証明する唯一のものが…このピアスに御座ます。アイリス帝国の紋章にダリアの花をつけるのは…名にもダリアを持つ私のみ。このピアスは産まれたときに皇位継承権のある皇女、皇子に付けられ一生外すことは出来ません。」

「偽造ということは?。」

「ありえませんが、このピアスの製造法、帝国の紋章のデザイン画は門外不出。それらを閲覧できるのは皇帝のみに御座います。」

「そうか。」

一通り質問に答え、少しだけ隙のあいた一瞬。私は深々と頭を下げた。

「偉大なる皇帝陛下にお願い申し上げます。この両名は私の命に從い、ここまで付き従したごうてくれました。従軍せよと命じたのも私に御座います。ゆえに両名には虚偽はなく、一切が私の責にあるものでございます。どうぞ、ご寛大なる皇帝陛下のこと…両名をこのままこの国で住まわさせては頂けませんでしょうか。私は、いかなる罰をも受けましょう。」

「姫様っ！」

驚いた声を出す二人を目線で諫め、そつとキースを見上げる。ガイヤ帝国とアイリス帝国は、この大陸に二つしかない”帝国”だ。両国間に争いが起こると、この大陸全土を巻き込むことになる。私の出自が露見した今、両国間に問題を起こすことは許されない。

ガイヤはアイリスに連絡を取り私を帰国させなければいけない。でもロイとバルトだけは連れて行きたくない。他国にいるより自国にいたほうが二人には迷惑をかけるだけだ。

出来れば…ガイヤで新しい生活を続けてほしかった。私という足枷を外して。

「ディア、俺を見る。」

「……………」

「ディア。」

「……………はい。」

下げていた視線を上げる。さつきまで、とても近くで見つめ合っていた蒼瞳が厳しさを持って私を見据えていた。それでも…私は絶対に逸らすことは出来ない。私が、皇女であるかぎり。

「なぜアイリス帝国から亡命した？」

「…盗賊に襲われました。皇居であるアイリス城の居住居に…あの火災の日。私は盗賊に襲われたのです。それを免れはしましたが、盗賊団とその後ろ盾が判明するまでアイリスには安住の地は望めないと判断しロイとバルトのみをつれガイヤへ参りました。」

「アイリスの皇帝は知っているのか？」

「……………いいえ。誰かが仕向けたものならば、という懸念からアイリスの者には誰ひとりとして知らせておりません。」

「何故、侍女を身代わりにした。」

「一瞬の判断です。火災が起こっても、そこに遺体がなければ私を

搜索する盗賊たちの動きは止まらない。せめて亡命するまで時間稼ぎが出来ないか、と考え。とっさに侍女に命じたのです。私がドレスを着せ宝石をつけ着飾らし、彼女に火を付けました。」

峻厳な声色にもブレることはない。私が殺した侍女のことも亡命した本当理由は誰にも知られてはいけないから。

「…分かった、幸いこの場には俺の信頼する隊長しか居ない。緘口令をひけば情報が外に漏れることはない。二人にもこのまま住ませよう。」

「…ありがとうございます。」

「…ディアもだ。」

「え?」

「両名の妹として俺の妻になれ。」

「なっ?!」

驚いた声をあげたロイとバルトを一瞥した後、私に向き直る。言葉さえ出ない。妻になれということはアイリスに帰らされないということ。それに少しでもだけ安堵が広がった。その考えにハツとして、もう一度頭を下げる。

「恐れながら申し上げます。アイリスの皇女である私を国に留めるは、いずれガイヤ帝国の不利益となりましょう。」

「皇帝である俺を見損なうな。亡命せねばならない国に返すほど非道ではない。それに皇女と知った以上、しかるべき対応をするのが皇帝である俺の役目だ。」

「……しかしっ」

「これは譲歩した結果だ。」

威厳のある声が響き、私は言葉を飲みこんだ。そして同じように深く一礼をする。

「……心より……お伝えさせて頂きます。」

「ナイト、ディアを部屋に案内しろ。」

「は。」

ナイトと呼ばれた人が私に遠慮がちに伸ばした。それを反射的に払い私を庇うように立った二人。その行動に一瞬、空気が凍りつく。すぐに私は立ちあがって、そっと二人に触れる。

いつも守ってくれたね。見慣れた二人の背中。そつと二人の手を両手で握る。

「大丈夫です。これ以上の干渉は不要。下がりなさい。」

「姫様っ！」

「ロイ・セルビア・トゥーリ、並びにバルト・セルビア・トゥーリ。」

久しぶりに二人の真名を呼ぶ。再び私の前に膝まづいた二人に精一杯の虚勢を張る。

「長きに渡ったクレイディア・シュゼール、ダリア・アイリス護衛の任をときます。これよりはガイヤ帝国に、ひいては皇帝陛下へ限らない忠誠を。」

「……………」

言葉を発しない二人を見てグツと拳を握る。どうか幸せであるように祈ることしか出来ないけど。それでも何にも代えがたい二人だから。私はそつとガイヤの従者の手を取り二人の横を通りすぎた。

*

連れ行かれた部屋は、アイリスでの住居と似たような豪華な造りだった。私は小さく息を吐いた。

「クレイディア様、こちらが仮部屋になります。明日中には移動出来ますように手配しておきますので、今日はご辛抱下さい。侍女は必要なだけ付けますが、何名がよろしいですか？」

「……お気づかいは無用です……アイリス皇女は死んだのですから……ディアとお呼びください。」

「……ディア様……何故……皇女様とあるうお方がこのように亡命を……訳があるなら陛下にご相談なさいませ、きっとお力になってくれましょう。」

「…私は自分の役目を知っているつもりです。もとより生きる意味のなかった私に生きることと義務付けたのは亡くなった母と侍女です。両名の死を、これからの生涯で弔うのが私の役目。」

「ディア様…。」

「幸せになることではないんですよ、それに…ガイヤ帝国にこのようにしてもらおう義理も恩もありません。私はそこまで厚かましくはありませんよ。」

微笑みを張りつけた顔で従者を見て、さがってほしいと伝えると複雑な表情を浮かべて一礼した後、部屋を出て行ってくれた。安心して力が抜けた。そのまま近くにあった柔らかいソファーに身を沈める。何度も笑い合ったキースが皇帝で。私の出自も知られた。もう二度と会わないと決めていたキースの妻になって部屋を与えられて。結局、自分を…ロイとバルトを追いこんだのは私自身だったんだ。

…何も変わっていないのかな

「ディア。」

気付かない間に開いた扉から先ほどとは違って穏やかな表情をしたキースが入ってきた。私はすぐに立ち上がり最高礼をして迎えた。

「…皇帝陛下。」

「キースでいい。」

「いえ…それは……。」

「ディア。」

諫めるような声には私は自分を折ることなく顔だけを上げて言う。

「皇帝陛下……陛下の慈悲深いお沙汰に感謝しております。取るに足らぬ一命をかけまして、お仕えする所存にございます。」

「…頑固だな、ディアは。」

「…。」

しょうがない。これが皇帝と皇女という違い。知らなかった頃は、もう戻れない。一緒に地面に腰をおろして食事することも内緒のおしゃべりも…もうすることはない。

「コレを渡しに来ただけだ。」

「あ…。」

強引に手に握らされたダリアの花。香る匂いに緊張がとがされていく。まるで二時間前に戻ったようで、目頭がかすかに熱くなる。大きく息を吸って、落ち着かせると小さく笑った。

「ありがとうございます。」

「それじゃ、おやすみ。」

「はい。」

キースが出て行ったあと、入れ替わるように侍女が三人入ってきた。私はなるがままに身も任せ、湯浴みも着替えも済ませた。知らない人に裸を見られることも洗われることにも抵抗はなく、懐かしい気さえした。柔らかい夜着に多少の違和感を感じながら侍女をさがらせ、ゆっくりと寝台に入る。これから…私はどうなるんだろう。このままで居ることは出来ない。それは分かっている。いずれ…アイリスに帰らなければいけないことも。それが、どうか自分のみの犠牲で済んでほしいと今は祈るばかりだった。

側妃（前書き）

キース視点とディア視点で分かります。
そして最後はナイトです。

側妃

俺はディアの部屋を出て真っ直ぐに執務室に向かう。するべきことは、まだあったからだ。ディアに信用の出来る侍女を数名つけ部屋の扉に屈強の兵を立たせている。緘口令もひき、彼女の存在を知り得るものをいないだろう。

「さて…お前ら二人だが。ここに住ませると言ったものの、俺に仕える気はあるのか？」

部屋に入りソファに座る。目の前に対峙した二人の男。先ほどディアが呼んだ名字を聞き、すぐに分かった。アイリスの有力な騎士家の長男と次男が揃って敵意の視線を送ってきて、苦笑いをこぼした。いつでも忠誠と強さをかねそろえた者を輩出し初代アイリス帝国皇帝の妻である魔女トゥーリの血も引き継ぐ、爵位など必要なほどアイリスでは権力が強いという。セルビア・トゥーリという家名。

さすがというべきか、その二人を護衛につかしている時点でディアの身分は証明されたようなものだった。

「姫様が貴方に仕えよと申されれば、この命をかけて仕えます。」

優しげな見た目からは想像できない冷たい声。ロイ、と彼女に呼ばれていた男は先ほどから空気を凍てつかせている。彼女を背に庇い弟に託した彼の行動は称賛すべきものだろう。あの場で一人、残るということは…死を意味することだった。それを止めたのは、たった一人の女性だった。そつと溜息をつく。想い深い主を奪われた従者として当たり前なのかもしれない。

「俺とディア、どちらかの命しか救えない場面で…お前らはどうする。」

「愚問ですね、俺たちはディア様のために生きている。」

「…アイリスと対抗することになってるか。」

「アイリスに忠誠を誓ったのは姫様がお住まいの国であるということと、姫様がアイリスの皇女だからこそ。何より姫様はアイリスを愛しておられる。もとより家にも国にも未練はありません。」

「もし姫様がアイリスを滅ぼせと命じれば、何が何でも潰しますよ。」

深すぎる忠誠心に不快感が襲う。主と従者の関係を逸脱していると思うのは俺だけか？二人さして、あたりまえのように言ったが、それは反逆ととられても、しょうがないものだ。しかし、言い淀むことなくハッキリと告げた。

「…その様子だと、ディアが亡命した本当の理由についても、どうせ喋らんな。」

「盗賊に襲われた、と姫様は仰いましたが。」

「盗賊などにアイリスの騎士たちが負けるとは思えん。一度、襲われた皇女であれば尚更、護衛を多くし守り続けるだろう。例え何人も犠牲になろうがな。」

「…どう思おうが勝手ですが、姫様が仰らないことを私共が言うこととはありません。」

「それは頼もしい。二人には俺の妻ディア・シュゼールの護衛の任を与える。その命を持って仕えよ。」

少なくとも驚いた表情の二人に笑いかける。

「俺は悪魔じゃないんだぞ、それにディアもお前たちのことを思っ
ての行動だろう。」

「言われなくても分かっています。」

その言葉に軽く笑って呼び鈴を鳴らす。

「お呼びでしょうか、陛下。」

「ネイト、二人に宮内の部屋を用意しろ。明日よりディアの護衛をさせる。」

「かしこまりました。それでも御一方、こちらへ。」

建前に礼をする二人。不躰だがディアを守る者として、これ以上の適任はいない。ディアにとっても、善良の選択だろう。

「お前たちも下がれ。」

部屋の端で立っていた侍女を下がらせて、やっと息をつく。

ディアがクレイディア皇女…。全ての謎が解けたんだ。それも最高の形で。知らず知らず笑みがこぼれる。

「アイリスの皇女がガイヤに亡命…か。」

理由は知らないにしても異常だとは分かる。確かクレイディア皇女の死亡が伝えられたのと同じ時期に先帝の側妃であり皇女の母である側妃のクラリス妃が亡くなったというのは聞いていた。一部では母を追っての自殺とも騒がれたからだ。

その数ヶ月前には先帝でありディアの父も病に倒れた。続いた二人の死が何か関係しているのは分かり切っている。現帝のロークランド皇帝には数回、会ったことはあるが先帝にも劣らない手腕だった、弟の軍部総帥のイーサンも芯のある人だったと記憶している。

美しいクラリス妃から産まれた唯一のクレイディア皇女は、それを受け継ぎ…美しいと大陸では有名なウワサだった。降り注ぐような縁談の話しを先帝は断り続け、現帝になってもそれは続いていた。よほど大切にされていると聞いていた。母親違いだ、上の兄二人とは仲が良いとも記憶してる。そんな兄たちが、妹の一大事に何もしなかったとは思えない。ディアは二人には相談せずに独断で国を出たというなら、それこそ異常だ。

盗賊などにアイリスの真の皇族、二人が負けるとは思えない。あれは建前の言い訳だろう。きっと誰にも言えない理由があり亡命したはずだ。考えても答えには辿りつかない。真実はディアのみが持つものだから。

「ダリア姫…か。」

勝手に刻まれた微笑みを抑えて、自室に戻った。世話をする侍女にディアの様子を聞くと、もうお休みになりました、と聞いて安心した。会うことはないと思っていた。皇女死去の一報を聞き、かの人を求めるようにダリアの庭園へ足を向けていた俺としては、目の前にその人が居たということは幸運でしかない。亡命しようが、彼女はアイリスの皇女だ。

容易に会うことは出来ない、彼女が目の前に居る。この好機を逃すほど腑抜けてはいない。

* * * * *

「ん……。」

柔らかいシーツに違和感を感じながら身体を起こす。見慣れない部屋に一気に現実に戻された。昨日のことはどうやら現実らしい。私は…ディア・シュゼールとしてキースの妻になったんだ。何故か妻になったことに対して不快さはない。憂慮しなければいけないという緊張感のみ。

「失礼いたします。私は皇帝陛下より姫様のお世話をするように命じられました。シュリにございます。」

しっかりと音がコンコンと響いた後、ゆっくりと開いたドアから一人の侍女らしき人が入ってきた。紺を基調としたシンプルな造りのひざ丈のワンピースに実用性のありそうな白いエプロンを着ている。茶色の長い髪をハーフアップさせて、丁寧に頭を下げてくれた。

「そですか…よろしく。」

「お召し物を、お代えいたします。」

「はい。」

似てる…背格好が。身分をこえ友人として仕え続けてくれた彼女と。懐かしいと思うよりも悲しみが勝る。

「っ」

「姫様…？泣いていらっしやるのですか？」

「…っ…っめんなさい。」

「いえ…大丈夫ですか？」

「何もありません、大丈夫。」

虚をつかれたような顔をするシュリに何度も謝って涙を引っ込める。ここはアイリスじゃない。この人はリンじゃない。そう言い聞かせグツと拳を握る。笑って…でも悪戯したら、しっかりと怒ってくれる本当に大切な友達だった。

「陛下が朝食にお呼びでございますので、どうぞ。」

「はい。」

その後ついて歩き重厚なドアを門兵が開け、そこに入ると一寸の隙もないキースが座っていた。私は案内されるがままに進み、そばに行く和一礼する。すぐに従者がイスを引き、そこに腰かけた。

「おはよう、ディア。」

「おはようございます、皇帝陛下。」

強張った私の声に呆れながら笑う。そんな風に笑えない。自分の存在が、いつかガイヤにもキースにも迷惑がかかるのは目に見えてるのに。どうして、笑うことが出来る？絶対に私は出来ない。こんな風に皇女として扱って欲しいわけじゃなかった。

今でもアイリスへ引き渡ししてくれても構わないと思えるから。

「…また逆戻りか。」

「陛下…私は侍女はいりません。城下で生活をして身の回りのことは出来ますので。」

「駄目だ。」

「……」

「仮の妻であるとはいえ皇帝の妃に侍女一人も居ないなんて不自然に見られるだろう。それにお前はアイリスの皇女だ。そのような扱いはガイヤの威信にかけて出来ん。」

「……」

そう言われて言葉を嚙んだ。確かにキースの言うことは正しいから。実質、亡命を受け入れてくれたガイヤ帝国は、受け入れた者の責任を負うことは当然のことだ。

「それから今日の昼に部屋を移動しろ。」

「はい…。」

「ナイトが案内する。食事の後は好きに過ごせばいい。」

「…はい。」

それから特に会話もなく終わり、キースは従者をつれ部屋を出て行った。少したつてナイトが入ってきて、食事を終え新しい部屋に連れて行かれた。部屋なんて別にどこでもいいのに。妻とはいっても正妃じゃない。私の今の身分を考えれば側妃の扱いに近いはずなのに、皇女の私に気を使ってくれているんだろう。

案内された宮の窓からは、いつもキースと一緒に過ごしていたダリアの庭園が見えた。

「ディア様、こちらに御座います。」

「じ、こは…。」

「キース様のご幼少を過ごされた宮ですよ。」

「ダリアの花…。」

「陛下が大層この花を気に入られて一六歳のころ庭一面ダリアを植

えたんです。」

「陛下が…。」

「はい、ディア様もダリアの名をお持ちの方なので、陛下なりのご配慮かと。」

「……嬉しいです。ありがとうございます。」

窓を開くと芳香なダリアの香りがいつきに入ってきた。胸いっばいにそれを吸うと幾分か心がほぐれる。

「キース…陛下は昼食…どうされるんですか？」

「いつもお取りになっておりません、その時間になるといつも従者を下がらせ、この宮でお眠りになっていたみたいですが。」

「…そうですか。」

それでは何かあればお呼びください、と微笑んでくれたナイトに同じように返すと間髪入れず侍女が数人入ってきた。紅茶を淹れて目の前に置いてくれる。私は、ありがとうと言って、それを見ながらダリアを見つめる。

コンコン

私が返事をする前に侍女が少し扉を開き相手を確認すると大きく扉を開いた。

「ロイ、バルト……！」

「昨日ぶり。」

「どうして?!」

動揺した私を諫める侍女の視線に気づき、急いで有無を言わず部屋を下がらせた。

「陛下の配慮でディアの護衛に任命されました。」

「う、そ……。」

「っていつか俺たちのことを勝手に決めんなよ。」

コツンと頭を軽く叩かれて少しだけ怒った口調のバルト。それに胸のつかえが取れたように頬が濡れる。

「っ……だって……！」

「はいはい、分かってる。」

「昨日は俺たちを庇ってくれて、ありがとうございます。」

優しい二人の言葉にもう止まらなくなって、子供のように泣いてしまった。

「うっうっ。っ。」

「ふは！お前…鼻水出てる。」

「うる…さ…い…っ。」

「泣きやんでください。」

ひとしきり泣いた後、ぐしゃぐしゃになった顔をバルトが大笑いしたので鳩尾を殴ってやった。泣いて殴って笑って、何だかスッキリした。どこでどう過ごすことになっても私らしく生きていこう。それしかないんだから。そう思ったらキースの顔が思い浮かんできた。ちゃんと言わなきゃいけないのに。壁を作ったのは自分なのに。本当に簡単に壁を作れたのに。それを乗り越えるのはこんなに難しい。

「ディア。」

「あ……。」

アイリスに居るころのようにロイとバルトと過ごしていると昼ごろ、いつもここで会っていたような服装のキースが部屋に入ってきた。

「ロイ、バルト。お前らも飯食ってこい。」

「……………」

「…二人とも陛下の言つとおり食べてきて?」

「…交代で取ります。」

「ううん、大丈夫だから。一緒に食べてきて。」

「…分かりました。」

心配そうな表情の二人に笑いかけて見送る。すぐに侍女たちが入ってきて昼食をセッティングしていく。湯気が部屋に漂って、食欲をさそった。でも、食事をする前にちゃんと言葉にしたくて。じつ、とキースを見つめた。

「ディア?どうした?」

「あの……………」

「ん？」

「部屋…それにこのロイとバルトのことも…昨日のダリアの花も…全部全部うれしかった…凄く嬉しかったよ。」

「そうか。」

穏やかになった雰囲気にもっと息を吐いてキースを見上げた。

「？…冷めるぞ。早く、食べ。」

「はい。」

「少しずつ慣れればいい。」

「……………うん。」

多くを含んだその言葉に素直に頷く。細やかなキースの配慮のおかげで不自由どころか感謝してもしきれないことのほうが多いんだから。

「ありがとう…。」

「ああ。」

信じてても…いいと心の中で誰かが囁く

*

皇帝であるキースに仕えて十五年以上になる重臣の一人であり唯一、腹心とも呼べるネイトは普段、穏やかな顔に疲労の色を浮かべていた。それは目の前にいる一人の男のせいだ。

「陛下がご側室をお迎えしたとか。」

分厚い唇から紡がれた言葉に顔をしかめたネイトなど眼中にない、この男は法務大臣を任されているオーズエルだった。

「はい…事実ですよ。」

「どこの出の者なんですか？」

「軍神と名高い二人の兵士の妹君です。」

「兵士っ?!」

「はい。」

「騎士でもなく、兵士ですか!」

「そうですね?」

「ははは、それなら安心だ。御子さえ出来なければ良い場凌ぎになりますね。」

どうして昨日の今日で、こんな心配するんだ。と半ば呆れた。短絡的にもほどがあり実に不愉快だ。というよりもディア様の存在は緘口令をひかれている今の状態で外へ漏れるはずもない。

目の前の男は太いパイプがあるらしい。調べる必要があり、また一つ増えた仕事に眉を寄せた。

「…いえ、陛下は心よりご側室様をこ寵愛なさっていますよ。」

「何故です!」

「ご側室様は、それは見目麗しく、ご聡明であられますから。」

「陛下は我々に…平民へ頭を下げると申すのか?!」

見当違いなことを言う男にネイトはバレない程度の溜息を落とす。昨日、言ったようにキースは緘口令をはりディアがアイリスの皇女であるということは数少ない信頼のおける者のみが知っている。キースの配慮が裏目に出ることは、きっとこれぐらいだろう。そうネイトは考え、後から報告せねばと思考を巡らせた。

愛する母国を追われた亡国の姫君。父と母を同時期に亡くし、自分もアイリスへ居れなくなった。両親の弔いをする暇もなく。それは、あの透明感のある彼女にとって、とても辛いことなのではないだろうか。

陛下が彼女に与えた宮には、アイリス帝国に似せて作ったダリアの庭園がある。ダリア宮と呼ばれる宮だった。昔、キース陛下がアイリスへ訪問したときに一目、見て気に入りガイヤへ帰ったのち、すぐに着工したものだ。いつか、迎える女性のために。その花が似合う彼女のために。

その事実が本人に伝わるには、まだまだ時間がかかりそうだ。

すれ違いく〜

どうしよう。そう私が考えざる得ない人が目の前に座る男は小太りなうえに唇の分厚い、なんとも形容しがたい容姿をしていた。

「兵士とはいえ元は他国の方である貴方様が未だ誰ひとりとして妃をお迎えになつていない陛下のご側室にあがったことは我々は歓迎いたします。」

全然、歓迎出来てないですよ、と突っ込んでしまいそうなほど前半の言葉には棘を感じるのに。ニコニコと笑っている男に実際は何も言えていない。

「いやあ〜ネイト殿の言うとおり、見目麗しく私は感動しております。」

「ありがとうございます。」

「それに何ともご聡明であられる、本当に素晴らしいお人ですなあ。」

「ありがとうございます、はい、それほどでも。ぐらしか言っていないのに。」

どこから聡明なんて言葉が出てくるのか分りかねているとコホンとわざとらしい咳をした男は、やっと本性を見せたのかニヤリと笑った。褒めるだけ褒めて、何を言うつもりなのか。

「しかしなれど身分をお持ちにならない貴方様は幾分か僂すぎる。後見は、どこの家でしょう?」

「後見などはありません。私は陛下にのみお仕えする身なので。どこにも属すつもりはありません。」

「そうですか、それはいいですね。しかし、それではこの先…不安定な未来ですぞ。」

「そうでしょうか。」

「もちろんですとも!今は国力も落ち着き安泰です。それを確固たるものにするためには国内の有力な貴族の娘と婚姻を結び繋がりをも強めるとき。以前から陛下には大臣の娘の中から、いずれかを選んで頂くよう進言してまいりました。」

貴方の娘さんとかですか?と口を出そうになって急いで噤む。こんな言葉に慣れている。アイリスでも正式な手順も踏んでいない貴族たちから時々しか参加しなかった舞踏祭やお茶会などのとき、婚姻を打診されたこともある。皇女である私でさえ多かったのだから皇帝であるキースは比べることも出来ない数になるだろう。

それに未だ、皇后の地位は空位。皇帝に次ぐ権力持つ、その席に己の娘を座らせたいのは分からないでもない。国を導くには貴族た

ちとの適度な均衡が必要になることは知っている。それでも、未だ空位なのはキースにも考えがあるからだろう。

大きな権力を持つ皇后。ゆえに簡単に決めることは出来ない。側妃ならば、ある程度の地位と知識がある女性で済むかもしれない。でも皇后は違う。皇帝が不在時や、執政不能時には皇帝と同じ権限を持つことが許される。それは…すなわち皇帝に代わって皇后が政治を行うということだ。

力のない者が権力を持つことが、どれほど恐ろしいか…私は知っている。

「確かに、国力の安定をはかるのであれば大臣方のご息女を娶ることは重要ですね。」

「そう思われますか！」

「はい。しかし陛下が決めかねている理由もご推測くださいませ。私は地位も後見も御座いません。それが、何を意味するか貴方様ほどの方なら分かるはずですが。」

直接的な言葉を選び、不躰ともいえる言い方をしたが…この人相手では話が終わらない。そう判断した。

「……いずれ強い後ろ盾を持った正妃様が後宮にお入りになります。」

貴方様のお立場は危うくなりましょう。」

紅茶がぬるくなっている。淹れなおしてほしいけど、勝手に人払いをされて侍女たちも一人もいない。ロイとバルトは総帥に呼ばれて仕事をしているから、ここには居ないし。絶対にそれ知って来たんだろう。

大臣という役職はヒマなのだろうか。アイリスの大臣たちは皇帝である父や兄に扱き使われ、いつも走りまわっていたイメージがある。

「率直に申し上げます。何の後見も持たない方が居る場所では御座いません。陛下にこの帝国を揺るぎないものにして頂くために必要な資格を持った方を娶って頂きたいのです。のらりくらりとかわされていたというのに突然、貴方を側室になど…陛下はいつたい何を考えなのやら。」

この微妙な飴と鞭に、どうやって反応しよう。落ち込んで涙の一つでも見せるべきなのだろうか。でも…私はもう我慢ならない。この人は帝国を何とと思っているのか。王国とは違う。帝国の存亡は大陸を巻き込み他国に何かしらの影響があることは分かっているはずだ。

こんなところで暇を弄ぶ時間などあってはならない。

「一つだけ申し上げます。貴方様の願いが、帝国を揺るぎないものにするということならば私に挨拶にくることはありません。私のことなど放って政務にお励みください。何よりも帝国を栄えさせるのは妃ではなく、その後ろ盾でもありません。陛下に仕え帝国を支える重臣方にかかっていること、貴方様はよくお分かりのはずです。」

「なっ?!」

顔を真っ赤にさせた男はギュッと唇を結んで恨めしげに私を見た。敵意に晒されることは好きではないけど苦手でもない。アイリスに居たときも父の正妃である皇后に母共々、疎まれてきたから。

彼女のように剥き出しの憎しみよりも目の前の大臣が見せる敵意のほうが、幾分か可愛く見えるほどだ。

「そこまでだ。」

「っ…キース陛下!」

「朝議に参加し、いそいそとどっかへ行ったと思えば…ここに来ていたのか。ディアの言うとおりだ。国を繁栄させるには、お前の力が必要。こんなことをしてる暇があれば政務に励んでくれ。以上、下がれ。」

有無も言わず、そう告げると男は小さくなって陛下へ一礼し部屋を出て行った。やっと…解放された、と安堵していると心配そう

に眉を下げるキースの顔があった。

「大丈夫か？」

「はい。」

「口うるさい狸は放っておけ。」

「はい。」

私の横のソファアに座り気遣わしげに背中を撫でられる。ほっ、と息をはいた。こんな嫌味を言われることは慣れている。でも…慣れていても疲れは溜まるし…少しは悲しくなる。

「いや、でもさすがだな。あの狸を一蹴するとは。」

「もう…楽しまないください。」

「あの男…ディアがアイリスの皇女だと知ったら卒倒だな。」

「……ふふ」

それが容易に想像出来て笑った。キースの側室として王宮にきてから今日で一週間。少しずつ慣れた、この生活の中にはキースの存在が欠かせないものになっていた。時間が空けば様子を見に来てくれるキース。庭に出てダリアの花の種類を興味深げに聞いてくるキ

「イスも。今までと同じで。」

それに、とても救われたのは確かだった。

「昼飯にするか。」

「はい。」

キースが侍女に声をかけるとすぐに料理が運ばれる。最近では食の後、政務に戻って三時ごろのアフタヌーンティーにも顔を出すようになった。前みたいに色々と話せるようになったし…何よりもう嘘はつかなくていいというのが実際のところ、とても嬉しかった。キースは気をつかってくれてるのが亡命した理由や、その関係について何も聞いてはこなかったから。

もし聞かれたとしても、私は答えることは出来ず言葉を濁すだけだと分かっているのだろうか。

*
*
*
*
*

「あの小娘め！分かったような口を聞きおつて！許さんぞ！！」

「どうかされましたか？」

「……そうか、そうか！！そなたの出番ぞ。いつかの恩を存分に返してくれ。」

分厚い唇に悪意をしのばせた笑みを浮かべ高らかと笑った

* * * * *

昼食を取ってキースが政務に戻っていくと侍女を下がらせて庭園に続く窓を開ける。そのまま外に出ると大好きなダリアの花。誰も居ないことを確認して、その場に座り込んだ。しゃがむと、ちょうど顔ぐらいの高さにあるダリアに触れる。

「良い香り……。」

ガサッと音がして、そつちを見ると1人の男性が立っていた。彼は私を見て青褪めると額を地面に押し付けるように頭を土下座した。

「申し訳ありません！ご側妃様の顔を拝顔するなど…！」

「あ…ちよっと、頭を上げてください。」

「こちらの宮にご側妃様がお入りになったと聞き、それならばダリアの手入をしようと思ったのですが…！このようなことになり…申し訳ありません…！」

「顔を上げてください。そんなの全然、平気ですから。」

私の言葉におずおずと顔を上げた彼は、やはり不安の色を浮かべていたのでなるべく優しく微笑んだ。

「このダリアはすごく綺麗だと思ったの。きっと貴方のおかげですな。」

「め、め…めっそうも…ざいません！」

「ふふふ、落ち着いて？紅茶でも淹れます。飲んでいってください。」

「い、いえ！…！…！…！…！」

「ああ…そうでしたな。それじゃ私にも手伝わせて下さい。」

「え、え…そんなこと…！」

「邪魔じゃなければお願い。」

「邪魔なんて！」

焦り続ける彼に笑って手を差し伸べる。

「私はディア。ディア・シュゼールです。」

「あ…俺…は……カデット・ライシスです。ちなみに二十一歳です！」

「ふふふ、そう…カデット。よろしくね。」

「はい！」

そう言っ二人で座り込んでダリアの花の手入れをしはじめた。最初は緊張していたカデットも途中からは気兼ねなく話しかけてくれた。柔らかそうな茶色の髪に誠実そうな瞳。整った顔から容易に想像できるようにダリアに触れるカデットの手は穏やかで優しいものだった。

「初めて、この庭園を見た時の感動を今もまだ覚えています。数十種類のダリアが、こんなにも集まっている庭園は他にはありません。」

「そうだね、私も感動した。」

「ディア様は…とてもダリアがお似合いです。」

「ふふ、ありがとう。」

「…いえ。」

広い庭園の一部しか手入れは出来なかったけど、その分とても綺麗に見える。また明日も来ますね、と笑ったカデットが何度もお辞儀をして庭園に背を向ける。私は手入れした場所のダリアを一輪、手折って部屋に戻った。侍女の人に一輪刺しの花瓶を出してもらってダリアを入れるとベットサイドにかざった。

* * * * *

それから毎日、お昼を食べた後にカデットと一緒にダリアの手入れをした。他愛ない話しをしながら大好きなダリアを美しく磨き上げるのは本当に楽しい。一週間がたっても未だ庭園の半分も手入れ出来てないけど、焦ることなく一本一本を慈しむカデットの手は魔法使いのようだとも思えたほどだった。

「カデットは本当に花が好きなんだね。」

「え？…あ、はい。もちろんです。」

「ダリアが喜んでるのが分かるもん。」

「それはディア様のほうです…。」

「そんなことないよ。」

「いえ…本当に。ディア様に触れられたダリアは色味が増している気がします。」

「えー？そんなこと言ったって何も出ないよ？」

頬を赤らめながら褒めるから、なんだかくすぐったくなって笑う。ふと見上げた彼の瞳が真っ直ぐと私を見ていて、すぐにほほ笑みを返された。それに同じように返す。とても暖かい時間。

「ディアー!!」

「え？」

聞こえた大きな声に振り返ると開けっぱなしだったガラス張りの

ドアに立っているキースが居た。遠目からはあまり確認できないけど、その雰囲気は物々しい。さっとカデットが膝を折って礼をしているのを見て、私もそれに倣う。いつのまにか目の前に来ていたキースは抑えきれない何かを含んだ瞳をしていた。

「ディア！お前…何をしてる！」

「あ…ダリアの手入れを……。」

「そんなことお前のすることじゃない。」

「…でも…」

「反論は許さん。中に入れ。」

「……はい。」

激憤したようなキースの言葉に黙って従う。頭を下げたままのカデットが気になったけど、これ以上ここに居ると彼の立場も悪くなる気がして歩みを進めた。

「お前はもういい、下がれ。」

「はい……。」

そんな会話が聞こえて振り返ろうとしたけど、すぐに横に来たキ

「スの腕がそれを許してはくれなかった。中に入ると侍女が紅茶の用意をして部屋を出るところだった。そのままいつもの定位置に座らされる。」

「陛下…?。」

「喋るな。」

「え?…あ…。」

熱の籠った瞳に気付いたときには、もう遅かった。いつかと同じように重ねられた唇。後頭部にまわされた腕のせいで逃れることも出来ず貪られる。

「っん…。」

拒まなきゃいけない。こんなこと、しちゃいけない。側妃であるうと、いわば仮初。表面上でしかないと思っていたのに。

「…ディア。」

「ん」

「ディア…ディア…ディア。」

「……陛下…どうされたんです、か…？」

離れた唇から紡がれる名前に胸が締め付けられた。まるで愛おしい者を呼ぶような声の色に自分の心が揺れるのが分かった。そんな風に呼ばないで、と嘆く半面。とても心地がいいと囁く誰か。

「部屋を移す。」

「え？」

「ネイトに指示を出す。それに従え。」

「待つて…！私っ…！ここがいいです…！。」

「許さん。」

「……っ！」

立ちあがって私を見ることもなく吐き捨てるとボタン、と強くドアを閉めて行ってしまった。いつも私の意見を最優先してくれただ。この間きた大臣のように亡命して何の後ろ盾もない私に優しくしてくれた。なのに。どうして。信じようとしていた心が閉じるのを感じる。

「ディア様。」

「……………ネイト。」

どれだけ時間たったのかわからない。ただ陽はもうなく、湯気がたっていた紅茶は片づけられていた。

「……………お部屋のご移動にございます。」

「……………そうですか。」

「こちらへ。」

思い知らされとは、こういうことだろう。何を言おうが身分のなくした私が皇帝であるキースと渡り合えるはずがない。笑い合っていた、あの人に今はただ従っだけが存在意義のようになるんだ。連れて行かれた部屋は十分に広く豪華だった。ただ歩み寄った窓からはダリアは見えない。

「……………それでは何かありましたら侍女にお申し付けください。」

出て行ったネイトの表情は窺い知ることは出来ないけど、なんとなく同情の色が見えた。哀れと思っているのだろうか。国を失い、

他国の皇帝の言いなりになるしかない私を。

「みんなも下がって？」

数人いた侍女に声をかけると次々に部屋を辞していった。部屋を変えることに関して、こんなに落ち込んでいるのではない。もちろんダリアの花を見ることが出来ないのは悲しいけど、そんなことじゃない。キースが…私の言葉に耳を傾けることなく、そして理由を教えてくれることなく。進めてしまったことが悲しかった。

心を通わすことをキースも望んでくれていると思ってた。もう考えるのはよそう、ただ流れに身を任せるしかない。

コンコン

「……………だれ？」

ドアからではない。カーテンの閉められた窓から音がして、警戒しながらカーテンをめくる。

「カデット…?」

「ディア様っ！」

少し顔色の悪いカデットが立っていて、私は焦って窓をあける。カデットから微かにダリアの香りがして緊張が緩んだ。

「どうしたの？…どうしてここが…。」

「侍女たちが話しているのを聞いて…心配で…。」

「そう…私は大丈夫だよ。カデットこそ平気だった？」

「はい、俺はなんとも…。」

「良かった…。」

「ディア様…これを…。」

差し出された数本のダリアの花。元気になるようにと持ってきてくれたカデットに胸が温まる。

「ありがとう…嬉しい。」

「いえ…こんなことしか出来なくて、すいません。」

「ううん、充分だよ。座って。」

ソファーに座るように促して、遠慮がちに腰をおろした。対面するように座るとポツポツと喋り出した。

「もしかして…陛下は俺とディア様のことをお疑いになっているんじゃない…と思ったんです。自分がここに来ればまたディア様に迷惑がかかるかもしれないと思ったんですが。いてもたっても居られなくて…。」

「そんなことないよ。迷惑だなんて…ありがとう、嬉しいよ。本当に。」

「ディア様…。」

「ダリア…凄く綺麗だね。」

「はい、香りがとくに良いやつを持ってきました。」

「本当…凄くいい香り…。」

貰ったダリアに鼻を近づける。芳香な香りがして、すぐに何だか眠くなってきた。相当…疲れたみたいで、うつらうつらする。

「あ…こんな夜にすみませんっ！俺は帰ります。」

「…あ、ごめんな、さ…何だか眠くなっちゃって…。」

「いえ、おやすみなさい。」

そこで私の意識はプツリと切れた

すれ違い - 2 -

「お目覚めのお時間にございます。」

「……はい。」

侍女の声に少しずつ意識が覚醒していく。昨日…カデットが来て途中で寝ちゃったんだ。もしかしてベッドまで運んでくれたんだろうか。ふとベッドに視線を戻すとサイドテーブルにダリアの花が活けられていた。今度会ったら…謝らなきゃ。

「お召変えを。」

「はい。」

促されるまま立ち上がる。毎日、私の着替えを手伝ってくれるのはシュリという名の侍女だった。少しだけリンにかぶる面影に何度、動揺したことだろう。するすると夜着を脱がしていく彼女の手が一瞬、止まった。

「？」

「あ、申し訳ありません。」

「いえ…。」

少し眉を寄せた彼女を不思議に思いながらも、その後は滞りなく着替えが終わった。朝食は一人で取るようにと言われたので今日…キースは来ないらしい。それなら、と私は朝食を断った。すぐにロイとバルトが来て、三人に談笑していると乱暴に扉が開いた。

「陛下…。」

激情したような表情を隠しもせずズカズカと私に近寄る。反射的にロイとバルトが私を庇ったのを見て、いつそう不機嫌になった。

「そこをどけ。」

「私の任は姫様の護衛ですので。」

「俺がディアに何かするとも言いたいのか…?」

「お自分の顔を見直されてから来てください。」

「なに…?」

「まるで鬼のようですよ。」

どンドン雰囲気が悪くなるロイとキースに焦った私はなんとか前に出て二人の間に立った。

「ロイ、バルト…下がって。陛下は私に話しがあるようだから。」

「しかし…。」

「大丈夫、もうすぐ仕事の時間でもあるでしょ?」

「…分かりました。何かあったら…」

「分かってる、大丈夫だから。」

納得しきれしていない二人を笑顔で送り出して、そっとキースを見上げる。さっきより幾分か落ち着いたのか少しだけ昂ぶりは収まっているように見えた。

「あ、の……」

「座れ。」

「はい。」

座らされたソファーにキースの影が出来る。未だに立ったままの彼を見上げると、なんともいえない表情で私を見ていた。そして、ゆっくりと大きな手が動く。

「陛下…っ？何を…っ！」

ビリッとドレスの破れる音。胸元からお腹のあたりまで真っ直ぐに引き裂かれた。

「な…っ……！」

視界のはしにドレスの切れ端が舞う。外気に晒された肌を隠すほどの余裕はない。何が起こったのか、理解出来なかった。ただ私の肌を見て眉を寄せ激憤するキース。

「ロイか？！バルトか？！それともあの庭師かっ？！」

「な、にを……。」

「俺の妻という立場にありながら娼婦のような真似ごとをすとは！」

娼婦：？そんなことを言われることをした覚えなんてない…ふつふつと怒りが込み上げる。昨日からの待遇に今日は娼婦呼ばわり。もう戻れないんだと実感した。

「アイリスの皇女が聞いて呆れる！欲にまみれたか！！」

「っ何を仰っているのか分かりかねます！いきなりお怒りになったと思えば…人を娼婦呼ばわりするなんて！」

「言い逃れする気か！」

反論した私に目を剥いたキースは痛いぐらいに私の腕を掴んだ。そのままベッドに投げ飛ばされる。気付いたときには唇を塞がれていた。混乱する頭でもは何も考えることが出来ずに、苦しくなる呼吸に現実が押し寄せる。どれだけ私が抵抗しようがキースの身体に抑えつけられて身動きもとれない。

「やあっ…！っ…や、だ…っ」

酸欠で真っ白な頭を何とか働かせて拒むように言葉を続ける。

「黙れ。」

それさえも一蹴される。私を認めることがないような瞳とぶつか

る。いつも暖かさを感じた蒼瞳は冷たく凍りのように私を見ていた。着ていた服を強引に脱いだキースに身体が強張る。さっきから全て…キースの行動は威圧的だ。逃げなきゃ…と警鐘が鳴るのに、キースの強く冷たい瞳に捕らわれて動くことが出来ない。

「キース…っ…おねが…や、めて…!!」

側妃になって初めて願いを込めて呼んだ名前にも反応しないキースはギリりとスプリングを鳴らしながら顔を近づけてきた。

「…お前が悪い。」

「え…?」

それだけ言うと、また覆い被さってきた。首筋に吸い付き、歯を立てながら服を剥がれる。私は動ける力も全て失った。

「キース…つやだ!…キース…:ツ」

私の言葉なんて届いてないと…嫌でも思い知らされる。拒絶の言葉も何の意味も為さず、訳も分からないまま身体を暴かれる。何も分からない。ただ…きつく押さえられた腕だけが痛い。

身体が裂かれた時、心までも粉々になった

*
*
*
*
*

気付けば陽は落ちていた。裸のままシーツをかぶって眠っている
ディアに言葉にならないほどの罪悪感が込み上げてきた。うつ伏せ
になった剥き出しな白く滑らかな背中こそつと触れる。今朝、ディ
ア付きの侍女のシュリが言いにくそうに言った言葉。

“ お召変えのとき… 所有の証が胸元に御座いました ”

それを聞いて頭が真っ白になった。元より、昨日から機嫌が悪か

ったがそれを超えた。昨日は無邪気に笑い合うディアと庭師に憤りを感じた。あの庭園でディアが俺に向けてくれたような笑顔を見て醜くも嫉妬した。

破り捨てた服から覗く美しいディアの身体に欲情する前に侍女の言った通りに存在したシルシに全ての思考も理性も消しとんだ。側妃になってから初めて名前を呼んでくれたという感動も無視し強引にディアを抱いた。

側妃にしてからというものの、よそよそしさがあったし、俺のことを陛下としか呼ばなくなった。いつか…元に戻るだろうと思っていたが、その希望を壊したのは俺自身だ。

シーツに残る鮮血を見た瞬間、全て俺の勘違いだと知る。ディアが不義をしていないという確固たる証拠が俺の目の前にあったんだ。

それを見て瞬時に凍りつく心が疑った自分の不甲斐なさを突き付けた。彼女は…何も知らなかったのだ。胸元にあった証も…何かの間違いだっただろうに。彼女の瞳は困惑していたのに。何のことを言っているか分からない、と彼女は何度も言ったのに。

嫌だ、と叫んだのに。

「ディア……。」

生気を失ったディアの身体を暖めるように抱きしめた。許しを乞う子供のように。

「くそっ…。」

行き場のない想いも後悔も全て消えて無くなってくれればいい。

コンコン

「陛下……。」

「ナイトか。」

「はい、ディア様は……。」

「シユリを呼べ。」

「…かしこまりました。」

ドアを開けることなく遠ざかる足音に息を吐いて適当に服を着る。ベッドから下りてダリアのない庭園を見て、よりいっそう心は重くなった。

「失礼いたします。」

「ディアが起きたら湯殿へ入れてやれ、そのあとは…ダリアの宮へ。」

「…かしこまりました。」

「ディアの望むままにしろ。」

「はい…。」

礼を取るシュリの横を通りすぎ部屋を出た。目が覚めたとき…ディアは俺を見て何を思っただろうか。拒絶の言葉を聞くのが…たまらなく怖い。

* * * * *

「…………ん。」

「お加減いかがでしょうか。」

「……大丈夫です。」

直接、肌にあたるシートがやけに冷たい。キースの面影はどこにもなく、ただ侍女が一人いるだけだった。それに少し安心して、そつと上半身を起こす。

「湯殿の準備が整っております。」

「ありがとうございます……っ……！」

立ち上がるうと力をいれたけど下腹部にある鈍い痛みが現実を突きつけられた。すぐに足の力は、なくなって侍女の支えがなければ倒れているところだっただろう。

「……っ……」

「……申し訳ございません。」

「……え？」

「今朝……お召変えのときディア様の胸元にある証を陛下にご報告したのは私なのです。」

「胸元……？証……？」

悲痛な表情を浮かべる侍女の言う胸元に視線を落とすと……たしかに赤い跡がある。まったく心当たりがないそれに自然と眉が寄る。

「ディア様にお心あたりがないのでしたら……私から陛下に……。」

「覚えがないって言っても……きっと信じてもらえないので言わなくていいです。」

そつだ。何を言っても遅い。キースは私の言葉に重みなんて感じてない。やめて、と懇願した私を抑えつけたのは……まぎれもない事実だから。なのに……なのに……信じ続けたいと願う私がいるの。

*
*
*
*
*

お風呂に入っつて、また部屋を移動した。一日ぶりのダリアの咲く部屋だった。どうして、また移動なんですか？と聞けば、キースか

らの指示らしい。私には、それが意味することが分からなかった。罪滅ぼしなのだろうか。

「今日はもう…休みます。」

「かしこまりました、おやすみなさいませ。」

閉じられた部屋に一人。そっとベッドに寝転んでみても眠気はない。気分転換に痛む身体を抑えて外に出た。やっぱりダリアは私を落ち着かせる。

「ど…して…？」

私は座り込んで膝に顔を埋める。優しかったキース。どんな形であれ私を救ってくれたキース。あれは偽物なんかじゃなかった。全ての感情を捨てても…どうして、という悲痛の叫びだけが心に巣食う。

少しずつだけ信じようと思っていた心が。

傷ついて血を流す心が、それでも信じたいと傷を広げていく。信じたいと涙が溢れるの。

どうしてこんなに無力なの、と涙が溢れて止まらなかった。そんな心と頭の中では様々な残像と映像が流れて私の葛藤が始まっていた。辛いことは今までも…たくさんあった。両親が立て続けに亡くなったときも、リンが…炎にまかれたときも。枯れるぐらい涙を流したけど、また立ちあがった。

涙は…何の役にも立たないと痛いぐらい分かったのに。知っているのに。どうして涙は溢れるの。背負った痛みも過去も誓いも死も…どうして貴方に曝け出したいと思ってしまうんだろう。もう全て…手遅れなのに

ねえ、キース。私、初めて知ったの。
言葉が届かないということが、どれだけ辛いかな。

*
*
*
*
*

ガンッ

「陛下!。」

「止める、ロイ!。」

皇帝の執務室であるここに主であるキース。腹心のネイト。軍部最高司令官であるキリヤ総帥。そしてディアの護衛であるロイとバルトが物々しい雰囲気の中で対峙していた。

静寂の均衡を破ったのはロイ。視線さえ合わせないキースの頬を殴って、その反動で彼は倒れこむ。キースは駆け寄ったネイトの手を払い、何もなかったかのようにイスに座りなおした。キリヤは必死に暴れるロイを諫めていたが、それは留まる事を知らない。

「殺してやる…!。」

「ロイ!。」

怒り狂い手がつけられないロイを抑えることしかできないキリヤも、何となくだが事の全容は把握していた。主であるディアを傷つ

けられた二人の怒りは計り知れない。それは分かるが、自分の主である皇帝にこれ以上…ましてや命など取られては困る。

「落ちつけよ、ロイ。」

「バルト！お前は…許せるのか！？」

「許せるはずねえだろーが。」

キリヤを助けるようにロイの肩を掴んだバルトは真っ直ぐにキリスを睨みつける。

「ふざけたツラしてやがったら殺そうと思ったが…どうやら、もう罰を受けているみたいだ。これ以上は止める。」

その言葉にロイはキリスの顔を見る。殴られたせいで赤く色づいた頬があるにも関わらず顔色はひどく悪い。小刻みに震える腕に葛藤を感じた。バルトの言った通り、自分自身で戒めて罰を受けている。そう思った。

だが彼女は…自分たちの主はどうだろうか。きっと会いに行けばいつも通り笑っている。泣きながら笑うのだろう。そんなの、もう見たくなかった。

「俺はさ…ぶつちやけ…安心したよ。例え無理やりでも…ディアの初めての相手が…この人で。」

「バルト…お前っ!」

「そうだろ?もし初めてが…アイツだったら…ディア、死ぬぞ。」

「っ」

「…そう思うしかない自分に腹立つけどな。それにアレが発動しなかったんだ。」

意味深な二人の会話にキースは少し眉を寄せる。殴られるのも覚悟していた。もちろん一発では済まないとも思っていた。しかし二人は…バルトはそれどころか安堵の表情さえ窺える。

「あんたさ…ディアのこと、どうしたいわけ?」

「……………」

「俺たちは、最初はひやひやしたけど、この城に入ってディアが皇女らしい扱いを受けれることに安心した。それに、よそよそしさはあるにしても仲良さそうにあんたと話してるディアを見て嬉しかった。なのに…こんなことじゃがって。」

さっきまで落ち付いていたバルトの雰囲気ガラリと変わる。怒

つてないなんて有り得ない。内なる場所に埋めていた怒りが今にも溢れ出そうだった。

「ディアがここを出たいと言えば、何が何でも連れて出る。」

「っ」

「元々ディア自身は豪勢な生活に未練もなにもないからな、それだけは忘れんなよ。」

それだけ言うと、まだ納得しきれていないロイと連れて執務室を出て行った。

「陛下……」

「キリヤ、ナイト………下がれ。」

有無を言わせず二人を退出させた、キースは深くイスに座りなおすと手で顔を覆った。

「ディア……」

ただ一人の名を紡ぎながら。

* * * *

「ディア様っ」

「…あ…カデット？」

ダリアの宮に戻って数日。久しぶりに会うカデットの姿に少し恐怖を覚えた。カデットが怖いわけじゃなく…男性が少し怖い。

「お久しぶりです！こちらの宮に帰られていたんですか？」

「うん、ちょっと前からね。」

少し距離を開けながら庭園を二人で歩く。太陽の光がダリアを照らして、それを手入れしていくカデットの手は…やっぱり安らぎを与えてくれた。

「元気がないですね？どうかされましたか？」

「うっん、ちょっと体調が悪くて。」

「そうですね、あまり無理はしないようにしてください。」

「うん、ありがとう。」

気遣わしげなカデットの視線に申し訳なくなりながら、私も手入れを手伝った。

「陛下とはお変わりなくお過ごしですか…？」

「…もう数日は会ってないの。」

「え?!」

「喧嘩とかじゃなくなっけ？ちょっとした…すれ違いが続いちゃって…。」

「ディア様…。」

あれからキースは一度もこの宮には訪れてくれない。過保護の度合いが増したロイとバルトを見れば、何があつたか知って、何も言わないでいてくれるのが分かった。それが私は、ありがたかった。

「っ、っ……ッ。」

沢山の人に心配をかけてるのは分かってる。ロイとバルトも侍女のシュリもネイトもキリヤ総帥も…何度も来てくれて他愛もない話しをしてくれる。それは救いでもあるけど時に残酷だった。キースは…どうして来てくれないの？一度抱いて…もう用は無くなったの？

そんな意味のない疑問だけが残るから

「ディア様…泣かないください。」

「ごめ、っ…。」

「いえっ泣くなって意味じゃないです！泣きたいときは泣かないと…いつか泣けなくなっちゃいますから。」

「っ…ッ…ッ。」

カデットは隣で座り込んで泣く私に、それ以上何も言わず手入れを再開させた。その空間がとても暖かくて、とても泣きやすかった。

「これ、今日一番のダリアです。」

綺麗なダリアを、そつと私の髪にさして満足そつに笑うカデットにやつと、私も笑い返せた。髪にかざられたダリアから香りが届いて、とても心地いい。

「ありがとう、カデット。」

「いえ。」

* * * * *

「カデット。」

「ディア様。」

「今日はもう元気そつですね。」

「うん、すつかり元気。」

「良かったです。」

毎日、毎日…カデットと話した。事情を知らないカデットはロイ

たちとは違う。ロイたちと一緒に居たくないんじゃない、思い出して悩むのが嫌だった。だから、カデットと話すこの時間は唯一、何も考えずダリアの手入れに力を入れられる。

キースのこと。考え出したら止まらない。闇にのまれて戻ってこれなくなる気がして。

「俺…田舎に引っ越すことになりました。」

「えっ?!この仕事辞めちゃうの?。」

「はい、昔から夢だったんです。自分の店を持つことが。」

「店って……花屋?。」

「はい。」

突然のカデットの言葉に驚きながらも寂しさが襲う。この時間がなくなると思うと今から気落ちしてしまう。

「あの…ディア様……。」

「?」

「一緒に行きませんか?」

「え……?」

「元気だつて言つても少しづつ痩せてます…それに顔色もあまりよくないです。それつて…陛下が原因なんでしょう？」

「……」

思い当たるふしはある。夜には寂しさで眠れない。食事も一人で取るのは元々、好きじゃないせいかわかず、食欲もわかず、ないがしろになっていた。今まで…キースと一緒に食べてから余計に…。

「俺だつたら…そんな思いさせません！こんな豪勢な暮らしは出来ません。でも二人で一緒に…一緒に暮らしませんか？」

きつと暮らしには困らない生活が出来る。それに花に囲まれて優しいカデットと穏やかな生活が…きつと送れる。それはすぐに想像出来た。不安のない生活。誰かに心を揺さぶられることなく…穏やかに暮らせる生活。カデットについていけば…幸せになれるんだろうか。この胸に巣食うモヤモヤとした感情を一蹴してくれるんだろうか。

裂けるような静寂の中で、たった一つのものが光っていた。ジワリ、と暖かさを感じる。

「私は……っ……」

ディアとの時間を…誰にも邪魔されたくない

「…っ…行けない…！」

「ディア様…。」

「辛いことばかりじゃないから…キースは優しかった…！」

どれだけ裏切られても、信じたいと願うの。無理なの、これ以上は無理なの。これ以上…キースと距離が出来るのは辛いんだ。キースを感じる事が出来ないほど遠くへ行くなんて私には出来ない。

皇女であろうが…相手が皇帝であろうが。ここで出会ったキースは本物だから。胸に残っている思い出は消えはしない。

落とすような笑いかたが好き。ダリアを撫でる優しげな指先が好き。ディアと穏やかに私を呼ぶキースが…たまらなく好き。それは何があっても揺るがない。許されないことだということは分かっている。

永遠に続く時間でもないということも。でも、この世界の全ては永遠なんてないから。それでも、今を生きる中で人は短く儚い永遠を探していく。だから、そばに居ることだけはしたい。その終わりがくるまで。

「ディア様……。」

「ごめんなさい、カデット……ありがとうございます。」

「いえ……。」

「私もう行くね、素敵な花屋さんになってね。」

「……はい。」

そつとその場を後にした。答えはいつでも私の中にあつたんだ。理由が……あんなことをした理由がきつとあるんだ。信じたいと思うばかりで、信じようとしてなかった。其の手で覆う先が闇でも温もりは忘れずにいられるから。

* * * * *

「それでは、お休みなさいませ。」

「あの。」

「はい。」

「陛下は…どうしていますか？」

「この時間はまだご政務をなさっておいででしょう、お呼びいたしまししょうか？」

「いえ、いいんです。お休みなさい。」

ベッドに入った私を確認すると侍女の人が灯を全て消してくれた。そのあとすぐ部屋を出て行った。

静寂が覆う。胸に押し寄せるのは、きつく蓋をしたはずの悲しみ。思い出しちゃいけない。痛いことも悲しいことも苦しいことも全部。端に追いやって隠すの。

強くなりなさい、と母が私に言った。今、思えば…全て分かっていて言っただらう。何が起こり、私がどうなるか。だから…強く

なれと。どうして、全てを教えてくれなかった？あの時…知っていれば何か変わったはずなのに。

言葉は脆く不確かだから。

寂しいと言える強さが欲しいの。

「…？」

キー、と木材特有の音。庭園へと続くガラスばりのドア。こんな時間に…開くことなんてないのに。私は、ゆっくりと上半身を起こして視線を向ける。カーテンもはらわれたそこには…月の光を背負ったカデットが居た。

「…カデット…どうしたの？」

「昼間…アンタと一緒に行くと言ってくれれば…こんなことされずにすんだんですよ？悪いのは…アンタだ。」

普段からは想像も出来ないほど冷たい声に思考が止まる。一歩ずつ確実に近づいてくる彼に恐怖以外なにも感じず凍りつく。カデッ

トの足音が死刑宣告へのカウントダウンのようだった。私は急いでベッドから起き上がってドアに走った。それに手をかけようとした手が掴まれた。

本物の闇が近付いてくる。ああ…彼は…キースは、とても優しく私を抱いてくれたのかもしれない。こんなにも震えなかった。この前は痛ましいほど後悔と限りない同情が、彼の瞳には浮かんでいた。そんなことを今、思い出した。

とても寒いところに居るように…彼も震えていた。

「なに………を…する気？」

「何されるか知りたいですか？」

「っ………や！」

「傷物にするんですよ、陛下がもう抱く気がしないぐらいにね。」

ベッドに連れて行かれそうになって背筋が凍る。ギリギリと音がるぐらい握られた手首が悲鳴をあげた。必死に身をよじっても、男の前では無意味に等しい気さえした。

「つやだあ！」

「好きなだけ叫んでもいいですよ？誰も助けには来ない。部屋の門兵も買収したからね。」

「っ！」

昼間の面影はまるでない。そんな笑顔で私の首筋に顔を埋めた。綺麗ですね、と嬉しそうに暖かい笑顔を浮かべていたカデットは、どこにも居ない。

「いやっ…！やだ、やだ…っ」

「陛下と仲違いさせて上手くいくと思ったのに。面倒くさいこと、この上ない。」

「なんで…知って…。」

「キスマーク…綺麗に付いてただろ？」

「っ」

「あの日、持っていたダリアには催眠作用のある薬品を塗っていたんだ。匂いを嗅いだアンタはころりと寝た。この綺麗な身体を目に焼き付けてキスマークだけ残した。陛下は怒っただろうね？激情に身を任せアンタを抱いた。ははは、未だに純潔とは思わなかったけどね。」

どうして…。ああ…彼と、その後ろにいる人は、私が邪魔で仕方ない。だから私を落としたいのだろう。キースの優しさを…壊していった。常に優しくあってくれた彼を…カデットたちは追い詰めた。きつと…今も彼は私のことで思い悩んでいるのだろう。

こんな、ことのために。キースは。

「落ち込んだ、アンタを誑たし込んで、さらうつもりだった。顔は好みだし茶番に付きあうのも悪くないと思ってたのに。意外と芯はあったらしい。今日イエスと言ってくれれば強姦されずにすんだっていうのに。」

「……」

仕組まれた全てが絡み合う。一抹の不備もなく、やってのけたんだ。私はシナリオ通りに動いていた。喜劇だと、何だか笑えた。キースと、こうなってしまった原因は…やっぱり私自身にあったんだ。

そう思ったとたん身体の力が抜けた。キースは、やっぱり優しいね。

「…諦めた？懸命だね。あの方も君の顔はお気に入りでから陛下に捨てられたら妾にでもしてくれるんじゃない？。」

何が、そんなにおかしいのか声を高らかに笑うカデットに悔しさが込み上げる。こんな…まるで人形のように操られるなんて我慢ならない。ヒーローを待つヒロインは、そこに愛があるから信じて待てるだけ。私は…ただ、ただ一人で抗い^{あらが}続けてみせる。

「大丈夫、抵抗しなければ可愛がってあげるから。陛下とどっちが
いいか教えてね。」

「…随分、お喋りなのね。」

「は?。」

「貴方が今、自白したことは十分に罪に問われるでしょう。」

「なに?。」

「傷物にされた女は全員が泣き寝入りするとも思っているの?。」

「…今から強姦される女の虚勢は見苦しいぞ。」

「ねえ…ロイとバルトが護衛すべき私の元を平気で離れることが出来るのは何でだと思う?。」

私の言葉の意味を探ろうと視線を彷徨わせるカデットに微笑みを浮かべた。

「つと…！いきなり呼んだかと思ったら、いきなりコレかよ。」

「誰です、コイツは。」

短剣はロイによって受け止められ、カデットはバルトによって捻じ伏せられている。

「な、なぜだ?! さっきの話が事実だとしても…お前なんかに契約は結べないはずだ!」

「私の名はクレイディア・シュゼール。ダリア・アイリス。アイリス帝国の正統なる第一皇女。」

「っ?! ……こ、こ…皇女…?!」

「おいおい…そんな簡単に言っなよ。」

呆れたバルトの声を聞きながら、少しの服の乱れを直してくれるロイにありがとう、と微笑む。

「……バルト、そいつを引き渡して来い。姫様の目汚しだ。」

「りょーかい、ついでに門番も引き渡してくる。」

「ああ。」

すっかり憔悴しきってるカデットをつれてバルトが部屋を出た。
少し大きな声が聞こえて門番を怒鳴りつけているのが分かる。それ
にホッと息をはいた。

「よく頑張られました。」

「…うん。」

「御立派にごぞいます。」

「…うん。」

優しく促すようにベッドの端に座らされて膝をついて私を見上げるようにロイが手を握ってくれる。どんなに強がりであったところで怖い、というモノは無くならない。涙が流れるのは早かった。

「もう大丈夫ですよ。」

「ん、…」

バンツ、と勢いよく扉が開く。そこには浅い呼吸を繰り返すキー

スがいた。いつも乱れていない髪が乱れ、その瞳は見開かれている。

「ディア…！」

「…キース……」

来てくれた、という喜びに、さっきまでとは違う涙が流れる。言葉にならない想いが見つめ合う時間にならなくていく。手を握っていたロイは、そっとそれを離して部屋を出て行った。

「…ディア。」

「…キース。」

「大丈夫なはず…ない。俺は…同じことをしたんだな。許されることじゃない。」

「…キース……教えて？どうして…あんなこと……どうして…会いに来てくれなかったの…？」

言葉は不確かだ。それでも伝えることしか人は術を知らない。

心と距離（前書き）

視点がコロコロ変わります。

心と距離

どうして、と問うディアに胸がつかまる。俺の…あんなひどいことをした俺の言葉を聞いてくれるんだろうか。恐怖ゆえに足踏みして会いにも来れなかった俺の言葉に耳を傾けようとしてくれている。俺は取り戻したい、自分自身で失ったものを。

「無理やり側妃にして、それからディアは壁を作って。それでも、ゆっくりでいいと思った。そんなとき侍女からディアの身体にキスマークがあつた…って報告があつた。それを聞いたとき血が逆流したみたい…誰かも分からない相手の男に嫉妬した。」

「あれは…。」

「分かつてる。お前は何も悪くない。会いに来れなかったのは許せなかつたんだ、自分が。感情に任せて…無理やり抱いて傷つけて。会いに来る資格なんてないと思った。」

「キース…。」

呼ばれた名前にかすかに震える。こんなにも揺さぶられるような響きはディアにしか出せない。こんなにも届かないことが、もどかしいと思つたことはない。

開け放たれた窓から冷たい風が吹いている。小さなディアは尚い

っそう小さく見えた。小さく震える肩で、胸の中で、堪らない葛藤がそこにはあつて、俺には覗くことすら困難な程深く、ディアにとつてそれは耐え難い苦しい傷跡だと想つた。狼狽とは違つ、またこの胸の内の葛藤。愛しているから、居たたまれなくなる。

冷たくなつたディアの頬に流れていた涙に唇を寄せるとディアは、ただひたすらに涙の粒を連ならせる。

「それでも…お前が襲われたつて聞いて頭が真っ白になつた。ここまでどうやって歩いたのかも覚えてない。それぐらい…ディアを見るまで生きた心地がしなかつた。」

「ちゃんと言つて欲しかったよ、その時に。会いに来てくれなきゃ…許せない。許すこともさせてくれないの…?」

遠慮がちに小さく白い手が俺のそれに重なる。暖かい、それに縋るように握り返した。

「悲しかったよ？私の言葉…キースには何も届かなくて。凄く痛かつた…。」

「ディア…。」

「だから…これからは、ちゃんと話して？知りたいよ、キースのこと。キースがどういふことで喜んで、悲しいのか。私…知りたいの。」

見上げてくる瞳が濡れている。頬には幾筋にも跡が残って。そつとそれを拭った。あの時のことを思い出して…出来るだけ優しく頬を包む。くすぐったそうに瞳を細めて穏やかに笑ってくれた。

笑ってくれたんだ。

奇跡が何度、重なっても…この瞬間に勝るものはない。

「そばに…そばに居てくれ。」

「…うん、居るよ。」

頼りないほど小さい身体を、そつと抱きしめた。背中に伸ばされたディアの腕に胸が熱くなって少し力をこめた。どうしようもない想いがある。少しだけ不安げなディアの心を溶かすように、どうかこの胸の熱が移るように願った。それでも人は身体を重ねて、どうしようもない…もどかしい想いを届けようと躍起になる。

「ディア…愛してる。」

ダリアに触れる小さな手も。笑つと穏やかに色味を増す琥珀の瞳も。必死に言葉を紡いでくれる唇も。あるはずのない、ぬくもりを感じる甘い声も。何かを背負っている頼りない細い肩も。全て。

俺に色を付けることが出来る、唯一のディアの全てを。

「キース…？」

「泣いてるように見えた…ダリアを見つめて空を見上げるディアが。」

「……そんなことな、いよ？」

泣きそうな顔をするディアにキスを一つ落として、それを拭いさればと心から祈る。立ち入れないディアの間には、まだ届かないけれど。確かに今、震えているディアを暖めるのは俺だと。自分自身とディアに刻みこむように。

* * * * *

ガイヤ城は大きく三個の宮が存在する。大門をくぐって一番手前にある宮は執務用で多くの貴族たちが出入りする。二つ目は帝宮と呼ばれる皇帝のプライベート用の宮である。そこに後宮も存在し多くの妃たちが過ごしてきた。三つ目は産まれた子供や皇太子などが住まう宮だ。ディアの部屋であるダリアのある庭園もここにある。美しいダリアを咲かせる宮ということでダリア宮とも呼ばれている。

先帝の子供は二人。キースと、その姉だった。キースにはを言わさない口調で眉を寄せた。四人の女は身体を固まらせたが、慣れたように微笑みで返す一人の女。リアン。皇太子になって間もないころ身近で手ごろな身分を持つ女であるリアンが閨にあがってきたことがある。他の四人の中にも、そのときに閨にきた女がいる気もするが鮮明には覚えていない。

あのときは、どうでもよかったが…。ディアと穏やかな時間を過ごしている。この五人が与えるものは大きすぎる。

「私たちはご存じのとおり身分も申し分なく、いつでも寝所に侍らせても構いませんので。…オースエル大臣のように無粋な真似はいたしませんわ。陛下はご聡明であられますもの。今のままじゃ済まないことぐらい…分かっておいでですものね。」

「…政務の邪魔だ。侍女なら仕事をしてこい。」

それさえも笑顔で返して五人は部屋を出た。その後の執務室には溜息がこぼれた。

「次から次へと…思いつくものだな。」

「そうですね、しかしオーズエルのこともありますし大きく出てく
ることは出来ず、御手付きになるため陛下のそばに控える侍女に、
というのは…いささか愚かですが。」

「確かに。しかし侍女ならば理由なく暇を出すわけにもいかんな。
仕事をしていれば城に居続けれるんだ。」

「面倒ですね。」

「ああ…厳しく監視してくれ。」

「かしこまりました。」

皇帝の力は偉大だ。しかし一人で広い帝国を収めているわけでは
ない。貴族同士の繋がりや税金によって帝国は動いている。オーズ
エルも愚かではあったが、あれでも大臣にまで昇りつめた男だ。そ
れなりに有能であった。

皇族と懇意になりたいという、各貴族の気持ちも分からなくはな

い。

「自分のこととなると面倒だな。」

「ディア様の出自を知れば、このようなことはなくなりましょう。」

「…ならん。アイリスから亡命したのは…何か訳があるんだろう。」

「……理由はお聞きに…。」

「知らん。しかし尋常ではないことは分かる。」

「やはり皇太后でしょうか。」

「ディアの義母か…。」

「皇帝、軍事総帥であられる御兄弟の不仲は聞いたことはありませんし。」

いつか…と待っているのは本心だ。しかし、どうしても知りたいと思う気持ちが先行してしまう。亡命しようが他国の…同等の力を持つガイアの皇帝である俺にアイリスの皇女たるディアが弱みともなることを話すことは出来ないだろう。

それでも二人の間にある想いは…心は本物だと信じたい。そう思っている。

痛みは分かち合えないことを知ってる。たとえ、優しさや温もり

は分かち合えても。無知が人を傷つけることがあることだって、知
っている。

「…仕事をするぞ。今日はディアと夕食をとるんだ。」

「それでは休憩なしで行きましょう。」

「……頼む。」

幾分か穏やかになった雰囲気の中、五人の侍女とディアの亡命の
理由を頭の中で思案していた。

言葉が、どれだけ脆く不確かなものか私は知っている。

* * * * *

また問題再発ですか。一難去つてまた、一難だっけ…？この状況、昼間、疲れた顔をしたキースと交わした約束。夕食を一緒にとるために晚餐の間へと移動して席につく。二人の料理が置けるだけの大きさを待つテーブルは近くで、しっかりと話しがしたいというキースの希望だった。

大きすぎる晚餐のテーブルは遠いと、ボヤいたキースにいつかの自分を重ねた。正式な晚餐に呼ばれることは少なかった私だけど、父や兄たちは義母がいない間を盗んでは私と母を呼んでくれた。小さい時は遠くに居る両親と兄弟に寂しくて泣いたこともあった。

ガシャン、と食器とは思えないような音を出して目の前に置かれたフルーツの盛り合わせ。料理人は綺麗に盛り付けたであろう形はそこにはなく、きつと今の衝撃で倒れてしまったんだろう。

「あら、失礼しました。」

「いいえ。」

どうしたものか。これは側妃として諫めるべきなのだろうか。でも侍女の服がこんなにも似合わない女性5人はあきらかに貴族出であろう。それを兵士の家柄である自分が文句を言うのは…あまりいい気はしない。キースの立場まで悪くなってほしくない。それが本音。

「ディア様。私たちは本日より皇帝陛下付きの侍女になりました。これから何度もお会いすることになりますので、どうぞお見知りおき下さい。」

「そうですか、それは御苦勞さまで。どうぞ、よろしくお願い致します。」

こつちが気味悪くなるほどの笑顔だった。その人は侍女の地味な衣装では隠しきれない魅惑の肉体で美しくお辞儀した。一片の隙もなく赤く描かれた唇。口元にあるホク口はいやに色気がある。

「私はリアンと申します。」

「私はディアです。」

穏やかに挨拶をしてはいるが、悪意は伝わる。そもそも侍女が一応、上の身分にある私に”お見知りおき下さい”というのは間違っている。そこから見えるのは彼女の望む地位。そのうち、同じ地位。もしくは上の地位にいくから。そう心の声が聞こえる。

185

「私はサスキーアです。私たち全員、以前より陛下にお仕えしておりましたの。もちろん侍女としてではないですけれど。」

「そうですか、これよりも陛下によくお仕えくださいませ。」

「……ご安心ください。ディア様の負担も私たちが来たのですから減っていくと思いますわ。」

「お気づかいありがとうございます。」

リアンという女性とは違い、分かりやすい人だった。敵意の中には嫉妬という憎悪まで感じる。それぞれが望みを叶えにきたのだから。そして…私の知らないキースを知っている。私は馬鹿ではない。皇帝という存在が、どのようなものか。世継ぎというものが、どれほど大切か知っている。閨の教育という存在も。自分も受けたことがあったからだ。（すぐに両親と兄弟によって取りやめになったけど）

この人たちが、それに絡みキースに抱かれたというのは本当だろう。もしかしたら個人的な付き合いもあったかもしれない。それを言ったらキリがないけど、いい気はしない。そして、それを咎める気もしない。

「でもね、陛下が訪れて下さることを負担だなんて、例えでも言わないでちょうだい。私は毎日、本当に幸せです。」

「………そうですか。」

こつちだつて長年、いけすかない義母…現・皇太后の嫌がらせに泣き寝入りしていたわけじゃない。そりゃ、最初は悲しかったけど、部屋に置かれた動物の死骸を高らかに笑いながら、剥製にしようかしらと言つた母を持つ私が、こんなことでへこたれるはずない。

それを知っているからこそ、私の後ろで控えるロイとバルトは何も言わないし、諫めることもしない。バルトにいたっては笑いを囁

み殺しているのが伝わった。

「…そこまで陛下にご執心なんですわね、それではご寵愛が移ろってしまわれた時が心配ですわ。」

「いえ、陛下は心から私を愛して下さいます。陛下は私を蔑ろにはないがしなさりません。絶対に。」

「その自信は…いったどこから来られるのかしら。」

「サスキーア、貴方は感じなかったの？私は陛下と過ごす日々の中で自然に、貴方のいう自信を持っていた。」

「……。」

何を言い返してこない彼女に心の中でガツポーズをした。勝った！悪いけど、敵意を剥きだしにした人に払う敬意なんて持つてないし、持ちたくもないの。サスキーアの隣に居たりアンが口を開きかけたとき、近づいてくる足音に気付いたのか、何もなかったかのように仕事に戻った。もちろん…ご丁寧に一睨みをして。

意外と危機感を持っているらしい。

「ディア。」

「キース、お疲れ様。本当に早かったね。」

「鬼のようにナイトが仕事運んできたからな。」

「ディア様に感謝ですね、これぐらい毎日頑張って頂けるといいんですが。」

疲れきった顔をしたキースの後ろに付いているナイトが悪戯に笑うと、イスを引いてキースを座らせた。そこで、やっと今の状況に気付いたらしい。

「なんとも食欲が損なわれる給仕だな。」

「……ぶっ」

キースの言葉に後ろに居たバルトがついに嘔き出して、それを視線で諫める。

「下がれ。ついでに今日はもう休め。」

「いいえ、湯殿や御着替えのお手伝いを。」

「ダリアの宮へ行く、ディア付きの侍女にやらせる。もう仕事はない。下がれ。」

「…かしこまりました。」

私が悪いことしてると思わせるぐらいの哀愁に満ちた顔で部屋を出て行った。なんだか胸が…痛みはしない。キースが視線を逸らした一瞬にドアからの小さな隙間からご丁寧にも覗んだのが見えた。

小さくため息を落とす。慣れていると言っても人に敵意を見せられるのは好きになれるはずがない。

「面倒くさいことになった。」

「…あの侍女の人たち?。」

「ああ…俺付きの侍女。侍従長をそののかしたらしい。そんなとこまで目がまわらなくて一任していたのが裏目に出た。」

「そっか、お疲れ様。」

そう言って、目の前のスープに手をつける。キースの視線が私に向いているのに気づいて、ふと顔をあげると、少し不機嫌な目をしていた。

「？」

「嫉妬とかしないわけ？」

「どっして？」

「どっしてって…。」

「嫉妬って悲しいだけだよ。凄く。」

「……母親を見てそう思うのか？」

その言葉にはとどろく。こんなに核心に迫る様な言葉はキースは言わなかったのに。

「そうかも。あの人も……皇太后さまも……凄く……辛かったんだと思う。一夫多妻制が普通だとしても……他国から来て、その夫だけが頼りだったんだもの。」

「確か……マリアール王国から嫁いだんだよな。」

「うん、15歳の時にね。当時……マリアールは財政難で沢山の金銀とマリアールの鉱山の利権と引き換えだったって聞いている。」

憎しみの奥にある悲しみは、物心つかない幼い私が見ても胸を締め付けられた。だから母は多くの嫌がらせをされても笑い飛ばしてはいたけど、文句を言ったり父に相談したりはしなかった。母も……

同じ想いを抱えてたから。ただ…一人を愛して。そばに居て欲しいと願った。

それが例え金銀と引き換えでも…あの人には愛することしか出来なかったんだ。

「キースは気にしないで、この帝国に最善の選択をするべきだよ。私たち皇族は国に産まれて…国に生かされてるんだから。」

「…そうだな。」

「うん。」

この胸騒ぎも全て。抑えつけて笑顔を張りつけ生きていかなきゃいけないんだ。私たちは。それは決して不幸ではない。皇族は国の象徴であり生きる希望だから。教えられてきたとおり笑って、全てを笑って見守り続ける。

ふ、と昔の記憶が溢れてくる。

「いつだっけな…教育係の人に皇族は人前で泣いてはいけませんって教えられたんだ。それって…悲しいよね。泣くことが許されないなんて…それって心を捨てろって…人形でいろって言われてるのと一緒になんだよ。」

「ディア。」

「結局それを聞いてた母が怒り爆発させて撤回させてたなあ…泣けばいいよ、って言うってくれて。それって凄く幸せなことだね。」

「そうだな。」

穏やかな雰囲気にもネイトもロイもバルトも笑みを浮かべる。キースは、そっと私の髪を撫でてくれた。

「自分らしく生きることは大切だ。そうだろ？」

「…そうだと…いいな。…皇女だからって…何も変わらないのに。同じ人間で…痛みも…悲しみも…私だって心があるのに。」

どうして。形式や格式、しきたり習わし。そんなものが優先されるの。どうして…両親の死に目さえ立ち会うことが出来ないの。どうして…私は人の犠牲の上でしか生きれないの。

母の笑顔が浮かんでは消えて行く。胸が、グツとつまる。次いで、喉が焼けるように痛くなつて。自然と胸に手を当てる。落ち着け、と命じても動悸は収まらない。思い出さなければよかった。

母との思い出なんて、まだ笑って話せるものではないのに。

強くなったとも思ったの？いつまでも闇に過去に愛に未来に怯えている弱虫のくせに。

「ディア様…お疲れのようですね。」

「もう休もう。」

「ロイ…バルト……。」

二人の黒髪がシャンデリアに輝く。あの子と同じ漆黒の色は増して増して、やがて紅くなる。大好きな友達。私のために火に包まれた子。

「…………アカイ…………。」

姫様はお逃げ下さい。ロイとバルトと必ず生き延びて。

姫様のために、この命を投げ捨てる事が出来ることを。貴方の幸せの礎いしすえになる事が出来ることを心から誇らしく思います。

姫様…必ず幸せになってください。

いつもはクレイディアと呼ぶのに。私を姫様と呼ぶ声が奮い立たせるの。

そして私は醜くも”生”に縋りつことではしか報いることが出来ない。

「ディア?!」

ああ…揺れる。漂つように浮いて沈んで。私はいつも愛され。私
はいつも守られ。返すことも出来ないまま、みんな逝ってしまう。

私のために。私が”生きる”ために。

「真つ赤に燃えたね…あの火が…綺麗にリンを…消していったね
…」

「クレイディア様……」

「ダリアも…母様と父様の肖像画も…みんな…燃えちゃったね。
思い出も一緒に燃やしてほしかったなあ……」

あの熱い火の中で。リンは何を思ったの。本当に後悔してないの
?死にたくなかったよね。なのに、私が決断させた。必要のない決
断を。愛嬌があり可愛かったリンのことだ幸せなんて、すぐに手に
入っただろうに。

どうして共に生きることが出来ないの

「あの時の決断に間違いなんてない。お前が疑うな。お前に託した
リンを責めるな。」

「ちが…うよ…一緒に生きたかった…だけ…そうすれば私…
きっと何でも我慢できたのに。そう言ったのに。リンにも。言った
んだよ。あの日。言ったはずなのに…。」

「生きるんじゃないかって…リンはディアに幸せになって欲しかったん
だよ。」

「…ふふ…幸せになんて…なれるはずなのにね。」

蓋をした記憶が紅い焔にまかれて焼き尽くされていく。流れ出し
た忌まわしい、それでも愛に溢れた記憶たち。それは…幾千の星た

ちのように美しいものではないけれど、掴んで、そっと胸にしまっておきたいの。

お金が欲しいわけじゃない。敬意を評されたいわけでもない。ただ四季それぞれに美しく咲く花を小さな家で家族みんな揃って見れば、それでいい。

手を伸ばしても伸ばしても得ることのできない夢は、いつからか深く私を蝕んでいった。ダメだって、分かっている。闇にのまれちゃいけない。強く、前を向いて、空を見上げて。涙を流して笑って。生きて行かなくやいけない。愛を…目に見えない想いを沢山もらったから。

「ねえ…それって幸せ？」

うん、幸せだよ

「どうして？貴方はいつも独りなのに。」

独りじゃないよ、ロイとバルトが居る

「きつと二人も貴方のために命を投げ出すのね。」

…そんなの、いや

「だって貴方は何も出来ない。」

出来ないよ。強くなるの

「貴方のせいでお母様もリンも死んだのに？」

やめてっ！貴方ダレなの？！

「どうして貴方は無傷なの？」

いや…っ

「ドウシテ アナタガ イキテルノ？」

嫌だ！聞きたくない！貴方ダレなの？！

ワタシ ハ ワタシ

「…いやあああああああ！」

想いの中へ

強くなるからと、嘆いている間に失うのはイヤなの

* * * * *

「ご心労ですね。」

優しい老医がそう告げて、部屋には静寂の中に少しの安堵が混ざる。キースはベッドの上で綺麗に組まれている小さな手にそっと触れた。暖かいそれは…今まで、どれほどの苦痛に耐えてきたのだろう。

「見たところ…かなり長い間、病んでいたのではないかと思います。」

「長い間…?」

ポツリと老医が漏らした言葉は、この兄弟から言葉を奪った。そばに、ずっとそばに居た。アイリスを亡命してからも…半年になるというのに。笑顔を見せていた彼女…平穩に過ごしていたのは偽りだったのか。

漠然とした憤りにグツと拳を握った二人を横目に老医は優しく落とした。

「人の心とは難しい。ですが、胸のうちに巢食う不安を口に出せないのは弱さではなく、いとしい者がそばに居るからかもしれないよ。」

「そう…ですね。」

心ここにあらずな二人は言葉にならない想いが溢れるように顔をしかめている。そんな二人になおも老医は続けた。

「悲しい過去を忘れないようにと…彼女なりの誠意なのかもしれないね。」

「ディア様…らしいな…。」

「ああ…。」

思い出さなくてもいい過去が…毎夜、頭に過あやっていたのかもしれない。責任感が強く人一倍、優しい彼女は、それを胸に毎日…必死に笑っていたのだろうか。

ギリギリと痛む胸は共有する痛みと…分かってやれない痛みがあつて。自分たちの不甲斐なさが、どうしようもなく己を咎める。こうなっている自分たちを知り、また彼女は罪を増やしていくのだろうか。

「それでは、また参ります。」

「ありがとうございます。」

微笑みを携えた老医に呆然としながらもお礼を言つて見送る。部屋には、キース、ロイ、バルト、ネイト、シユリのみが残つた。

「…まだ言つ気にならんか。」

「……はい。」

「ディアが亡命した理由が分かれば何か出来るかもしれん。こんな風にディアの心が蝕まれることもなくなるかもしれないのか！」

「何も言えません…。」

「……分かった。一つだけ聞く、答える。先帝と母親は…暗殺されたのか？」

「それは違います… 先帝シュリウス陛下は病に倒れ母クラリス様は…ご自害なされたのです…。」

空気が凍り雰囲気は一変した。先ほどまで激情していたキースさえも言葉を飲み込み唖然とする。アイリスがいかに強大な国であるうと、帝国の上層に居るもの。しかも先帝の寵姫たる側妃が自害ということが知れば国は乱れるだろう。

「先帝が危篤と報せが入っても…皇帝が意識不明の時…正妃である皇后さまの許可なくして皇帝寝所に入ることは許されず、クラリス様とディア様は…先帝の最期に立ち会うことも出来ず、その二週間も後に正式な報せが届きました。もちろん亡くなった、すぐ後にクレイディア様の兄上であらせられる御二方のご厚情により報せは届いておりましたが。」

「母クラリス様の時もでした…皇帝に即位なさった兄上ロークランド陛下のご配慮により一週間という短い時間で報せが届いたので、ご自害だったため、重臣方は体面のため知らせるのを戸惑っていた。」

「姫様は…クラリス様が亡くなられるなど思ってもおらず…それは取り乱されて。」

情景が甦る。あの日だった。絶望に打ちひしがれてもなお、生きなければならぬディアを連れてアイリスを出たのは。リンが火によつて死んだ日だ。

* * * * *

「真に申し上げにくきことなれど…御母上様…ご自害により、ご逝去あそばされました。」

「母が死んだ…？自害だと…？」

「はい。」

「なに…を…冗談が…すぎる、ぞ…。」

震えが全身に伝わっている。痛々しいほどに心情は表に出て、いやに静かな声色が響いた。

「…クレイディア様におかれましては…クラリス様のご法要時に喪主を務めて頂きます。」

「…いつのことです。」

「は……？」

「いつ…母は死んだのですか？」

「…… 8日前に御座います。」

従者の言葉に目を見開いたクレイディアは震えを抑えながらテブルの上に咲く一輪のダリアを持ちあげ、投げつけた。報告を淡々と告げていた者のすぐ横で花瓶が割れる。静かすぎた部屋に木霊した音に彼女はひるむことなく続けた。

「…1週間も前ではないか！何故…娘たる私に…！皇女たる私に今まで何も伝えぬ！」

「…ご自害であられる場合、本来ならば慣例に従い三ヶ月はお知らせ出来ないところを唯一の御子であるクレイディア様への新皇帝口クランド陛下よりの格別なるお図らいで叶った次第でございます。」

「慣例…慣例…と…何故、親の死に目にも会えぬ…！私はこの帝国唯一の皇女だ！先帝の残した皇女ぞ…！母はヴィスタル公爵の血筋ぞ…！」

「…お静まり下さい…！」

「静まれ…だと？そなたの娘を殺してやるうか！そなたの居ぬ間に！！固まった娘にしか会えぬ苦しみを味あわせてやるうか！」

皇帝付きの従者が言葉を嚙む。ロイとバルトは暴れ狂うディアを抑えつけ、何度もその頬に流れる涙を拭った。そしてクラリス妃の腹心ともいえる侍女が泣きながら持ってきた遺書となったディアへの最期の手紙には…この全てが書いてあった。自害してもなお、いとしい娘に生きてほしいと、綴られ…この帝国を出るとも書かれていた。心になおの大きな傷を与えないために。

「姫様っ?!何を……。」

「この国を出る。母の最期の望みだ。」

「いったいどちらへっ!」

「分からない。どこでも…この国の干渉がない国まで。」

「私共もお供を!」

「いらん、ここに残れ。私を逃がした罰が与えられるかも知れんが、ヴィスタルの伯父上は、そなたたちを擁護してくださいさるでしょう。」

「いえ!何を言われようが付いていきます!」

* * * * *

「その後、俺たちは宮を出ました。リンは…自ら火を付けたのです。姫様が逃げる時間をかせぐために。姫様は、それを城を出た直後に気付かれて…ひきかえそうとしましたが…自分が抱きすくめ、強引に逃げました。」

それは、あまりにも悲しい現実を…ディアに突き付けた。必死に生きようとしたディアをリンは助けた。幼いころから共に育ち身分を超えた仲になっていたリンでさえ…。異常な事態に対応し、その命を投げ出した。震える彼女を抱きすくめて、生きることが義務付けたのは自分たちだ。

毎日、笑って生きていた彼女に。幸せを代弁するように生きていた彼女に。

生きることが義務と感じるようになった彼女の闇を見て見ぬふりをして。

「では…ディアが言っていたことは嘘だったのか。」

「はい…しかし……ディア様は何を言おうがリンを殺したのは自分だと言い張ります。ディア様は頑固ですから。むしろリンを殺したのは俺たちなのに。」

「…ディアの性格を知っていれば侍女を止めることも出来たはずだ。」

ロイの独白にキースは絞り出すように言った。すぐに隣にいたバルトは笑った。ディアの手をそっと撫でながら。

「はっ…アンタは何も知らない。」

「なに？」

「その侍女のリンが俺らの妹でもか？」

「っ……っ！」

「ディア様は知らない。母親も違うから名前も違う。」

「お前ら…。」

「俺たちにとつたらリンもディア様も大切だった。」

「あの時の決断が間違っていたなんて迷い…持つことは許されない。」

それは大切な妹への罪悪感。諦めることは出来ない。彼女の幸せを見届けなければ妹は空の上でも自分たちに文句を言うだろう。それでも…彼女は…祈りは無意味に近いと悟っていた。だからこそ笑

っているのだろうか。

「……これ以上は何も言いません。」

ロイはそれきり口をつぐみ、そっと細いその身体をなぞる。

「…下がれ。」

キースの言葉に名残惜しげに出て行く後ろ姿に主従を超えた絆を感じた。それは、あまりにも儚くて細いものだけだ。それは彼女も知っているだろう。この絆によって二人との距離が開くことも、二人の命を削っていることさえ。

*
*
*
*
*

「お父様ー!」

「そんなに走るとコケるぞ。」

「ふふふ、ディアは本当にお父様が好きなのね。」

「うんっ！お母様も大好き！」

豊かに緑がなる大国。永く平和が続いている、その象徴として都市にそびえ立つアイリス皇城。美しい細工がされた城は遠目で見ても壮大だった。後宮のある庭園に三人は居た。皇帝である父と、その側妃である母。そして二人の愛の象徴である姫。側妃である母は、その立場にありながらも皇帝に深く愛され大切に扱われてきた。

しかし…その幸せはクレイディアが15の時に崩れることになる。

クレイディアの前に膝まづく二人の青年は、十七歳になるロイ、バルトだった。

「陛下の遺言どおり、すみやかに兄上であらせられるロークランド殿下が新皇帝に即位されます。」

「…。」

「戴冠式には母君であるクラリス様と出席するよつにとの殿下よりのお達しです。」

「そう、分かりましたと、兄上へ伝えて。」

「…はい。」

「母上は大丈夫？皇妃様…いえ…皇太后さまに何かされてはいない？。」

「はい、以前より幾分か部屋は狭くなりましたが…つつがなくお過ごしです。」

「良かった…。」

あの母のことだ…自分の生活が簡素になろうが…きつとかまわないのだろう。ただ…父である皇帝が心休まる場所であり続けようとする事だけは、いつも躍起になっていた。二人は本当に愛し合っていた。

「お母様に…会いたい…。」

「戴冠式は5日後にございますので…それまでご辛抱を。」

「…。」

その言葉に1つ頷いて2人を下げる。暗闇に浮かぶ月が美しく光

を放っている。

「お父様……」

強く前を見ていた母のように。皇帝である父が必要としてくれた私たちとの時間。正妃でありアイリスの皇妃であった、あの人がどんなに悪質なことをしてこようが頑なに守り切ったように。

「私も強くありたい。」

叶いもしない願いは、いとも簡単に崩れさる。目の前に立つ壁を乗り越えたいと思うのは普通でしょ？動かしたいと、思うのも。ときには負け、地に膝をつけることもあるけれど、それでも、ひたすらに生きていくべきなのでしょう？

強く、強くならなくちゃ

何よりも壁を越えようと思うことが大切だと、あの時は思えた。そう……あの時は思えたのに。

「会いたかったなあ…お父様の最期。一緒に居たかったなあ…」

落とした言葉は月の光に吸い込まれるように消えていった。

*
*
*

「ディア。」

「……キース…？」

「気分はどうだ？」

「あ…れ？何で私…。」

「夕食を食べてるときに倒れたんだ。」

「……覚えてない……。」

「そうか。」

「……………」

それは永い永い夢のように。脳を浸食していく。あれは……もう思い出したくもない過去と愛おしい過去が入り混じるものだった。

「あ……れ？朝……？」

「ああ、よく寝たな。」

「あ……ごめんね、私……。」

「いい、今日もゆっくり休め。」

「うん……ありがとう。」

仕事に行ったキースの背中を見送る。私は一人でダリアの庭へ出た。穏やかな朝の陽ざしが身体を包みこむ。ああ……生きてるんだ、と安堵し……同時にまだ逝けないのだ、と慨嘆する。

「ディア様、誰も付けずにどうかされましたか？」

「…サスキーア。」

どうしてダリア宮に入れたのか、と思うまえに彼女が来ている侍女服が目に入る。確かにあれがあれば、ある程度の所なら仕事して怪しまれずいけるだろう。でも今は嫌味を言われて笑顔で返せる余裕がない。昨日の今日で何かしてくるとは思わないけど、疲労困憊な私はなるべくそれを出さないように必死に笑顔を作った。

「あら…？少し顔色が悪いですね。」

「ありがとうございます、そうですね…少し気分が悪いので失礼いたしますね。」

体調の悪さに気付いてくれるなんて意外と人をよく見るな、と感心しつつ、それに乗じて部屋に戻ろうとした私の耳に入ってきた言葉に一瞬、目の前が真っ暗になった。

「陛下は今でも

…ますか？。」

闇が覆い尽くす。負けまいと思えば思うほど、足には力が入らない。あの優しげな声色で他の人へ愛の言葉を囁いたのだろうか。出自など関係ないと言う、あの人も…私を皇女として見ているのだろうか。私は終わりのある始まりを歩いて行かなければいけないのだろうか。いずれ対面し乗り越えるモノを…今すぐ乗り越えることは

出来なくて。

愛してる、と私に告げたキースさえ信じれなくなった私は弱い傲慢な女。ああ…信じたいと嘆き涙を流すのは…あまりに滑稽だ。

「サスキーア…私は調子が悪いの。部屋に下がるわ…もし何かあれば私ではなく貴方の主である皇帝陛下にお言いなさい。」

返事を聞くことなく、歩みを進める。止まってしまうえば私は弱いただの女になる。ここで。キースのそばに居ると忘れてしまいそうだ。皇女である誇りも女として持つべき強さも威厳も何もかもなくしてしまう。

私のなけなしの強さの全てが、なくなってしまう気がした。

「あ…う…う…」

いとしい。あの人は私だけ見ていると思えるのに。信じるという言葉は…数々の意味を重ね存在するのに。私は、どうして言葉を紡

げないの？

「寂しいって…不安だって…言える強さがあれば…」

それは強さなの？傲慢なの？侵食されることが怖い。私達は引き寄せられた別々の固体で。それぞれに。そう、それぞれに。生きて行くの？

「キース…には…私だけを見てほしいなんて…言えない。やっぱり…言えないよ。」

私には全てを曝け出すことは、やっぱり出来ないよ、母様。

強さの秘密を教えてくれた母様は笑顔を浮かべた。その表情は眩しくて、私は焦って母の手を握った。どこか遠い人のように感じてしまった。そうして言った。素直に全てを話すこと、大切な人に自分の想いを伝えること。そうすれば歩み寄ることが出来る、と。だから分かりあえる、と。

強く信じあうことが出来る、と。

許されないのは分かってる。この大陸には二人しか皇帝は存在せず、多くの国：貴族たちは必死に血縁を結ぼうと娘を差し向ける。当然。帝国のため、多くの国との和平や繋がりが必要になる。帝国とは藩属国を持つかわりに恩恵を与えなきゃいけない。血縁は、そのもつともたる例だ。

永遠に残る絆。

陛下は今でも情事後…離すまいと抱き締めて眠られますか？

愛していると呟き落とし…彼は私を抱きしめて眠る。まどろみの中
…どこにも行くなと囁きながら。

闇の欠片

空に浮かぶ星に願いを込めることが無意味だと……私は知っている。

*
*
*
*
*

「大丈夫だよ……私は大丈夫。」

誰に言うまでもなく、ただ自分へ。闇にのまれるとき、いつも繰り返す私の持つ唯一の防衛。真っ直ぐに胸に溶け込めと願いを込めて繰り返すの。あの時…きつとリンは泣いてた。どうして気付けなかったのだろうか。怖くなかったはずがない。私と同じ女の子だったのに。

私が死ねば…全て終わってた。

憎しみも愛情も。

全ての輪廻は終わったのに。

どうして私は生きてるの？

どうして私は笑えるの？

どうして…私はキースを、こんなにも愛してしまったんだろうか。

ああ…悲しい。人を愛することに罪悪感を感じる自分は、なんて罪深いのだろうか。私は…悲しいの。生きることが。どうして人を愛して…死にたくないなんて思ってしまったの？

誰よりも先に死ぬべきは自分なのに。

信じる事が出来ず縋りつくのは、あまりに滑稽だ。

コンコン

無機質なドアが開くのを呆然として見つめる。そこから入ってきた者を認識し、すっと涙を拭くと完璧な笑顔を作った。座るように促し、気付かれないように一つ溜息を吐く。こんな絶妙なタイミング。きつと全て知ってのことなんだろう。

「ディア様、サスキーアから体調が悪いとお伺いしましたが、どうですか？。」

「ありがとうございます、もう平気です……リアン。」

赤く描かれた唇。口元にあるホク口。幾分か見慣れた侍女の服。サスキーアとの見事な連携プレーに、心の中で毒付いた。

「嫌味でも嫉妬でもありませんので、どうぞご容赦ください。」

「ええ、どうぞ。」

「皇帝の妃というのは大きな役割を担います。各国の要人との交流は、何より他者に対し威厳や強さを示せねばなりません。」

「…そうね。」

「貴方にその覚悟が御座いますか？貴方に…その強さが御座いますか？」

「あると言つても、ないと言つても解決はしない。人の心とは難しく言葉で表せまい。貴方は私に何を望みます？」

「…恐れながら、皇后への立后を放棄して頂きたく。」

「皇后への立后など兵士の妹である私ができるはずもないでしょう？」

「いいえ、陛下のご寵愛の深さでは…あり得ぬこととは言い切れません。」

「…分かりました。誓文書は、そちらで用意してくれますか？」

「もちろんで御座います。準備が出来次第…ご署名を頂きに参ります。」

「分かりました。」

ふうと一つ溜息を落とすと、先ほどまで聡明な口ぶりだったリアンが変わる。

「やはりディア様は陛下の妃にも向かぬ方。」

「…」

「キース陛下は…この帝国のひいては、この大陸の上に立つお方。覚悟も強さも無い方が隣に立っていいはずがありません。」

「…この大陸にはアイリス帝国が存在する。大陸の頂点に立つはキース陛下のみならず。軽々しく上を決めつけるものではない。」

「アイリスの肩を持つとはやはり…未練がおありなのでは？」

「十七年も住んでいた国に愛着の一つ湧かずに、どうするの。」

「…そうですね、しかし貴方はキース陛下の…ガイヤ帝国皇帝陛下の妃であるのです。そしてこの皇城は、主たる皇帝陛下のおわします場所。覚悟が足りないのは決定的です。」

「…確かに、そうですね。軽口なのは私のほうでした。」

「すみません、と小さく頭を下げると、侍女に頭を下げることはありませんと厳しくも正論が返ってきた。今のこの人に…いや…昨日からこの人には悪意がないのかもしれない。ただ純粹に帝国のため…ひいては皇帝であるキースのために動いているのだろう。」

「サスキーアとの器の違いが目に見えて分かる。」

「皇妃となるに相応しいのは…貴方なのかもしれないね。」

「…それを貴方が言っては私の立場がありません。」

「ふふふ、確かに。戯言でした。忘れてください。」

少し不機嫌そうに寄せられた眉に私は笑顔をこぼす。輪廻のように周った不幸の連続は、ここで終わるのかもしれない。ガイヤの地で。初めて人を愛した、この地で。

「貴方は不思議ですね、儂げな見目とは違い…。」

「芯がある。そう告げたりアンは何故だか少し穏やかな表情を見せた。」

「とても…高貴な…現・皇太后ミレリア様に似ておられます。」

「ミレリア様…。」

一度、会ったことのある美しい女性が臉に想い上がる。ダリアが似合うわね、と微笑んで頬にキスしてくださった姿。そういえば今は放浪されている先帝と一緒に世界中について周っているとキースが言っていた。

「…長居をいたしました。体調が悪いところ申し訳ありません。誓文書の準備が出来ましたら、また参ります。」

「御苦労さま。」

美しい流れで部屋を辞した彼女を見送り、そっと庭に出る。

「…」

苦しい。痛い。

あの手で抱いてきた女も。これから抱く女も。全てが憎い。どうか私を切り捨てて。こんな醜い嫉妬を貴方に当てる前に…この命を…私を…見捨ててくれればいいのに。あの人は優しい。私を捨てることなく、掬いあげ守るのだろう。

「それは…あまりに、も……残酷だね。」

私はアイリスに帰り罪の罰を受けるべきなのだろうか。

*
*
*

「ディア。」

「あ…キース。」

「もう体調はいいのか？」

「うん。」

近づいてきたキースは見上げている私の唇に温もりを落とすと、愛おしげに髪を撫でた。湧き上がる言葉にならない感情に世界が色づく。深く蒼い蒼い瞳が私を見つめて。言葉も感情も色も愛も全てを与える。

「さっき…リアンがダリアの宮から出てきたが何か言われたか？」

「うん、言われた。」

「何を…。」

「言われたってどうか…話しをただけだよ。リアンは凄く聡明だね。この国を…愛してるって分かるぐらい。」

「アイツの家は元々は兵士の家だ。武勲をあげ三代前の皇帝が爵位を与えた。国に対する忠誠心は他の貴族たちよりは大きいだろう。」

「そっか。」

ダリアの宮にある東屋に手を引かれて、そこに二人で座った。肩に回った手が強くて大きい。私は安心して身体をもたれさせた。ああ…幸せだ、と心が躍る。未来が開けるような感覚に酔いしれ、そっと瞳を閉じた。

偽りなのに。

「愛してる。」

「…ん……」

甘い、甘い言葉と熱い、熱い唇が満たしていく。心に巢食う闇は簡単には取れない。キースが私を世界一愛していたとしても消えない。満足いく道が選べても消えない。だって、そうでしょ？いつだって未来は私に冷たかった。

こうして、言葉を求め悲しげな表情を浮かべたキースがいても私には伝えれる言葉がないんだよ。吐露すれば必ずしも救われるなんて、思えないんだよ。

優しい、キース。きっと真実を知れば…キースの持つ全てで私を守ってくれるんでしょ？

優しい、キース。真実を知れば貴方は迷うことなく、剣を捨ててしまっ。

「全てを曝け出さなきゃ…そばに居れない？」

「ディア…。」

「言えないこと…が…あるんだよ…なのにキースが好きなんて…ズルイかなあ？」

抜けたような語尾に気付くよりさき…涙が流れた。泣くのは嫌いなのに。嘆いてばかりじゃ…願ってばかりじゃ…何も変わらないと知っているのに。どうして飽きもせず繰り返すのだろう。

どんな幸せも私には淡く見えて。

「…愛してる。」

低く響いた声と共に涙を這う唇が愛しい。身を擦る私を強く強く抱きとめて、何度も繰り返してくれる。

「汚いよ…。」

「全然。」

「しゅっぱいでしょ？」

「…ちよつと。」

「キース…大好き。」

「俺も。」

「忘れないで……ここに居る私も本当の私だって。」

「ディア……クレイディア……。」

「凄く……辛いことだったんだよ？でも……無かったことになんて出来ない……したくないの。だって……そうでしょ？それを全て通って今の私は居るんだよ。」

だから

「過去なんて関係ない……なんて……言わないで、ね？」

全て背負いたいの。

それをキースにも背負って欲しいわけじゃない。辛かったね、と抱きしめられたいわげじゃない。悲劇のヒロインになる気はないんだよ。口に出ることは心の一部にも満たないほど少ないけど

「……おいで。」

重なる身体に願いを込めることはしない。ただ今も生きたい。今を永遠のように感じたい。祈りを放棄したってキースと居れば願いは溢れて行くのに。

「っ」

「口…開けて。」

「あ………」

忘れないよ。だからキースも忘れないで。彼女の言ったキースのくせも全て。胸を抉られる時でさえ、私は忘れないから。

* * *

「ディア、起きたのか？」

「うん、ちよっと庭に出てくるね。」

「すぐ戻れよ。」

「はい。」

「ちょ、なんか羽織ってけ。」

「…はい。」

上着を羽織った私を見て、もぞもぞとシートにくるまったキース。月が爛々と輝き暗闇に光をさす。暖かい白い光がダリアを照らした。

「アイリス帝国第一皇女クレイディア・シュゼール・ダリア＝アイリス様。」

夢が醒めるとき

「ロイとバルトに休みを？」

「うん、こっち来てから…とくに私が城に住むようになってから、ろくに休んでないでしょ？」

「確かに、そうだが…。」

「私が言っても聞かないだろうし、キースからの命令ってことで地方での簡単な仕事を二人に任せてほしいの。日にちは…あ、今度ある舞踏祭のときとか。私は出ないし部屋に居るもの…安全でしょ？」

「…あいつらが納得するか？」

「だから…キースの命令ってことにするの。」

部屋に戻ると寝ていると思っていたキースが私を迎えてシートでくるまれる。冷えてる、と不機嫌に寄せられた眉に笑顔を返すと、幾分か和らいだ。少し前から気になっていたロイとバルトのことを言うと、再び怪訝そうな表情をしたので口早に言葉を繋げる。

「…。」

「お願い、キース…。」

「分かった、分かった…調整してみる。」

「ありがとう。」

「ああ。それより舞踏祭のこと、どうして知ってる？」

「侍従長が出欠をとりに来たの。」

「いつのまに…。」

「ネイトの許可は得ているって言ってたからキースも知ってると思っただ。」

「ネイトめ…。」

「もう…寝よ？」

「…ああ。」

グツと力の込められた腕の力が暖かい。すり寄るよると薄い夜着越しにキースの大きな身体を感じた。

「「おやすみ」」

* * * * *

「嫌です。」

「俺も無理。」

「…お前ら…。」

執務室。書類を処理しながら目の前に立つ二人に溜息をこぼす。
昨日ディアと約束したことがあって、手ごろな任務はないかと探した。

「なんで、そんな辺境地の国庫の確認なんて。」

「だから…文官の護衛だって言ってるだろ。」

「俺たちは皇帝陛下の唯一の妃ディア様の護衛なんで手が空いてるヤツにでも頼んでください。」

口の減らないバルトに苛立ちがつのる。ディアの願いは叶えたい。きっと叶わないことが多かっただろうから。でも、これだけは無理かもしれない。頼みの綱だったネイトもさつき苦笑いを残して部屋を出たし。自分でなんとかしなければいけないのか。

「失礼いたします。」

「ナイト！お前：いったいどこにっ」

「いや、助っ人が必要だと思ひまして。」

ナイトの後ろから微かに後ろめたい表情をしたディアが半分、顔を出した。

「ディア様！聞いてください！陛下は俺たちに国庫の確認に行く文官の護衛をしろというんですよ。」

「…バルト、ロイ。行つて？」

「ええ?!」

「貴方たちも知っているでしょ？国庫は万が一にも国を守る要。その確認は必要不可欠でしょ？その護衛なんて私の護衛より何倍も価値あるものよ。」

「そんなことはありません！姫様が産まれて十七年ずっとそばに居たんですよ！」

駄々をこねるような二人にディアは悪戯にはほ笑むと一言、告げる。

「今回、行くところにね…黎明っていう珍しいダリアがあるんだって。アイリスにもここにもないの。だから…出来るならお土産に持って帰ってきてほしいの。」

「任せてください」

「本当に？嬉しい！楽しみ！」

「持ち帰り用の馬車も必要かもしれないな。」

「確かに、ダリア宮に埋めるとしても最低百本はないと庭園で浮くな。」

にこにここと笑うディアの横で真剣に相談しはじめた二人。最初から…ディアが言ってくれば良かったんじゃないのか、と思わずにはいられない。さっきまで緊張はなんだったんだ、と溜息をこぼした。

「お疲れ様です。」

「お前の機転の良さには感服するよ。」

「それはそれは…有り難いです。」

「ナイト、仕事の大まかな内容を教えとけ。」

「はい。」

ナイトに連れられてロイたちが出て行くは無意識に溜息が出た。

「ふふふ、ありがとう、キース。」

「ああ、最初からディアが言えば良かっただろ？」

「私が言っっちゃ意味ないじゃない。」

「…そうか。」

「本当に、ありがとね。」

ゆっくりと無駄一つない動きで近くまできたディアを引き寄せて膝の上に座らせる。歴史ある執務室の重厚なイスがギシッと音をたてたが、気になるはずもなく唇を重ねた。

「ん…っ、…」

「…ご褒美もらわなきゃな。」

「っ」

「愛してる、ディア。」

俺だって分からない。人をいとしいと思う心が自分にあったのか

と思うほど。でもたしかに、目の前にいるディアの髪も瞳も唇も身体も心も全てが欲しいと思う。こんなにもディアを渴望して求めるんだ。これを愛と呼ばずに…なんと名前をつけるんだ。

過去のどの女ともかぶらないディアの全てが愛おしい。

「キース…仕事は？」

「もう終わる。」

「うそ。」

「そこは騙されとけ。」

「……ん…」

俺を受け入れるように開いた唇を、ゆっくりと堪能して甘い香りになり寄るように抱き締める。まるでディアという花に呼び寄せられた蝶だな。こんなにも儂く、脆く、強い女はどこにもいない。

「キース…あた、しも……きつと…愛してる…。」

ああ…俺はこの言葉を聞くために生きてきたような気がする。俺が予想するに…愛する者の死が続き、それが自分に起因しているデ

イアにとって人に愛し、愛されることが…どれほど恐怖を抱いているのかは分からない。そんな彼女が愛していると眩いたんだ。それは何千の星を掴むよりも価値あるものだと思える。弱さを認めないデアアが必死に紡いだ言葉を、ひどく愛しく思う。

「キース、…っ…」

花の咲く今のガイアの季節にふさわしい薄いシフォンが何重にも重なりできているドレス。その中に侵入しようとしていた俺の手に小さく白いそれが重なる。

「…っ…っ…執務室だよ…?」

「だから?」

「…っ…っ…」

咎めるような言葉を吐きだす唇を塞いで、その自由を奪う。俺には、こつすることしかできない。事実を知らない俺は蚊帳の外に居るようで。それでも、その中に手を差し伸べるだけのことは出来るんだ。そうデアアに伝わるように。早く、その手を掴んでくれるように。

「キース…ッ!」

吐きだせばいい。辛いと、悲しいと。嘆いてくれれば俺はいつだって、その手を掴み身体ごと抱きしめてやる事が出来るのに。

それでもディアは…いまだ閉じない傷を抱え、立ち上がることを望むから。

「全部、全部任せろ。俺はお前ぐらい受け入れる大きさはある。」

「キース……。」

「過去なんて関係ないなんて言えない…今のお前を作った過去を…知らないふりなんて出来ないんだ。」

「…大好き……。」

「ディア……。」

言葉を噤んだ彼女にこれ以上なにか言うことは出来なくて。委ねてきた身体に熱を与えることしか許されない。身体も心も確かにここに
にあるのに。

「お前は……どこかに行ってしまうようで怖い。」

*
*
*

生きることを義務と感ずるようになった、あの日。出来るなら死んでしまいたかったの。生きる価値なんてないって……思ったんだよ。でも……でもね……今は生きていることが産まれてきたことが……こんなにも幸せだと思える。

「明日からロイとバルトが居ないな、さびしいか？」

「…っあ……………」

「ん？」

「…、さびしくな…ッ」

軋むベッドが激しさを増していく。時折、耳にかかるキースの吐息にグツと熱があがった。こんな…こんな時に話しかけるなんて原則だよ。

「明日は面倒くさい侍女たちも休みをとって舞踏祭に参加する。デアアも少しは気楽だろう。」

「っん…！…、あ…」

「…もう喋る気力もないか。でも…まだダメだ。」

「やあっ…！…ッ…、あ…。」

温もりと愛おしさを残して夜は開けていく。時は止まることなく動き続けて。どうか明日も晴れるようにと祈ることしかできないね。

* * *

すでに軽く一時間。白を帯びた光がかかっているカーテンの隙間をぬって入りこむ。無意識の中でも抱き寄せられている腕の力は離れることはなく、ホッと息をはく。ゆっくり、キースの顔を眺めた後。そつとベッドから抜け出して、軽い夜着を羽織る。薄っぺらく頼りないけれど、この熱を冷ますには丁度よかった。

ギィイ

ダリアの庭に出るときの、このドアの音もなぜか愛しい。穏やかな音を忘れることのないように心に刻む。

「そこに居るのですね。」

ねえ…涙は悲しいときにしか出ないと思ってたの。でも、違うね。
いとしくて…キースをひどく愛した今は…愛ゆえに涙が流れるよ。

「いつてらっしゃい。」

「はい、いつてきます。」

「何かあったら、すぐ呼べよ。」

小言を続ける二人に笑顔を返して半ば強引に送り出した後、今夜の舞踏祭のため慌ただしく動くキースと短い休憩を共にしてダリアの宮に下がった。オレンジに輝く夕日が出るころには周りに侍女一人もおらず、刻一刻と舞踏祭の時間が迫ってきていた。

今日の舞踏祭の主催は皇帝であるキース。皇帝は最後に着座するため、今は雑務に追われているらしい。悪いな、と申し訳なさそうにしたキースの頬に口付けを落としたのが、まるで色あせた思い出のように感じた。

「クレイディア様。」

夢は醒めるものでしょう？

大嫌いな神様……。知ってたから大丈夫。未来は、いつでも冷たいと。

対峙

「めんどくさい。」

「陛下……。」

いそいそと俺を正装していつてる侍女の傍らで呆れたような溜息をついたナイトに目をやると、やれやれとでも言いたげな顔をしている。

「ディアは、きっと寂しがつてるだろう。ロイもバルトも居ないんだ。」

「ゆっくりディアを見れる時間が出来て嬉しいと仰ってましたよ。」

「……………」

確かにダリアを見るディアを抱きあげて寝台に連れて行くこともあった……いや……ほぼ、そうだ。ダリアを見ているディアを見ると、どうも我慢できない自覚はある。ナイトの言葉にグッと言葉を飲み込んだ。

「少しディアの様子を見てくる。」

「駄目です、もう来賓はお揃いですし、陛下が行かなくては始まりません。」

「チツ。」

今日の舞踏祭は帝宮の中の大広間で行われる。年に一回の皇帝主催の舞踏祭には国中から主だった爵位を持つ者が集まって挨拶をする。爵位の無い者は立ち入ることすらできないが、これが国にとって、どれほど重要かも分かっている。しかし話題に出るアレに今から頭が痛い。

「…言い訳は？」

「ありませんね。今まで断つといて、いきなり側妃に兵士の妹を娶ったんです。もう言い訳のしようがありませんね。いっそのことディア様をご立后させればよいのでは？」

「駄目だ。皇后は表に出ねばならん。」

「それがキツカケになるかもしれませんが。」

「…過去に踏ん切りをつけるのは、そんなに簡単なことじゃないし、それは他人が与えるものでもない。」

「…確かにそうですね。」

「とにかく、舞踏祭を乗り切ることだけ考える。終わったら、すぐにディアの所へ行く。」

カーンカーン

ガイヤの鐘と呼ばれる壮大な黄金が音を奏でる。皇族が入る時に、それは響きわたり全員が深く膝まづく合図でもある。不思議なことに皇族の血を見分け、かつてに鳴り響くのだ。従者が声たかだかに言葉をはなつ。

「皇帝陛下、ご着席に御座います。」

この大広間は帝宮にあるが、ダリア宮や執務用の宮、城門からも繋がっており、皇太子のときはダリア宮からの大扉が入っていた。今日、来ている多くの者は城門を通り大広間の大門をくぐってきているだろう。

全員が頭を下げていることを確認すると、その中を歩き一段上に設けられた玉座に座る

「面を上げよ。今年一年のみなのお働きを労う場である、存分に楽しんでくれ。」

響き渡るように告げた言葉に楽師たちの音楽が始まる。みな立ち上がり、笑顔を浮かべ雑談に入った。これからが大変だ、と覚悟を決めて手渡されたワインに口付けた。

少し経つと、代わる代わる貴族たちが挨拶にまわってきた。さつきから皇妃のことや側妃のことを、それとなく進言してくるのを何とかかわしていた。

「陛下、ご機嫌麗しく。」

「……ボルデオ公爵。」

「お元気そうだなによりです、陛下。」

「そちらも健勝そうです。」

「もう年よりです、早く心配事をなくして隠居したいものですぞ。」

五十を超えた年の公爵は、その地位にあり昔から俺の教育係でもあった。ネイトの前は宰相として父に仕えていた、なかなか頭のキリる怖いやつだ。昔の影響か、俺はコイツが苦手だった。上手く言いくるめられそうになるからだ。

「陛下、お早く皇妃様をお決めください。」

「……お前まで、そんなことを言うのか。」

「妃が側妃だけとは、いささか心もとないですぞ。」

「焦る必要はないだろう。俺はまだ二十五だ。」

「お父上が二十五のときには陛下はもう産まれておりました。」

「あの人は子供が早く大きくなって譲位し放浪したかったからだろ
う。」

「それも一理ありますね。」

くどい。そしてえげつない。昔からコイツの攻撃は苦手だった。
悪意があれば強く言い返せるが、コイツは帝国のためにしているた
め、なかなか邪険に扱うことが出来ないのだ。

「へ、陛下!?!」

走り寄り公爵の横に土下座する勢いで頭を下げてくる男は門兵の
ような服装をしていた。

「これ、門兵ごときが陛下の御前に侍り、直答など許されんぞ!」

「いいい、急ぎ伝えなければいけないことが御座います!」

こいつの登場により何事かと、ざわつき始めた大広間。

「…直答を許す。何があった。」

「はははっ…！アイリス帝国皇帝ロー克蘭ド陛下が舞踏祭への参加を要求して来ておられます！」

ザワッ

「アイリスの皇帝が何故…？」

「向こうもガイヤと交流が持ちたいのだろうか。」
「まあ！ロー克蘭ド陛下といえば皇后様はまだおりませんのよね？」

様々な言葉に心臓が凍りついていく。

「まことか…？」

「間違いなく！お供にヴィスタル公爵もお連れに御座います！」

門兵の驚きようを見れば嘘でないことは分かる。しかし…なぜアイリスの皇帝が自ら事前の連絡もなしにガイヤへ来ている…！まさかディアのことが露見したのか？いや、情報は完璧に操作した。そんなわけではない…。

「…了承しろ。丁重にご案内するように。近衛に護衛を引き継げ。」
「かしこまりました！」

走るように飛び出していった背中を見送り、目配せをみると、すぐにキリヤが近寄ってきた。

「ディアの宮周りを警護しろ、誰も入れるな。」

キリヤだけに聞こえるように言うと言黙って頷き、踵を返した。しかし、その一步を踏み出す前に、ガイヤの鐘が鳴り響いた。皇族の血にのみ反応する鐘が壮大な音を奏でたのだ。

カーンカーン
ギィィィ

「っ」

開いたのは帝宮の大扉でもなければ城門からでもない。ダリア宮へ続く大扉が、ゆっくりと開いたのだ。

「あれは側妃か？」
「なぜ…？」

「こんなときに！」

「爵位を持つのか？」

「おい！あれはアイリス王家の正装じゃないか！」

「今からアイリスの皇帝が来るといふのに何と罰当たりな！」

オーロラの髪が今夜はシャンデリアの光で金に煌めいている。繊細で細やかな編みこみをされ結び上げられた髪には今朝、一番綺麗に咲いていたと手折ったブルーのダリアが刺さっている。いつもめんどくさい、と言っている化粧もしっかり施され美しい絵画のように顔立ちを引き立たせる。

淡い水色のドレスはアイリスの国風に合ったようなスツキリとした作りをしていたが逆にディアの細い身体の線を浮き彫りにしていた。そして何より特異であるのは腰にかけられた美しい装飾のほどこされた剣だった。

「ちょっと貴方！何しに来たのよ！！！」

「…サスキーア。」

「ガイヤの鐘まで鳴らして何様なの？！いくら寵姫だからって許されないわよ！」

俺の座る玉座からダリア宮からの大扉は遠い。サスキーアの言葉に急いで立ち上がるうとした俺をナイトが引きとめた

「何故、止める。」

「ここで出ては陛下のご評判にも影響いたしますので。」

「もうすぐアイリスの皇帝が来るんだぞ。」

無理やり座らされた俺はネイトを睨みつける。会わせちゃいけない、と身体中が叫んでる。しかし多くの目があるここではディアを擁護することは出来なかった。

「今日は爵位を持つ者とその家族しか入れないのよ！貴方のような下等な者は入れないのよ！」

「……確かに。私は爵位を持ちません。」

「ならば、出て行きなさい！！！」

怒り狂うサスキーアを、ひどく冷たいディアの瞳が捕えた。静かにディアは口を開く。

「そう……私は爵位を持たない。でもね、サスキーア……私は国を持つよ。」

シン、と大広間から…ここに居る全員から言葉を奪う。それほど威厳のある声色だった。ダリアの庭園でディアが出自を明かした時のような…そうだ。アイリス帝国第一皇女クレイディアの声だった。皇族として産まれた正当なる皇女。これが本来の彼女なのだろう。

「な、なにを…！」

カーンカーン

再びガイアの鐘が皇族の血を見つける。

それは…アイリス帝国皇帝ロー克蘭ド

「そこまでにしてもらおうかな、ご令嬢。」

ひどく甘く、穏やかな声だった。ディアと同じ琥珀の瞳と琥珀の髪。その風貌も優しげな笑みを浮かべ、光を携えているようだった。

「私の妹に、これ以上の暴言は許さないよ。」

ゆっくり、ゆっくりと皇帝はディアへと近づく。そして、ディアを眩しそうに見ると彼女の額にキスを一つ落とし、そっと抱きしめた。

「心配したよ、クレイディア。」

「申し訳ありません、お兄様。」

ディアの腕が兄へ伸ばされ、ひどく安心したような表情を見せた。その瞬間、言いようのない感情が身体中を支配した。

「みなさま、頭が高こう御座います。こちらに、おわしますのはアイリス帝国皇帝ロークランド陛下ならびに妹君であるクレイディア皇女様に御座います。」

近くに居た高位であるう男が、そう告げると固まっていた者たちがいっせいに膝まづいた。

「ガイヤのみなさんを混乱させに来たのではない、ただ妹を迎えに来ただけだと思って休まれてください。」

そう皇帝が告げると、チラチラと周りを見ながら再び立ち上がった。

「クレイディア様、どうぞ私にアイリスの剣をお授け下さい。」

近くに居た近衛が二人の前に跪き、恭しくディアへ手を伸ばしている。

アイリスの剣

アイリスの皇族が一5歳の成人の儀にて己の紋章の描かれた剣を与えられる。その剣は、紋章の持ち主の名の元に不敬や不正を働いた者への処刑に使われる。一国の王を殺そうと審議などによって裁かれることがない。その紋章の主の名のもとに。何にも侵攻不可な絶対的権力を持つ。その剣によって消えた命は見向きもされることなく不名誉をかぶることになるのだ。強大なアイリス帝国だからこそ作れた権威ある剣だった。

そして今、その剣はディアへ不敬を働いたサスキーアの命を断とうとしているのだ。

「いいえ、必要ありません。」

「クレイディア、渡しなさい。でなければ私のアイリスの剣を渡さう。」

「いいえ、兄上。出自を偽っていた私にも非はあります……しかし、サスキーア。そなたの言動は人の上に立ち模範となるべき侯爵令嬢としてあるまじきこと。まさに愚の骨頂であり恥ずべきことである。これより、悔い改め二度と同じ過ちを犯さぬよう。次は、このアイリスの剣が、そなたの血で汚れること。ゆめゆめ忘れることのないように。」

「っ申し訳ありません！」

金切り声で地面に頭がつくほどの勢いで謝ったサスキーアにもう皇帝は興味が失せたのか、その視線を俺に向けてきた。距離があるといつて勘違いしているわけではない。確かに、その視線を感じた。

「クレイディア、ガイアの皇帝殿を紹介してくれるかい？」

「もちろんです。」

細いディアの腰に手をあて、こちらへ優雅に歩いてくる二人にガイアの貴族たちは道をあけアイリスの近衛は、その後続いた。いつの間にかガイアの近衛が俺の周りを守るように立って物々しい対峙となった。

「…このようになつて申し訳ない。」

それを見たアイリスの皇帝は苦渋の表情を浮かべ、あっさりと謝

罪を述べた。出鼻をくじかれたように力が抜ける。大きく息を吸い目の前の皇族を見据える。

「いや、構わない。別席を用意しましょう。ナイト、用意を。」

「かしこまりました。」

「ガイヤ皇帝、私はこの度、クレイディアを保護してくださった貴方に心から感謝しています。ガイヤとの仲は限られ封鎖的なものでそれを危惧していました。貴方の…ガイヤ帝国の寛大さは褒め称えるに値するものです。」

「何か訳があり帝国を逃れねばならなかった皇女殿を保護したのは偶然ではあったが当然のこと。」

「これから両国間の絆は確固たるものになるでしょう。」

「そうなればいいです。」

差し出された手に自分のそれを重ね握手を交わすと周りが歓喜に溢れかえった。

「両皇帝・皇女様に万歳！」

「両国の絆に万歳！」

アイリスの皇帝が言ったとおり封鎖的で限定的だったアイリスとの絆はガイヤを…アイリスをも大きくするものだろう。それを成し遂げたのは俺でもなければアイリスの皇帝でもない。皇帝の腕の中にいるディアだ。

再会

別席に案内された私たちは豪勢なソファーに座らされて、対峙するようにキースが一人で着席した。その後ろにはネイトやキリヤ、参謀である少数の貴族たちが立っていた。もちろん私たちの後ろにも母の兄でもある伯父ヴィスタル公爵や顔見知りの重鎮たちが立っている。

物々しい雰囲気の中、お兄様だけは穏やかな表情を浮かべ私の身を気にかけている。

「ガイヤ皇帝、我々アイリスは、そちらの要求に全て答えます。それほどクレイディアの存在はアイリスにとって必要不可欠。どうぞ、お望みを仰ってください。」

「いえ、必要ありませんよ。先ほども言った通り当然のことでしたので。」

「兄として…皇帝として何かしなければ気が済みません…。ああ…ガイヤ皇帝、こちらでクレイディアは側妃という立場にあったと聞いています。それはいささか不意であり、あまりに浅はか…今後のクレイディアの身の振りも制限されましよう。そこをもう少し深く注意してほしかったです。」

「それは申し訳ない、皇女の出自を隠し、それでいて皇女として充分にお持て成し出来る方法は、それしかないと思ひまして。」

「お兄様、私が頼んだのです。出自を明かしたくないと。」

「…クレイディア、君にも後で処罰を与えるよ。君のしたことは一歩間違えれば国際問題にも発展することだ。例え君が私の妹でも罰を与えねばならない。」

「もちろんです、いかようにも、お兄様のお好きなように罰をお与えください。」

「…君が聡明で助かるよ。でもね、クレイディア…本当に心配したんだ。」

「すみません……。」

隣に座る兄様の気遣わしげな瞳にグツと胸が熱くなる。いつも優しくかった兄様。母である皇后様と私の間で板挟みになりながらも、つねに守ってくれた兄様。どうしても、私は乱すことしかできないのだろうか。

「アイリス皇帝、クレイディア皇女は事情があり亡命してきたと聞き及んでおります。内容は伺っても？」

「いえ、内情のことなのでご容赦願います。」

さらりとキースの言葉をかわした兄様が穏やかに笑顔を浮かべ、ヴィスタル公爵に目をやると、公爵は一つ頷き細長い木箱を出した。

「お詫びにもなりません、お受け取りください。」

丁寧な動作で音さえたはずローテーブルに置かれた。キースが、そつとそれを開けるとハツとした表情を浮かべ兄様を見つめた。私も遅れて、それを見ると同じように兄様を見つめ、ゆっくりと腰にささる剣に視線を移した。

「アイリス皇帝……これは……。」

「私の紋章が入ったアイリスの剣です。」

「これは受け取れません。」

「いえ、受け取って頂きます。」

兄様の紋章の入った剣はアイリスはもちろん他国でも影響力がある。この剣を使いガイヤ側がいくらか人を殺そうが、そのすべての責任を紋章の主でもあり、アイリスの皇帝である兄様が持つことになるのだ。

「先ほども言った通りクレイディアは私にとって唯一の妹であり、アイリスにとって唯一の皇女です。この子を救ってくれたという価値は、こんな剣では表しようがありません。」

「兄様……。」

兄様がこれだけする価値が自分にあるのだろうか。きっと兄様は、この後のことも考えて剣を渡したのだろう。アイリスの剣を渡すほど、私を救ってくれたキースに感謝している。それほど私は重要であるということ。ひいては私という皇女の立場も確実に上がる。

「貿易や商業においてもです。どうぞ、お好きに条約をお付け下さい。交渉は必要ありません。このヴィスタルが万事、整わせます。」

「ガイヤ皇帝キース陛下、恐れながら直答をお許してください。クレイディア皇女様は私の亡き妹クラリス妃の一人娘に御座います。私の姪でもある皇女様をお助け下さいましたこと、ロークランド陛下と同様、言葉のしようがないほど感謝申し上げます。微力ではございますがヴィスタル公爵家の名にかけて実現させますので、どうぞ遠慮なさらず、お望みを仰ってくださいませよう。」

「……かような評価に言葉を返すようだが、私とて人。クレイディア皇女を助けたというが、私はすでに多くを与えられてきた。そのようなことは不要です。」

兄様、伯父上、キースが、それぞれ言葉を紡いでも私には現実味がない。十分に理解しているつもりだった。皇女である自分がガイヤやアイリスに与える影響を。でも…それを遥かに超えた今の現状に啞然とするほかなかった。

なんと…愚かだったのだろうか。

「与えられてきた…とは？」

兄様が少し眉を寄せた。ハツとしてキースに視線を送る。どうか…何も言わないで、と伝わるよう。目があったキースが一瞬、目じりを下げ困った表情をした。

「そのままですよ、私は皇女が来るまで花を愛で、会話をしながら食事をするということから遠ざかっていた。他愛もないことですが…私はとても救われました。」

違うよ、キース。与えてくれたのは、いつだってキースだったのに。ダリアも言葉も想いも愛も何もかも。私は受け取ってばかりだった。

「そうですね、確かにクレイディアには不思議と周りを癒す力があるようで、兄である私も救われてきました。」

その言葉に幾分か穏やかになった雰囲気に胸を撫で下ろした。それはキースも同じだったようで少し笑顔をのぞかせた。

「そういえば、アイリス皇帝は来月、ご結婚されるようで。」

「ああ…皇太后の母国でもあるマリアールの王女とです。」

「え？兄様、結婚されるんですか？」

「ああ、クレイディア皇女には知らせるのを忘れていたようで、失礼。」

キースの言葉に笑顔を返す。きっと気遣ってアイリスのことを話さなかったんだろう。そんなこと容易に想像できる。

「母上たつての希望でね。私としてはマリアールにこれ以上、大きい顔をされては困るので皇后に立后させるつもりはありませんがね。」

「確かに、皇太后に皇妃の両方がマリアールでは他国と同様という扱いは出来ませんね。」

「もつとも皇太后である母には政治に口を出さないように言っていますし、大臣たちの謁見にも介入してしますので下手なことは起こさせませんが。」

「随分と母親にも手厳しいですね。」

「ははは、こうでもしないと帝国を乗っ取られそうなのですよ。クレイディアのように母も聡明であればいいのですが。」

「もう、兄様もキース陛下も政治の話ばかりして……兄様の結婚の話をしていただけなのに。」

「ああ、そうだったね。これ以上、話すと国家機密さえポロポロ零れてしまいそうだ。」

「どうですか、舞踏祭に顔を出されては。うちの貴族たちも浮足立っていますし。」

「…そうですね、そうします。クレイディア、昔のように一緒に踊るうか。」

「はい、兄様。」

「陛下…。」

立ち上がるうとした私たちに伯父が声をかけると、ああ…と思い出したように兄様が私を見た。

「ヴィスタルと約束していたんだよ、少しの間…話させてほしいと。」

「それでは、我々は一足先に行きましょうか。」

「そうですね。」

キースが兄様を促して舞踏祭の会場に向かう。残った従者たちを人払いして、ゆっくりと伯父が私の前に膝をつき手を握られた。

「心配したよ、クレイディア…っ」

「…ごめんなさいっ！伯父様っ」

ギュッと抱きしめられた。母の兄でもあった伯父様は、母が召し上げられると同時に昇格し侯爵から公爵となった。元々、才覚ある人だったので国政でもそれを遺憾なく発揮し重鎮の一人に名を連ねることになった。それは…全て側妃とし立場の危うい母を想ったことであり、伯父の立場が上がり才気を発揮すればするほど母の立場は強固なものとなり、娘である私の立場も安泰となったのだ。今まで私たち親子のために、がむしゃらに走ってきた伯父上は、一人の妻も持たず政務に明け暮れてきたのだ。

そんな人に挨拶もせず、母の死も告げずアイリスを去ってしまった事を何度、悔んだか分からない。

「何があっただんない？クラリスが自害だなんて…！お前まで亡命して…。」

「…母の自害は公表されたんですか？」

「いや、陛下の配慮により病死として処理されたよ……。」

「…そ、うですか……。」

「クラリスは…本当に自害なのか……っ？」

「…はい。」

「そうか…陛下も多くは語られなかったんだ。私の知らないところで何かあったのではないかと後悔だけが残ったよ。」

「いいえ、いいえっ！伯父様は充分すぎるほどに私たちに尽くして下さいました！」

「…お前まで私の前から居なくなるなんて…尋常じゃないだろう？何があつたんだい？」

「伯父様…私は大丈夫です。ともにアイリスに戻りましょう。ロイとバルトとは途中ではぐれてしまったということにして頂けますか？」

「………ああ。」

納得しきれしていない伯父様に笑いかけ二人で大広間に向かった。黄金の鐘が鳴る。扉が開けば皇帝二人をのぞいて全員が膝まずき頭くつぺを垂れていた。見慣れた光景に、とくに緊張することもなく、その声は大広間に不思議なほど響き渡る。

「叩頭に感謝します。先ほど紹介にあつたよう、私はアイリス帝国皇女クレイディア・シュゼール・ダリア・アイリスです。盗賊団に襲われ私はガイヤへ亡命しました。盗賊団が捕まらなければ安住は望めないという我が皇帝ローランド陛下のお沙汰にてガイヤに留まることとなりました。アイリスの皇帝はガイヤの寛大さを褒め称えています。キース陛下のご聡明であられることにも救われてまい

りました。そして、ついに盗賊団が捕まったと母国から連絡があり、皇帝陛下御自ら迎えにきてくれたのです。」

ザワッ

「静まれよ。」

伯父様が、厳しい声を出すと再び大広間に静寂が戻る

「私はこの恩を……アイリス帝国が、この恩を忘れることは恒久的にないでしょう。そして両国の絆もまた恒久的なものとなるよう共に尽力しましょう。」

ワッと歓喜の声上がる。それを冷静に見つめながら、一つの視線に気づき見やるとリアンが毅然とした瞳を携え、こちらを見ていた。あまりに真っ直ぐな、その瞳から逃げるように視線をずらした私を責めるような瞳。裏切ったとも思っているのだろうか。私は元よりアイリスの皇族。逃げて逃げて、必死に逃げてでもそれは変わらない事実だったのに。

祈るように手を合わせ、そっと天を仰ぐ。豪華なシャンデリアの光が幾千の星々にも劣らぬ光をはなっていた。

背に重なる月

舞踏祭は盛大だった。多くの貴族が集まり、華やかさを競うようなドレスや装飾品。どこの国も根本は変わらない。と溜息を一つ吐き、そつとバルコニーに出た。

兄様は、さつきからガイヤ側の重鎮方と貿易のことで話しこんでいる。あれほど兄様が言ったにも拘わらずキースは優劣をつけない外交を望む、とはつきり告げガイヤの重鎮は惜しそうに顔を歪めていた。私的にはそんなこと明日にでも話せばいいことだと呆れている。キースはキースでナイトやキリヤと兄様や私の警護のことで話し合いをして。可哀想なことに、さつきからダンスを踊りたいと瞳を輝かせてるお嬢様たちに当の二人は気にも留めず会話を弾ませていた。

「ディア。」

「……、……皇帝陛下。」

「……驚いた。」

「それはそうです御座います。大陸二帝国の皇帝が揃う舞踏祭など今代、稀に見るものです。ガイヤの威厳を見せしめる良い機会になりました。」

「…そんなことが言いたいんじゃない。」

いつの間にか、バルコニーに来ていたキースは後ろの護衛を外させ、ゆっくりと歩み寄ってくる。伸ばされた腕に捕まえられる前に、さりげなくそれを避け深く一礼した。

「御迷惑、御心配おかけいたしました。おかげさまをもちまして…問題は解決しアイリスへ帰国することとなりましたこと遅れながら御報告させていただきます。」

「本当に問題は解決したのか？」

「はい。」

「では何故、俺を見ない。」

顎に手を添えられ、上を向かされる。穏やかに光る蒼瞳は、するどく痛いものだった。吐息が届きそうなほど近い距離に胸の鼓動が跳ねあがる。

「…私はクレイディアです。アイリス帝国の皇女。例えガイヤ皇帝とて、気軽に触れていい者ではありません、御容赦ください。」

「…俺は、もう迷わない。お前を皇后にする。」

「…なに、を…っ…言っておられ、るので…すか？」

「お前の出自が露見した今、ガイヤの皇妃に相応しく……何より俺が愛しいと思うお前を皇妃にするのは当然のことだと思っが？」

「無理……です。そんなの……っ」

「俺はガイヤの皇帝だ。」

「……っ兄様が絶対に許しません……!!」

「やってみなければ、分からん。」

「いえ！分かります！そんなことを言えば兄様は……アイリスとガイヤの和平はきつと壊れてしまいます！」

「……何故そう言える、問題は解決していないからか？ ……何故、お前は……兄が来て安心しながら……怯えている？」

「っ……怯えてなどいません。ロークランド兄上は、とても優しい兄上です。」

「そうだな、先帝に負けるとも劣らない。」

「当然です。父が……先帝は幼いころより兄様に全てを教え次代の皇帝として自ら教育なさっていたのですから。」

そうだ。兄様はアイリスの最高位である皇帝。全てを握り、その責任を日々負って政務に明け暮れている。何よりもアイリスを安寧へと導く尤も尊い人。尤も、聡明な人。

「クレイディア。」

「……兄様。」

私とキースの間の雰囲気を感じ取ったのか、穏やかな笑顔を浮かべ、そっと手を差し伸べられる。それに己の手を重ね促されるように歩みを進める。

「踊ろうか。」

「…はい。」

「それではガイヤ皇帝、クレイディアをお返しいただきます。」

「…アイリス皇帝、貴方は欲しいものを何でも与えて下さると言いましたね。」

「もちろんです。クレイディアの価値に値するものは何もないですから。」

「では……。」

やめて、と叫ぶのを抑えぎゅつと耳を塞ぐ。風が強くなる。一瞬、その全てが機能を失ったように制止して、大広間の喧騒も遠くのおとぎ話のよう。

「クレイディア皇女を私の妻に。」

塞いだ耳に、甘ささえ含んだキースの声が届く。消えてしまえばいい、と本気で思った。こんなにも乱すことしかできない私を…キースも兄様も。ガイヤとアイリスも。

「それは出来かねますね。」

「正式に申し出をすることにします。」

「どんな手順を踏もうと返答は同じですよ。」

「何故ですか？」

「国に居る姫を他国に嫁がせるのは、その国に力がない証。我がアイリス帝国はクレイディアを嫁がせねばならないほど弱小ではありませんから。」

「帝国同士の外交や繋がりには要りません。何も持たなくてもいい。クレイディア皇女を妻にしたいんです。」

この言葉を何も知らないときに聞けば嬉しくて四の五の言わず頷

いて、その大きな手を取っていただろう。

「…まあ、その話しは明日にでもしましょう。クレイディア、行く。」

「…はい。」

私が取るのは兄様の手以外ありえない。私と兄様が手と取り合い大広間に戻ると、かすかにザワめきが広がる。音楽がやみ、私たちはダンスホールの中央に行く。そっと兄様に一礼し身体が近付く。

優美な音楽に揺れ動く私の心は暗く。重かった。この絵画のような煌びやかな世界が遠くて。でも確かに私はここに居るんだ。

いつか自分は嫁ぐと思っていたし。母にも、その覚悟をするように、と何度も言われてきた。でも父や兄は自分たちが皇帝である限り、私を政治利用しないと豪語していたし、本当にそうしてくれていた。

愛されている。深く、それは深く。

軽やかな兄様のリードに合わせて。私は浮揚することしかできないけど。この身が帝国に必要とされているのならばアイリスから離れない。

「いつ以来だろうね、一緒に踊るのは。」

「兄様が即位なさる前です。」

「そうか…そんな前だったね。」

きゅつと唇を横に伸ばして瞳を細めて笑う兄様が、昔からひどく好きだった。いつだって兄様は私を守ってくれる王子様だったから。

「クレイディア、まさかとは思うけど…ガイヤの皇帝と閨を共にしたなんてこと無いよね？」

その言葉に私は笑顔で首を振る。言葉にすれば嘆いてしまいそうで。キースを愛している、と叫び泣いてしまいそうで。

「……早くアイリスに帰りたい。」

「そうだね、3日以内には済ませよう。」

「……はい。」

私を強いと言ったキースに今ならハッキリと言える。私は強くない。ただ見栄と虚像を必死に張り付け逃げ回っているだけの哀れ

で醜い女。でも、きっとキースは…そんな私でさえ受け入れてくれるんだろっね。

* * *

舞踏祭は大成功のうちに幕を閉じた。キースは多くの来賓の貴族を労い見送っている。私と兄様は、それぞれ案内される部屋に行き、湯殿や着替えを済ませ就寝の準備をした。

といっても私はダリアの宮を与えてもらい、いつもとくに変わりはしなかった。兄様は、どうやら帝宮の一室を与えられたらしく、次に会うのは明日の朝食になるという話だった。

「クレイディア様は我がアイリス帝国の皇女様。我々が護衛に付く。」

「いえ、ここはガイヤ城。ガイヤに従ってもらおう。」

「ロークランド陛下の勅令なるぞ！」

「こちらとてキース陛下よりの御威命である！」

騒がしい部屋の外に溜息を1つ落とし、ドアを開ける。なんとなく両国の者たちに見覚えのある者が何名かいて安心した。アイリス側の近衛に声をかけることにした。

「ギルド、何の騒ぎですか。」

「申し訳ございません、皇女様の護衛について揉めております。」

「この宮におらずとも、この城には両陛下がおられるのです、安易に揉め事など起こしてはなりません。次に騒ぎを起こせば、両国の護衛を拒絶します。いいですね?」

「……は。」

「私の護衛は両国から均等に輩出せよ。」

「かしこまりました。」

「私はもう寝ます、よろしく頼みますね。」

「」「」
「ははっ」「」

一斉に跪いた近衛に笑顔を残し部屋に戻る。侍女たちを退出させ

るとき、あ、と思い出してシュリを引きとめる。

「こんな夜に引きとめて、ごめんなさい。」

「いいえ、かまいません。」

座って、というと遠慮がちにソファアに座る。私が近くにあったティーセットで紅茶の準備をしながら始めると焦ったように声を上げた。私は困ったように、やらせて、と頼むと…しぶしぶではあるが許可があり。心配そうなシュリを横目に淡々と紅茶を淹れた。懐かしい茶葉の湯あがる匂い。沸騰させたお湯も。全てが懐かしかった。

濁りの深い味が好きな私は、少し長く蒸し紅茶をカップに注ぐ。蒼白のカップとソーサーはシュリが私に似合うのではないかと言って購入してくれたものだった。

「ありがとう、シュリ。短い間だったし、こうして話すこともなかったけど感謝してます。」

「いいえ、当然のことですので。」

「ううん、知ってたの。本当は、サスキーアたちと鉢合わせしないように自然と進路や時間を変えてくれたことも、濁りの深い紅茶が好きな私に合わせてくれたり…あ、温度とか。それにキースのこと…きつと一番気遣ってくれたのはシュリだよ。」

「…そんな私は……。」

「こんなのが感謝のお返しにもならないって分かってるけど受け取って。」

「こ、れは……。」

「私の紋章が描かれた櫛。」

「こんな！恐れ多くて貰えません！！」

「いいの、きつと帰国すれば自分の身の回りのモノを一新されると思うし、持って帰ってもきつと処分するだけなの。」

「でも……！！」

「お願い、貰って。」

ジツと私を見つめた後、ゆっくりとお辞儀すると、ありがとございませと少し赤みがかった頬で笑った。私も、それに返し……そつとダリアを見つめた。

「やはりアイリスにお帰りになられるのですね。」

「うん、母国だからね。」

「でも…ここにはキース陛下が…ロイ殿とバルト殿がおられるではありませんか……。」

「ロイとバルトは残るよ。それから、二人の名前はもう二度と口にしないで。一応、二人は亡命したんだから下手すれば拘束されて強制送還されるかもしれないから。」

「…は、はい！」

「ごめんなさい、変なことに巻き込んで。こればかりは私じゃ、どうにもならないの。兄様は誰にでも公平。例え血の繋がった私の願いだろうと法を破れば、それなりの処罰を与える。それが…皇帝である兄様の皇帝としての役割だから。」

いいえ、と首をふるシユリが何か言いたげに悩んだあげく、遠慮がちにその口を開いた。

「…そこまで皇帝としての責務や立場を御理解しているディア様…いえ…クレイディア様ならば良い皇妃様になられます…どうぞ、もう一度この帝国に戻ってきてくださいませんか？それに…お二人は、それはそれは…愛し合っておいででしたので。」

「…私はキース陛下と閨を共にしたことも愛を囁き合ったこともない。」

「…消す…おつもりですか…？」

記憶を…想いを。そう続きそうな言葉を遮る。

「消すも何も、全ては虚像。」

「…ディア様……。」

「何も言わないで、これは両国の外交にも関わり、陛下の首を絞めることになる。絶対に。」

「……それでも……！」

これが私。逃げ回る滑稽な女だ。

「私は皇女として生まれ、いつかアイリスに骨を埋める覚悟さえあった。でも…それが叶わないと知ったとき全てを兄様に預けることを決めたの……でも…結局は逃げて、今に至ってしまった。」

「ディア様……。」

「ねえ…弱いとか強いとか…私にはよく分からない。その境界線は脆いよね、細くて見えない。だから私は、ただジツとその時を待つの。愛した帝国と愛した人が幸せになるようにと願いながら。」

「貴方様の御身に何があったかは分かりません…しかし、それは貴方の愛する方々の望みなのでしょうか。貴方が幸せになってほしいと願うように、貴方の愛する人たちは貴方の幸せを願っているのではないのですか？」

「……そうか、もね。」

「ならば……。」

「でもね、私にも皇女としての矜持がある。それが今は何より大切だと思つたの。それしか……私には残つてなかつたの。」

自分の幸せを願う前に、自分が不幸にした人の顔がちらつく。夜な夜な頭に過るのは罪。優しい私の周りの人たちは明確な罰を下してはくれない。罪に値する罰を渴望する私には……選択肢なんてない。

「長話をしちやつた……ごめんね、もう休んで。」

「……かしこまりました。」

こうして逃げることで必死に自分の中の何かを守る。捨ててしまえばいいことも捨てれず。ただ雁字搦めな世界に足をすくわれることを望んで。でも、その先で救われることを夢見る私は……やっぱり滑稽だ。

「お休みなさいませ。」

「お休み、シユリ。話せてよかつた。」

「私もです……それでは失礼いたします。」

静かになった室内に静寂が戻って。窓の外の月が何かを呟くように私を誘い、そっと庭園に出た。控えていた近衛が慌てて近づいてくるのを手で制し、人払いをする。頬や髪をくすぐる風に少し気分が落ち着いた。どうして、シュリにあんなことまで喋ってしまったんだろう。どこかリンに似た、全く違う他人なのに。

雨が降るのは、この世界に住む人の悲しみを背負い哀れんで振っているのよ、だから雨が上がったら皆…笑顔になるでしょ？

おとぎ話のように聞かせてくれた母の笑顔が過る。本当にそうだとしたら、雨が降ってほしい。この想いを背負い変わりに涙を流し、晴れて。そして…笑顔に戻して。

「、……っ。」

ああ…私…まだ泣けたんだ。

「ディア。」

キースは強い。そして、優しい。威厳さえも与える月のよう。その光で、輝ければいいのに。

「喧嘩売ってるのか？…お前…一体なにがしたい。」

「…何のことでしょう。」

言葉はひどく濁って、予想外な涙と彼の登場に必死に動揺を隠す。

「何で泣いてる。」

「いいえ、泣いてません。」

ただ星を見上げてるだけ。

「ディア、愛してる。結婚しよう。」

熱い熱い目頭を、キースの肩越しに夜風に当てて冷そうとする私に気付いて、ゆるく解かれた腕の中では許されなくなって。美しく

光を感じる瞳が、私をうつした。ツンとする鼻に触れる唇が、頬、額、瞼、耳、こめかみに落ち続けて。何かの儀式のように私は、ただそれを受け入れ、彼の後ろに広がる星空を見つめた。

「誰にも渡さない。」

やっと、辿り着いた唇が触れる瞬間、私は瞳を閉じなかった。…違う、閉じれなかった。想いを込めようと私に口付けるキースの瞳が顔が髪が…全てが愛しく美しかったから。

闇の強者

キースの言葉に喜ぶ暇もなく、ただ茫然と、その腕の中で涙が流れるのを感じる。

「何があった。いつアイリスの人間と接触した。お前はこの宮から出ていないはずだ。」

「……………」

「ディア、言え。」

真摯な瞳に抱きしめられた腕の中から、必死に逃れようと身体を擦る。嫌だ、と言葉が漏れた瞬間。闇の中から伸びた腕に抱きこまれるように自由になった。啞然として状況を把握できていないと、闇の中から声が聞こえた。

「お下がりください、ガイヤ皇帝陛下。」

その声にハツとして叫ぶ前に嗅ぎ慣れない薬品の匂いがして意識を失った。

* * * * *

「ディア！」

身体力がなくなり重力に従い、地面へと落ちて行くディアを抱きかかえようと手を伸ばしたが、それを払われ、そいつはそのままディアを抱きかかえた。

闇に紛れていた、男の姿が月光によって目の前に現れる。壮大な雰囲気を持つ男は俺を見ても眉一つ動かさず礼儀を取ることもなく、ディアを闇に差し出す。そこから闇を切り開くように出てきた腕に渡し、俺を振り返った。

「御安心下さい、我々は暗部。アイリス皇帝陛下に従う者。クレイディア様を部屋へお運びするだけです。」

「……お前たちがディアと接触したのか。」

「それではガイヤ皇帝陛下、お帰り願います。」

一切、俺の質問に答える気がないのか、軽く一礼し闇に入ろうとするヤツを呼びとめる。

「お前たち、アイリスの皇帝からの指示でココに居るのか。」

「我々は現皇帝陛下に従う者。しかし…先代シユリウス陛下の命も未だ継続中ですので。独断で警護させて頂いております。」

暗部というには淀みのない言葉を使う。服装が違えば貴族とも取れるような物腰がカンに障る。

「一つ申す事があるとすれば、貴方様がクレイディア様を望めば望むほど、クレイディア様の首を絞めることになるということです。」

「なに……?」

当然ではないでしょうか、と微かに笑みまで浮かべる男は、それなのに哀愁に満ちている気もした。

「アイリスへ帰国するという確約をなさったとき、クレイディア様が提示してきた条件がありました。一つはロイとバルトのガイヤ移住の黙認。二つは…ガイヤ帝国との恒久的な和平交渉。それを破ることが出来るのは実質、貴方だけです。どうされますか？クレイディア様の願いを貴方の願いで消し去りますか？」

「……なぜディアは国を捨てなければならなかった？涙を笑顔で隠すほど、アイリスを愛しているアイツが。」

「…クレイディア様が貴方に何も仰っていないということは必要なということでしょう。クレイディア様の願いを叶えられるのも皇帝という地位を持つ貴方様のみ。何を選ばれるかは…貴方次第です。」

「……クレイディアの願い　。」

誰にも傷ついて欲しくない、と嘆いたディア

帝国という家を失い身分も名も捨てたディア

母親との思い出を泣きそうな顔で語るディア

まるで全てを諦めたように笑うディア

「…それでも俺はディアへの想いを断ち切ることもアイツ自身を諦めることもしない。」

「それが貴方の答えならば。」

「お前たちは何とも思わないのか、奥歯をかみ締めて、悲痛な思いが溢れるのを必死に耐えるアイツを見てて……救い出したいとは思わないのか。俺がお前らだったら……アイツの身に起こったことや起こることを知っていたら……絶対に泣かせない、あんな顔させない。」

「貴方は何も知らない。」

その言葉を残し再び闇に紛れた男。静寂の戻ったダリアの庭園。ダリアまでもが物寂しく咲いて、たった一人を待ちわびているようだった。救い出したいなんて傲慢だ。そうじゃない、ただ傍に居てほしいと思う。コロコロと変わる、その表情を楽しみながらダリアを見て、年を取って。そんな、ありきたりな幸せをアイツと望むから。

あいつらは知ってる。ディアの過去を……そして、これから起こり得ることを。俺は知らないのに。ドロドロに溢れそうになる烈火のごとき嫉妬に胸がやかれ、息がつまる。

「俺は……何も知らない……。」

それでも、諦めることはしない。ディアのことが分からないのであれば、調べればいい。以前は、その口から紡がれるのを待っていたが、そんなことも言ってもらえない。

「ダルクス。」

「は。」

「アイリスへ行け、内部に侵入しクレイディア皇女の…全てを調べろ。全てだ。」

「かしこまりました。」

「それと辺境に滞在しているロイとバルトに早馬を。」

「御意。」

「行け。」

曲がりなりにも俺も皇帝だ。アイリスと対抗出来得る力を持つがイヤ帝国の。

「暗部があるのはアイリスだけではない。」

* * * * *

動き出していく

運命として決定されていると分かりながらも、自分で選んだ道だと頑なに言葉を紡いで。

「お目覚めのお時間に御座います。」

無機質な声。ふ、と思考が明瞭になっていき昨晚のことを思い出した。

「ディア、愛してる。結婚しよう。」

迷いも淀みもなく発せられた言葉。突き上げるような熱が胸の中に広がる。あんな感覚、きつと二度ないだろう。星空と月を背負うキースは、あまりにも綺麗で。縋りつくのは、あまりにも簡単だよ。

「クレイディア様、本日はロークランド陛下との朝食の後、遊園会をダリア宮にて開催しますので、それに御出席を。午後はヴィスタル公爵と会談後、ガイヤ皇帝陛下の晩餐会へロークランド陛下と共にご招待されております。」

「分かりました、着替えを。」

「かしこまりました。」

シユリは担当を外されたのであろう。目の前に居る侍女はアイリス独特の侍女服を着ていた。私の着るドレスもアイリス特有のものに変わっており、アイリスの剣を腰にさげ部屋を出た。

高質な絨毯の上を歩いていると、多くの貴族や使用人や騎士たちが一様に頭を下げ膝をついている。蔑むように見られていた昨日までの生活とは大きく様変わりしていた。

クレイディア、いいかい。頭を下げられるということは、その者の首を預かっているということなんだ。分かるかい？だからクレイディア、お前は生きること執着しなければいけないんだよ。

何も知らない小さな自分に言い聞かせるように囁いた父。どうして、みんなは頭を下げるの？と無知な私が問いかけた言葉に父は悲しそうに笑ったのを、今でも鮮明に覚えている。私は忘れない。皇族に産まれたからには折れることなく、立ち続けるといふことの大切さを。生きることには継り、執着するのが皇女である私の務め。

「クレイディア様。」

「……はい。」

侍女の開いた扉。すでにイスに座りグラスを傾けている兄様。私は笑顔を浮かべ、その対面に腰を下ろした。おはよう、と穏やかな声の兄様に同じように返す。

「昨日は、よく眠れましたか？」

「ああ、おかげさまでね。でも、いつもと違う寝室というのは少し寂しい気もした。」

「そうですね、予定通り三日でガイヤを出れそうですか？」

「もちろん、今日はクレイディア救済の褒賞について、明日は外交について、明後日は和平条約の改定。そして改定後、すぐにガイヤを出す手はずだよ。」

「……アイリスを出て…もう一年近い時間が過ぎました。」

「…そうだね、民もクレイディアを心待ちにしているよ。」

「はい…。」

「アイリスに帰国次第、クレイディアに皇女宣下しなければいけないね。」

「また…あの儀式をすと思うと今から憂鬱です…。」

「ははは、確かに。あの神官の言葉はお経のようで眠くなるだけだね。」

穏やかな朝の陽ざしが兄様の琥珀色の髪が色を変えていく。プラチナのような色を持つ私とは全く違う兄二人。それに昔は少し疎外感を持っていたこともあった。でも三人の瞳の色は二人の髪色のような琥珀で。ひどく安心した。

長男であり王太子だったローランド兄上は常に私の見方で居てくれた。さびしいと思った時は声をかけ、どこに私が隠れ逃げても見つけてくれたのを覚えている。ただ王太子としての勉強が忙しく会うのも簡単ではなかったけど。

次男のイーサンは年が近いせいもあってか友人のような関係だった。王太子であるローランド兄上とは違い比較的自由に育てられたため私と会う時間もおり一緒に遊んだ思い出も多い。ローランド兄上とは正反対な男らしい顔つきや物腰で小さいころは、よくケンカもした。

「イーサンは元気ですか？」

「ああ…もちろん。元気すぎるぐらいだよ。」

「イーサンに会えるのも楽しみです。」

「そうだね、それじゃ…急かすようだけど私は仕事をしてくるよ。」

「はい、いつてらっしゃい。」

「また昼に。」

「はい。」

額に落とされた親愛のキスを受け入れる。落ち着いたアイリスの侍女たちが居るのは確かに気が楽だったが、なんだか物寂しい感じがある。

「ねえ。」

「何で御座いませう。」

「アイリスのダリアの花は元気？」

「もちろんです、ロークラント陛下が絶対に枯らすことのないように、とキツク言い聞かせておりました。」

「そう…良かった。」

変わらない、アイリスの城。変わったのは、私の心で。今まで通り、皇女としての責任を果たすことが出来るだろうか。

* * *

「アイリス帝国第一皇女クレイディア様、お成りに御座います。」

見慣れた美しいダリアの庭園には、いたるところにガーデンチェアが置かれ日傘やら何やら揃い、華々しい情景だった。一様に頭を下げる侍女や令嬢たちの間をすり抜け一際、豪勢な主賓席に座る。

「叩頭ありがとう。私の名にもダリアがあるようにダリアは私の大好きな花なの。それをみんなと愛でれることを嬉しく思います。楽しんで楽しんで下さい。」

その言葉共に顔を上げ、それぞれが席についたり花を見たりと時間が動き出した。いやに感じる視線は好奇で満ちており、すぐに疲れがたまる。

次々と挨拶にまわってくる令嬢へ笑顔を返し、時折、他愛ない会話をしながらも言葉の端々に思惑や策略と呼ぶには軽薄な願望が織り交ぜられている。そんな時間が数刻続いた時、庭園がザワついた。

何事かと思えば、昨日のようにダリアの庭園を歩くキースが目に入った。私に真っ直ぐと向かってくるキースに動悸が激しくなる。なるべく自然に笑顔を作り、少し視線を俯かせた。

「クレイディア皇女。」

「ご機嫌麗しく、キース陛下。」

「座つても?」

「もちろんです。」

私の後ろで控えていた侍女が大慌てで紅茶やお菓子を用意すると、簡単にお礼を言い少し距離を置かせた。周りの令嬢もキースの登場で浮足立っているのかチラチラと遠巻きに視線を感じる。

「何か御用でも?」

「ああ、報告だ。」

「報告……ですか？」

「……ロイとバルトに早馬を出した。」

「そう……ですか。」

「驚かないな。」

「……………」

「想定内か。確かに辺境に行ったロイとバルトが急いで帰ってきても、そのころにディアはもう国境を超えた後だろうからな。」

「二人を連れ戻して、どうなさるおつもりですか？」

「お前の従者だろ？」

「いいえ、彼らが従うはガイヤ帝国。すなわちキース陛下です。私は一切関係ありません。」

「血の契約をしているのか？」

「帰国次第、その契約も解除します。」

「そうか、了承した。ならばアイツらには俺の代わりにアイリスとの交渉に使わせてもらおう。」

「…！」

「俺の従者だろう？アイリスとの交渉に元アイリス国民が居るのは助かる。良い橋わたしになるだろう。」

「……ロークランド陛下が知れば一人は脱国者とし裁かれます。」

「それでもアイツらは俺の命令に従うだろう。」

当たり前だ。キースは分かっている。帰ってきた二人がキースの命令なくともアイリスへ行くという事は。もちろん、そうさせないために手は打っているがガイヤ帝国皇帝の名代という大義名分には敵うはずもない。

「それを止めてくださいと、言えば叶えてくださいますか。」

「もちろん、お前次第だ。」

「…何をお望みでしょう。」

「お前が皇后になると確約するのであれば。」

「…その話しは…すでにロークランド陛下が沙汰を下しておりますので、私にはどうしようもありません。」

「ロークランド陛下はディアに甘いな。一日見ただけで分かる。お前が頼みこめば何とかなるんじゃないのか？」

「いいえ、ロークランド陛下は私を政治利用なさりませんので。お聞き入れ下さることはないでしょう。」

会話が止まりキースの蒼瞳が私を見つめた。その瞬間、周りの雑音が消え去って世界がモノクロに染まった。まるでスローモーシヨンのようにキースの唇が動いて、それだけが耳に残る。

「事実があれば、どうだ？」

何の、と問いかける前に唇が触れた。音の無かった世界に周りの息を飲むのが分かった。

「クレイディア・シュゼールⅡダリア・アイリス皇女。貴方を私の妻へ… ひいてはこの帝国の皇妃に望む。」

通ずる道

事実があれば、どうだ？と口早にディアの唇を塞いだ。毎日、それはクセと言ってもいいほど重ねた唇が震えていた。目を閉じることもせずにディアは呆然と俺を見つめ、どんどん青褪めていった。

「クレイディア・シユゼール」ダリア・アイリス皇女。貴方を私の妻へ…
ひいてはこの帝国の皇妃に望む。」

大勢の媚びる貴族令嬢や噂好きの侍女たちの前でディアの唇を塞いだ。ザワつく周りが騒ぎたてるとディアは顔を真っ青にして小刻みに震えだした。それを見て、少し申し訳ないと思いつつ…こうするしか対抗手段はなかった。見て見ぬふりしか出来なかった。

アイリス側の侍女が急いでディアを部屋へ下がらせ、それから一切、外と連絡を切った。ディア周りの護衛も全てがアイリス側に変わり、遠目で見張らせていた者の話では侍女が何度かアイリス皇帝の元へ報告に向かったらしい。

その後すぐ、俺に謁見の申し込みがきた。客間でアイリス皇帝とディアの伯父であるヴィスタル公爵が憤激した表情を隠すことなく座り、俺が入ったときも立ち上がり礼を取ることはなかった。

「ご聡明と聞いていたが勘違いだったようだ。あまりに軽薄なそち

らの愚行のせいでクレイディアが、どれほどの被害を受けるか皇帝である貴方なら分かっているはずだ。」

怒りを抑えることもしないアイリス皇帝に微かな笑みを浮かべ切り返す。

「もちろん、分かっています。ですから彼女を私の妻へと望んでいるのです。周りの口煩い者たちが好きな話しへ切り替えることも出来ましょう。国を追われた皇女を救い守った皇帝。二人の間には愛が産まれた。そして、そんな二人の愛が帝国同士を結ぶ強固な絆となる。まるでお伽噺のようだ。」

「安易な考えですね。」

「しかし、それしか道は残っていません。もし、このまま他国にクレイディア皇女が嫁げば彼女の身の純潔は疑われましょう。ましてやガイヤ帝国皇帝のお手つきともなれば簡単に求婚も出来ない。」

「その通り。分かっているなら、あまりにも幼稚だと思えますが。」

「愛ゆえの行為と思って、お許しください。もしこのままクレイディア皇女がアイリスへ帰れば、貴方はのらりくらりと婚約の話しを先延ばしにするでしょう。確約なくして帰すことなどしたくなくかつたんですよ。」

「一方通行な恋が相手に与える不幸を貴方は知るべきだ。」

「ははは、一方通行ですか。」

「クレイディアは貴方と浮ついたことなどしていないと、言っていました。私はその言葉を信じます。いえ、クレイディアの言葉を真実にしてみます。」

どうして、と思った。ディアを愛しているのは分かった。先帝の頃よりディアへ降るようにあつた求婚を全て断っていたのは父親の愛情だろうし、現帝もそれを受け継いでいる。

しかしディアは、もう十七歳。皇族や王族にしてみれば少し遅れているとも取れる年齢だ。それに王国ならいざ知らず、帝国の申し出を断るほど、なぜディアに固執するんだ。

どうして。こんなにも頑なにディアの結婚を阻む必要がある？

「クレイディア皇女が一度アイリスへ帰らなければならぬということとは理解しています。理由はどおあれ亡命したのですから、皇女として再び立つのは当然のこと。どうでしょう、婚儀の準備も兼ねて帰国するというのは。」

「貴方の望み通りに、ということですか。」

「奇しくも、そうなたただけですよ。」

「冗談を。まあ、クレイディアに対しての罰も考えています。異性を近づかせるとは妙齡な皇女としても、あまりに不用意。付けこまれたと被害者ぶることは許されませんし。」

そのアイリス皇帝の言葉にヴィスタル公爵が、かすかに眉を寄せた。気付きにくい仕草だったが、それを見てクレイディアに重い罰が下ることはないだろうと安堵する。

「貴方は何故クレイディアに執着するんですか？皇族に生まれた彼女は自分が、いつか帝国のために結婚するということは理解してるはずだ。」

「執着です、か……そう思われても仕方ないですね。私の母親に虐げられてきた唯一の妹です。父帝は立場上クレイディアやクラリスの一方を擁護することが難しかったです。それに二人は健気にも父帝にそれを悟られないように笑って過ごしていたのを記憶しています。」

「…そうですか。」

「皇帝となり権力を得た自分が母親を断罪することが一番にするべきことだと幼い頃より決めていました。それに…クレイディアたちが父の最期に立ち会えなかったのを今でも不憫に思います。あの時、父は…最後の最期に二人のことを頼むと、残していきました。」

まるで罪人が罪を自供するような重い音が旋律を奏で言葉を紡いでいる。

「クラリスのことも私の落ち度だと思っています。唯一の母を失い帝国を去らねばならなかった妹を救うことが出来なかったのも私が

至らない故でしょう。だから私はクレイディアの願いを叶えます。アイリスに帰りたいという彼女の願いを。これより一縷の不安も彼女に与えるつもりはない。」

「では…彼女が私との婚約を願えば、貴方は受け入れるのですか？」

「もちろんです、クレイディアが貴方を望むのであれば。」

「それを聞いて安心しました。」

「クレイディアも同じ気持ちだと？」

「クレイディア皇女にお聞きください。」

「…まあ、今日のところはこれまでですね。明日にでも賠償を請求させていただきます。」

「好きなだけ、どうぞ。」

「…最後に一つだけ。比喻でもなく今回のこと、もし父帝が生きていたらガイヤは滅亡していましたよ。」

「では…私も最後に一つだけ。私はクレイディア皇女を心から愛しています。ただ妻にしたいだけ。そのオマケに皇妃という地位が在るだけです。」

答えることもせず席を立つと振り返らず出て行った。

俺のすぐ後ろで終始心配そうに見ていたナイトに小さく笑い返し、

座るように促した。ネイトは侍女に紅茶を淹れなおさせると部屋を出るように言い二人きりになった。

「陛下にしては焦りましたね。」

「まあな…アイリスに放った暗部もいつ帰ってくるか不明。事情を知るロイとバルトも早くて4日後だ。これで焦らずにいられるか。」

「クレイディア皇女様のこと…どう読みますか？」

「ディアは一貫して盗賊団と言っているが…皇帝は皇太后を匂わせた。見解は互いに別れているのが気になるな。」

確かに盗賊団はクレイディアにとって危険だろう。それを皇太后が手引きしたとなると脅威は増す。しかし亡命する必要があるのか？ 見てる限りディアと叔父であるヴィスタル公爵の絆は本物だ。皇帝からの信頼は厚いと分かる。母親を断罪するほど公平な皇帝には安心して相談することも出来るだろう。もし出来なくても公爵の地位にあり、あれだけ敏腕な腕を持っているなら皇帝に気づかれることなく隠すことも出来るはずだ。

どうして、そんな叔父にさえ頼れず国を出たのか。

「母親は自害…その理由がディアの亡命の理由だろう。それが分かれば手は打てる。」

「では本当にクレイディア様を皇妃へ？」

「何度も言わせるな。これはこの帝国の決定と思い尽力せよ。」

「かしこまりました、私の全てを懸けまして陛下のお望みのままに。」

「俺はクレイディアの所へ行ってくる。」

「…無理ですよ、アイリスの護衛に突き帰されるのがオチです。」

「ははは、これでもガイアの皇帝なのにな？」

ナイトの言葉に笑い客間を出る。自室に戻ると、その壁にあるダリアの花の絵画を横へズラす。そこには一つのボタンが存在し、それを押すと音も立てず…ゆっくりと壁が動いた。多くの制約を強いられる皇帝。子供と会う時間の少なさ、護衛の監視の目を厭わしく思う、かなり前の皇帝が作ったとされる地下通路。元来、子供たちの宮として建てられたダリアの宮へ通じ、愚かにも同時に後宮の一つの部屋にも通じている。

後者は身分を慮る^{おもんはか}好奇の瞳に左右されず一番愛しい妃の元へ行くように作られたらしい。多くの妃が乱れる後宮においては平等さが必要になる。誰か一人を寵愛すれば、その寵姫は周りからの風当たりが強くなる。もちろん身分を伴っておらず、後ろ盾が小さい場合は特にそうだ。

まあ…俺には必要ないだろうが。

小さいころ、よくここを通過して父が来てくれた。そして俺も逆に会いに行った。

ふと、思い出した記憶の中の父は破天荒で、それでも愛情に満ちている。今頃、どこをほつき歩いているのか何年か前に東方の国へ行くとだけ残し行ってしまった。あの放浪グセに母や前宰相は大いに悩まされていただろう。

「もう、休むから…外してちょうだい。」

「かしこまりました。」

ダリア宮。ディアの住む居住居の中の寝室、少し疲弊した声が聞こえ、侍女が退出する音が次いで聞こえた。この扉は寝室にあるベッドの横にある。そっと、それを開きソファ―に身体を預けたディアを発見した。背中しか見えない。俺に気付いてないのか、微動だにせず瞳を閉じているようだった。

優しい琥珀色の瞳が、たまらなく好きなのに。濁ったように俺を見る様は目も向けられないものだった。

苦しんでいると分かってる。俺と兄の間に挟まれ…歯がゆい思いをしているのはディアだ。分かっていて彼女を望んだのは自分。彼女の瞳を濁らせたのも自分だ。

「……………ディア。」

「っ」

その小さな身体が大きく揺れる。ゆっくりと恐る恐る振り向いたディアは瞠目したが、すぐに力を抜き小さく笑った。

「もう、驚きもしないよ。」

「そうか。」

こんな風に敬語が抜けて、くだけたような笑顔を向けられたのが久しぶりな気がした。でも実際は二日前までは当然のことだった。

「人前でいきなりキスされるとは思わなかったよ。」

「悪いな、俺なんてアイリスの皇帝が来ることを知らされてなかったんだ。」

「兄様が来るのは私も舞踏祭の直前に知らされたの。私だってかなり驚いたんだよ。」

鈴を鳴らしたように笑い、そっと立ち上がると俺に座るように促す。それに従って腰を下ろすとディアは紅茶を淹れ始めた。いい香りが部屋を包んで俺も力を抜いた。

久しぶりに休める、と思いつつの動作も見逃さないようにディアを見つめる。

「そんなに見ても紅茶は美味しくないよ。」

「そうか。」

「……ごめんなさい。キースには言うべきだと思ったんだけどロイとバルトを連れ戻されても困るから言えなかったの。兄様と会わせたくはなくて、罰を与えられると思うし。兄様にはロイとバルトとはハグれて連絡取れないって言ってしまったから。」

「それは、もういい。」

「……うん。」

「いつアイリスの暗部と接触した。」

「……ロイとバルトに休暇を取らせてほしいってお願いした夜。一人でダリアを見に外に出たでしょ？」

* * * * *

「ディア、起きたのか？」

「うん、ちょっと庭に出てくるね。」

「すぐ戻れよ。」

「はあい。」

「ちょ、なんか羽織ってけ。」

「…はあい。」

上着を羽織った私を見て、もぞもぞとシーツにくるまったキース。月は爛々と輝き暗闇に光をさす。暖かい白い光がダリアを照らした

「アイリス帝国第一皇女クレイディア・シュゼール・ダリア」アイリス様。」

「っ」

暗闇からの声に後ずさる。聞くことのなかった称と真名が響く。

「私は暗部の者です。貴方様に危害を加えは致しません。」

「……」

アイリスの基盤を築いたと言ってもいいほど、現代でも崇拜されている初代皇帝アイギル陛下の作ったといわれている暗部。その存在は、帝国にも軍にも皇族にも支配されないもの。皇帝のみの私兵といってもいい彼らは少数部隊なれど、一国に値するほどの力を持つとも言われていた。

私は父から聞いていたため、その存在を知ってはいたが…ほとんどの帝国民は伝説としてしか認識していない。その姿は決して外には出ず明るみになることはない。

「はい、現皇帝であり貴方様の兄上であらせられるロークランド皇帝陛下の命にて参りました。」

「！……兄上が…ここに居ることを知っているの？」

「御意にございます。」

そして彼はプロテアの花が咲いた紋章を付けていた。王者の風格という花言葉に相応しい兄上ロークランド皇帝の個人紋章。私と同じようにピアスに刻まれたプロテアの花が懐かしい。

「ど、っ…」

「あの火災の後すぐに内々に搜索を命じられました。」

「最初から…知ってた…?」

「はい、あれは侍女のリンだと。」

「……っ……」

「まさかガイヤ帝国の皇帝の側妃として城に居るとは思いませんでした。皇帝陛下も安心なさっておいでです。皇女らしい生活をしていると。」

「…私に何か用があるのですか?」

「皇帝陛下よりの御文に御座います。」

恭しく跪いた男に手渡された高質な紙。かすかについたダリアの香が、優しくかった兄上を思い出させる。

* * * * *

クレイディアへ

君が失踪してから随分と経つ。
兄様はとても寂しい。
早く帰ってきておくれ。

クレイディアにとって義母である皇太后も現皇帝の僕に意見することは出来ないし、皇太后としての権限は無に等しく離宮に移り住んでもらった。だから身の安全も保障出来る。

それにクレイディアの母上の墓地にも手を合わせてあげなさい。もし…もし無事にクレイディアが帰ってこれないことがあれば長年、続いてきたガイヤとの和平も崩れる。こちらには皇女誘拐の大義名分がある。国民はガイヤに怒り兵たちの士気も上がるだろう。

良い返事を待っているよ。

兄様より

* * * * *

「…皇太后さまが離宮に移られたって…」

どういふこと、と彼を見つめると一つ頷いた。

「ロークランド陛下は皇女様に与えられた数々の仕打ちを非公式の場では御座いますが皇太后さまに言及し権限の剥奪ならびに離宮の移動を命じられました。」

「そ、んな……。」

「陛下は皇女様のご帰国を心待ちにしております。もちろん皇弟イーサン殿下も同様に。」

「でも…。」

「私共は離れることなく貴方様を監視申し上げておりますので逃げるなど考えませんように。」

そんなこと出来るはずない。今ここで拒絶すればガイヤとの和平決裂だけじゃ済まされない。もっと帝国を揺るがすことが起きてしまっ。

「……安心なさい、逃げも隠れもしません。」

「宜しゅうございしました。それでもお返事を明日のこの時間に聞きに参りますので。」

こういつときこそ自分を律しなければいけない。前を向かなければいけない。消えてなくなった男の気配に一つ溜息をして月を見上げる。

翌日。

同じ時間帯に再びダリアの庭園に出た。

かすかに感じる違和感。

「そこに居るのですね。」

「はい。」

「暗部は最低でも五名で行動すると聞きました。みな顔を見せなさい。」

「は。」

あらわれた5人は一様に跪き王族への礼を一糸乱れぬ動きで取る。

「貴方が…ボールね、それにギン、リクト、シキ、リクルス。」

「何故…私共の名を……。」

「先帝より聞いていました。長年の間…多くの危機から父を守ってくれて、ありがとう。母も貴方たちにはとても感謝していました。母の分も礼を言います。」

「いえ……。」

「…クレイディア様！申し訳ありません！姫様の未来がどのようなものか知っているのに、このような仕打ちをしてしまって。」

一番若い男性が苦渋に顔をゆがませ口早に告げる。私は微笑んで首を振った。謝るのは筋違いだ。

運命から逃げたのは私。ロイとバルトに頼ったのは私。捻じ曲げてしまった運命を戻すのも私の役目。

「それが貴方たちの仕事なのでしょう？ 迷いは捨てなさい。」

「しかし…っ…先帝は…貴方様のお父上様からの最期の命令は…クラリス様と姫様を守れとのことでした！ しかし…現皇帝の命令にも逆らうことは出来ず…っ」

「ありがとうございます。」

「え？」

「先帝である父に代わり貴方たちを解放します。今日より現皇帝に限りない忠誠を。」

父の愛情に触れるのは久しぶりだった。思い出の中の父の笑顔が甦る。優しいお父様。美しいお母様。私は幸せだった。黙りこくる五人にもう一度告げる。

「現皇帝に限りない忠誠を。」

「「「「忠誠を」「」」」」

その姿に一つ微笑みを落とし。そつと願いを紡ぐ。

「…命令ではないの。今から言うことは命令ではない。」

「…はい。」

「来月…この城で夜会が開催されます。それに合わせてロイとバルトを城から地方へ行かせます。貴方たちにはそれを見過ごしてもらいたい。」

「姫様…。」

「お願いなの、ただのお願いだから。」

「御意にございます。その願い…必ずお叶え致します。」

「…ありがとうございます。それとアイリス皇族の正装と…アイリスの剣を持ってきて。」

「姫様の願い、必ずやお叶え致します。」

そつと姿を消した五人に視線をダリアへうつす。美しい花。囲ま

れて育った花は多くの人たちが与えられた愛情を思い出させる。

回顧 - 1 - (前書き)

な、ながい…！

「キースと過ごした日々は…本当に……夢みたいだった。本当に幸せだったよ。」

* * * * *

それが最期の言葉だった。三日間の滞在中に全て滞りなく用事はすんでいた。引き延ばそうとしても賢帝の前では無意味な抵抗であり、ディア自身も帰ることを渴望しているように見えた。あの優しい琥珀色の瞳も、もう俺を見ることはなく意味のない笑顔だけを振りまかれた。

俺と離れることを何とも思っていないんだろう。こんなにも胸が引きちぎられる俺の痛みの、ほんの欠片でも感じてはいないんだろうか。

「それでは、ガイヤ皇帝。妹がお世話になりました。」

「キース陛下、どうぞお元気で。」

まるで、もう会わないと言外に告げるディアに抱きしめたい衝動を抑える。2人を守るとくに立っている近衛は俺を警戒するように、ひどく近くで立っている。あの時のことが裏目に出るとは……。ディアが馬車に乗り込むのを手伝うように手を握り合う二人。

神々しいと言えるほどの人外な二人

「ディア、必ず、また。」

「……………はい。」

戸惑いがちに兄を見上げた後、俺を見ると微かに微笑んで頷いた。絶対にこのままじゃ終わらせない。アイリスを象徴する白の馬車がガイアの王城から出て行くのを見つめ虚無感に苛まれた。

* * * * *

「陛下、お耳に挟みたいことが…」

「聞こう。クレイディア、悪いね。馬車を止めるね、私は仕事用の

馬車に乗るよ。」

遠慮がちに外から響いた言葉を受け入れ、少し眉を下げる兄様に大丈夫ですよ、と微笑み背をそつと押す。

「仕事をしている兄様が居たら気を遣っちゃいます」

「おやおや、厳しいことを言ってくれるね。」

「ふふふ、頑張ってくださいね。」

「ああ、食事は一緒に取れるようにするよ。」

「はい。」

ゆつくりと止まった馬車から兄様が名残惜しげに出て行くと1人きりの車内の音が消える。熱いナニカが頬を伝って、かすかに身体が震えた。どうして、伝えたい想いの一部さえ言葉にすることが出来ないの？

頑なに守ってきた心の最奥。誰にも吐露することない想いが存在するそこは私にとって何にも代えがたい全てがあるところだった。ロイにもバルトにも誰にも、そこを晒すことはなかった。晒したいとも思わなかった。

なのに、ここうしてそこが痛む。

言えたら楽になれると、キースに背負わせることを望んでしまったのだろうか。そうなら、私はとても弱く醜い。いつのまにこんなに弱くなったのだろうか。永遠も幸せも信じてなんかいなかった。全てを諦めてガイヤに来たのに。ガイヤに来て永遠を信じ幸せを感じたなんて、とても皮肉だと思った。

「……、… つ」

嗚咽が漏れた。すぐ後に力が抜けるように身体が傾いた。次いで頭痛がする。

「っ」

グラリ、と身体が傾いて狭い馬車の中で壁に向かって倒れた。

「皇女様…っ?」

馬車を囲んでいた衛兵の焦った声にも返すことが出来ず、ただ揺れる頭の痛みに耐える。

「失礼いたしますっ！」

「皇女様！！！」

「誰か！皇女様がお倒れだ！」

「医師を呼べ！！！」

* * * * *

「…グスタル、クレイディアの容態は？」

「…疲労ですな、それにひどく馬車に酔っていらっしやる。」

「そうか。これからは、ゆっくり進もう。」

「それがよろしいかと。」

アイリスの紋章が描かれた真つ白な天幕。その中で不釣り合いなほど豪華なベッドに寝かせられた。周りには心配そうに表情を歪める兄様と伯父様が私を覗きこんでいた。老齢の医師は何度も昔会ったことのあるグスタルだった。

私の出産にも立ち会い母からとりあげてくれたのも、この老医だったらしい。

「処方を始めます、お外でお待ちください。」

「分かった。頼んだぞ。クレイディア、ゆっくりお休み。」

「はい、兄様。ごめんなさい。」

そつと私の頬に触れた兄様は笑顔を残し伯父とともに天幕を出た。残ったグスタルは静かに静かに口を開く。

「クレイディア様、ご無事で何よりです。」

「ありがとうございます、貴方と会うのも随分と久しぶりですね。」

「そおですなあ、おてんばのクレイディア様の治療を何度やらされたことか。」

「っ！もう……」

「ははは、冗談です。」

「嫌味ったらしい……！」

「……………」
クレイディア様

紡がれた言葉に対する返答はしない。

「グスタル、お願いがあるの。」

*
*
*
*
*
*

ガイヤ皇城

重厚な家具が立ち並ぶ皇帝の執務室。そのイスに座り書類に目を通しているとウルサイぐらいの足音が耳に入った。分かり切った訪問者に書類を置き、ゆっくりと見据える。

バンツ！

「どづいつことですか?!」
「ディアはどこへ行った!」

大きな音をたてて開かれたドアからロイとバルトが入ってくる。相当、急いできたのだろう服装や髪形がひどくあれていた。それに気を使うこともせず2人は俺の目の前まで来ると憤慨した表情で見下ろしてくる。

「早馬で知らせたとおりだ。アイリスの暗部がディアと連絡を取ったらしい。舞踏祭に皇帝自らディアを迎えに来て、2日前ガイヤを出立した。」

「そんな……!」
「くそっ」

「話せ。真実を。今すぐだ。」

苛立ちが隠しきれない。アイリスに放った暗部からも色良い返事がない今。実質、俺が事実を知るためにはコイツらが口を割るほかない。時間がないと、焦っている二人。悪いことがディアを待っているんだ、と確信する。

どうして。逃げ出して、嘆いて。助けを乞えばいい。

そうすれば俺は迷うことなく、この国の軍を動かすディア一人を守るのに。そうして救われることを嫌うディアに。俺は構わず、そうするだろう。

「お前たちに何が出来る。地位を持たずアイリス帝国の亡命者として扱われているお前たちに。」

「っ」

「アイリス皇帝と同じ権力を持つ俺になら出来ることはある。手遅れになる前に話せ。」

「でも…ディア様が仰らなかつたことを……」

ひどく傷つけ、傷をえぐる言葉を選んで吐き捨てる。それは俺だつて同じで。事情を知る二人が口を紡ぐのを、もう黙って見ていることなんて出来ない。

「アイツが俺に言つと思うか？俺を愛しているアイツが。俺を巻き込むようなことすると思うか。」

「……！」

睨みつけるように2人見る。明らかに生気の宿らない瞳の2人は目配せして重い口を開いた。

「クレイディア様は…とても愛されておりました。クラリス様、シユリウス陛下、ロークランド兄上、イーサン兄上、ヴィスタル公爵、

リン……全ての人から。」

思い出すように、ゆっくりと言葉を紡ぐロイの表情には懐かしさと焦燥の色が浮かんでいて。俺は覚悟を決める。頑なにディアが口を噤んだ事実を知ることへの覚悟。

* * * * *

「妊娠したの……」

女は、そう告げ俯いた。その表情は悲しそうに影を作り、男はゆっくりと細い背を撫でた。

「クラリスは嬉しくないのか？」

「嬉しいわっ！もちろん、嬉しい…！でも…男の子だったら、きつと皇妃様はお怒りになられるわ。私は何をされてもいいの。でも子供に何かあつたら…！皇位継承に巻き込まれるかもしれないわ…！」

「子供を皇位に就けたくはないのか？」

「そんなの要らないわ！幸せになつてくれれば、それでいいの！」

「そうだね、私たちが幸せにしてやろう。もし男の子だったら皇位継承権を放棄させて自由に育てればいい。女の子なら、幸せに思い人の元へ嫁がせてやろう。」

「…はい。きつと、きつと…！」

そう願ひ産まれたのは珠のように美しい女の子だった。二人は安堵と溢れる愛情で女の子にキスを落としたりした。

赤ん坊はクレイディアと名付けられ、庭園に咲くダリアが一層、強く香り、色鮮やかに咲いていたことから個人紋章と名にもダリアが刻まれ彼女の名前はクレイディア・シュゼールⅡダリア・アイリスと正式に名付けられ公表された。

アイリス帝国皇帝シュリウス陛下、唯一の皇女の誕生に帝国中が湧き歓喜の声を上げる。クレイディアは皇族にしては珍しく両親の愛を一身に受け育つた子供は常に笑顔で周りを明るくさせる子に育つた。

「ロークランド、イーサン。おいで。」

「クラリス妃、産後まもなくの訪問をお許し下さい。」
「俺らの妹は?!」

八歳になる第一皇子、四歳になる第二王子は父帝に伴われクラリスの部屋を訪れていた。年の割に落ちついているロークランドと年相応のイーサンに穏やかにほほ笑み、そつと腕の中で眠るクレイディアを差し出した。

「うわぁ…! 凄く可愛いですね…!」

大人の中に居るせいか大人びているロークランドは珍しく子供の表情を覗かせ、小さな妹を見つめた。それは頼りないが確かに生きているクレイディアを見つけた歓喜からだった。

「触ってもいいですか…?」

「もちろんよ、抱いてみる?」

「いいんですか…?!」

「ええ、首をしっかりと支えてあげてね」

「はいっ!」

クラリスから受け取った赤ん坊を抱き上げると、何ともいえない感情がロークランドに湧き上がった。小さいのに呼吸をし、その瞳をパチパチと開閉させている。

「あーあーあー」

クレイディアは小さい手でロークランドの頬をぺちぺちと叩いて遊ぶと花のような笑顔を浮かべた。ロークランドは、はしたないと知りながらもクラリスの寝台の上へあがり、そこへクレイディアを寝かせた。イーサンもそれに続き、寝転がるクレイディアを覗いて二人は産まれたばかりの赤ん坊の小さな手を握った。

「ちっちゃいな！」

「イーサン、そんな強く握ったらクレイディアが痛がるだろっ」

「うわあーん！」

「ほら、泣いちゃったじゃないか…！」

「俺そんな強く握ってねーよ！」

すぐさま抱きあげようとしたクラリスより先にロークランドが上手に赤ん坊をあやしたのを見て、シユリウスとクラリスは声をたてて笑った。クレイディアは優しい兄の温もりを感じたのか、そのまま眠りについた。

「いいか、ロークランド、イーサン。お前たちは兄になったんだ。兄は妹も守らなきゃいけないんだよ。だからクレイディアをしつかりと守ってあげておくれ。」

「はいつ！僕きつとクレイディアを守るよ！」

「俺だってー！たくさん遊んであげるぞ！」

「クレイディアを、よろしくね」

名残惜しい表情を隠しもしない二人は就寝のギリギリの時間までクレイディアの相手をしていたが迎えに来た侍女に連れられて部屋を出て行った。

それからロークランドは勉学の合間に、イーサンはほぼずっとクラリスの部屋を訪れクレイディアを可愛がっていた。父であるシュリウスよりも兄二人に懐いているクレイディアを見てシュリウスは肩を落としたのだった。

* * * * *

「ロークランド、勉強はどうですか？」

「問題ないですよ、母上」

「イーサン、貴方もロークランドを見習って勉強なさい。剣にはかりうつつを抜かしてはいけません」

「はいはい、やりますよ」

「イーサン!!」

適当に応えるイーサンに兄は小さく笑ったが母である皇妃は気付くことなく下の弟を諫めるように大声を上げた。後宮の中、クラリスたちとは正反対の場所に位置する皇妃の部屋。

それに面した庭園はダリアではなくロークランドの個人紋章プロテアとイーサンの個人紋章である月見草が咲き、他にも鮮やかな花が咲き乱れている。そこで親子水入らずとは言い難い雰囲気では紅茶を飲んでいた。

「いいですか、イーサン。貴方は…」

長い説教が始まる、と眉を寄せた2人に鈴のような声が届いた。

「ろーくりゃんとにいしゃまーいーしゃんにいしゃまー!」

先日、三つになったばかりの可愛い妹が走ってきていた。舌つ足らずな言葉に自然に頬が緩み、啞然としている母をよそに立ちあがり、たどたどしい足の妹を迎えるために膝をつき手を広げる。

一瞬、どちらに行こうと悩んだ素振りをしたが、すぐに早さを取り戻し飛びつくようにロークランドに抱きついた。

「イーちゃんにいしゃまは…くれいでいあにいじわつすつから、め
っ
っ」

「ははは、だってよ。イーサンはいじめっ子だからね。」

「うそっけ！この前、絵本読んであげただろ?!」

「イーちゃんにいさま…とちゅうれねちやつちゃ!」

「うっ!」

「お前が寝てどうするんだよ、クレイディアを寝かせるために読んでやったんだろ?」

クレイディアを抱きしめたまま立ち上がったロークランドは、いまだに固まっている母親に向き直ると丁寧に一礼して言葉を並べると背を向けてダリアの庭園に向かった歩きだした。

それにイーサンも続くと、後ろから母親の金切り声が響く。

「待ちなさい!皇妃の私に挨拶一つもしないなんて、失礼よ!」

「母上、クレイディアはまだ三歳ですよ。」

「だからって許されることじゃないわ！」

「…ごえんなしゃい……」

大きな声に驚いたのか瞳いっぱい涙を溜めたクレイディアが声を揺らした。それを見てロークランドは自然に眉が寄り睨むように母親を見て不機嫌をあらわにする。

「母上、クレイディアの無礼は私が詫びます。どうぞ幼いクレイディアをお許してください。」

十一歳になっていたロークランドは皇太子に相應しい威厳を持って母親をも飲み込むと有無を言わず、その場から去って行った。泣き始めたクレイディアを慰め、大丈夫だよ、と微笑めば不安げに揺れる瞳がやっと笑顔に形作られる。

「くれいでいあ、ちゃんと…あいしゃつできつようになつ！」

「そうだね、僕が教えてあげる」

「うんっ！」

ロークランドとイーサンは唯一の妹を、ことのほか可愛がり母親の違う兄妹にしては仲睦まじく周囲の不安をもつもしなかった。

そんなロークランドに己の行動がクレイディアに、どのような影響を及ぼすかを身に染みて理解させる出来ことが起こった。

「ロークランド、どちらへ行くのですか？」

回廊を歩いていくと、後ろから声をかけられ振り返ると美しい出で立ちの母親がいた。その後ろに多くの侍女が付き添い、何かの行列かと、小さくため息をつく。

「クレイディアのところへ行くつもりです。次の講義まで少し時間があるので。」

「あの娘なら今日は、部屋で休んでいるらしいわよ。時間があるなら予習をしないさい。」

「…休む？どこが悪いのですか？」

「何でも階段を踏み外したらしいわ。卑しい城下の子のように走り周っているからでしょう。まあ大事には至らなかったのは、あの母親の凶太さのお陰でしょうけど。」

「……それなら尚更、様子を見てきますよ。」

「ロークランド！」

叫ぶ母親の声を無視してロークランドは足早にクレイディアの部屋

に向かった。焦る気持ちでドアを開けようとしたところで中から声が聞こえ、ドアノブに手を置いたまま固まる。

「皇妃様に決まっています！姫様の存在が疎ましく侍女にでも命じたのでしよう！」

「ライラ、確証のないことよ。そんな大きな声を出さないで。クレイディアも起きてしまうわ」

「でもクラリス様！近くに居たロイとバルトも見ていましたわ！皇妃様付きの侍女が走り去っていくところを！！」

「……そうなの。どうして…クレイディアに……」

「今回だって打ち所が悪ければ大けがに繋がってしまいましたわ！」

母親がそんなことをしたのか、という疑心と嫉妬にまみれる母の瞳を思い出し背筋を凍らせた。まさか先日の庭園でクレイディアを自分が庇ったのが気に食わなかったからか？と胸が音をたてる。

たった、あれだけのことでクレイディアに怪我をさせたのか？という怒りが支配しロークランドは踵を返し母の部屋へと足を向けた。

バンッ

「ロークランド、ノックもしないで入ってくるなんて息子だろうと

許されませんよ」

「……母上、クレイディアを階段から突き落としたのは貴方の命令ですか？」

「……あら、何のことかしら。」

笑顔で質問をかわす母から目を離し、周りにいる侍女を1人1人目をやる。すると一人の侍女が明らかに真っ青な顔に涙を浮かべロークランドから目をそらした。

「お前か……！」

「ひっ！」

「お止めなさい、ロークランド！証拠もないのに皇妃である私の侍女に手をあげることなど許しませんよ……！」

伸ばしかけた腕を下ろし、ロークランドは凍りつくような笑みを浮かべ二人を見た。

「分かりました。では正式な手順を踏み、そちらの侍女を尋問します。もちろん母上も。」

「……貴方は私の子よ。」

「そうですね、自分の母親が幼子に手を出す薄汚く卑しい者だとは、私自身も胸が痛む思いです。」

「なんですって…?!」

「貴方がクラリス妃に対して憤る気持ちは分からなくもなかったの
で言及はしなかったが…クレイディアにそれを向けるとは些か短慮
です。そして、それを見逃すことは出来ません。」

「ロークランド…!」

「クレイディアは私の血を分けた妹です。」

そう言って部屋を出ようとしたが、次いで入ってきたイーサンに
目を見開いた。

「このクソババア!!」

「イーサン!!」

「離せ!こんなやつ母親じゃない!!」

殴りかかりそんな勢いのイーサンを止め落ち着かせる。7歳にな
ったばかりのイーサンの歯に着せぬ言葉に苦笑いをしながらも、素
直で勇敢な弟の頭を撫でた。

「母上。貴方は覚悟したほうがいい。私はいずれ皇太子になり
皇帝へ立后します。そのときイーサンも成人を済ましアイリス帝国
の重臣となっているでしょう。その時がきたら私は貴方を、このま
までは居させない。せいぜい態度を改めることですね。」

* * * * *

「クラリス、クレイディア」

「とうしゃまっ」

「あら、あなた。政務はよろしいので？」

「ああ、もう済んだよ。クレイディア、外で遊ぼうか。」

「あしよっっ！」

「待って、本当に政務は終わったの？」

「も、も、もちろんだとも」

「……あなたって人は」

「クレイディア、早く行かねば鬼が来てしまっっ！」

「おにやぁー」

「鬼って私のことじゃないでしょうねっ！」

三人は一面に咲く美しいダリアの庭園に飛び出した。

シュリウスとクレイディアが遊んでいるのをガーデンチェアで座り穏やかに見つめるクラリスの横の椅子が引かれ一人の男の子が座った。

「お久しぶりです、クラリス妃。お元気でしたか？」

「あら、ロークランド殿下。元気ですよ、とても。皇子も元気そうで安心しました。」

「あの…クラリス妃……」

「先日は皇妃様を諫めてくださいましたそうで、ありがとうございます。でも貴方の御母上ですよ。そんな辛いことなさらなくても宜しかったのに。」

「いえ、当然のことです。クレイディアは妹です。」

「…ロークランド殿下。貴方のお母上は……」

「あー！にいしゃまっ！」

「クレイディア」

「くれないでいあとあしようっ?!」

「もちろん、遊ぶよ」

「こら、ロークランド！講義の時間だろう！サボるとは感心しないぞ！」

「父上、さきほどヴィスタル公爵が怒り狂って探していましたよ。決済も済まさず消えてしまったと。」

「うっ！」

「ちなみに僕は講師が風邪で休みの為、時間が空いたんです。」

「あなた！！政務を怠ってまで来られても困ります！クレイディア、そのオヤジから離れなさい！！」

「おーい！親父！！ヴィスタルが探してたから連れて来たぞー！」

「イーサン、お前……!!」

「陛下！政務をサボるとは何事ですか?!衛兵、陛下を拘束し執務

室に放り込め！」

「とーしゃま、おやし？」

ぎゃーぎゃー騒ぎながら連れて行かれたシュリウスに、その場にいた全員が声をあげて笑った。クレイディアは、よく分からないながらも大好きな人たちが笑っていたので一緒に声をあげた。

それは、とても幸せな日々の一ページ。アイリス王城には、いつも笑顔が溢れていた。クレイディアが与えたモノは、ロークランドとイーサンが失くしてしまったモノ。皇帝が兄二人に捨てさせた、人を信じるということ。

* * * * *

「クラリス様は姫君が産まれたことに、ひどく安堵なさっております。もちろんシュリウス陛下も。兄上お二人も己の立場を理解しクレイディア様に被害が及ぶことのないようにロークランド陛下は皇太后さまの近くで、イーサン陛下はクレイディア様の近くで必死に守っていたのです。」

「兄上お二人は、ひどくクレイディア様を慈しまれ頑なに守っておりますでした。幼い自分たちの力の及ぶ限り全力で。そのおかげでクレイディア様は皇族の姫にしては真っ直ぐ明るい姫君に御育ちになったのです。」

ロイとバルトが一息つくように、そう言うと控えていたナイトが休憩を促してきた。二人の疲弊した顔を見て頷くと、すぐに紅茶を淹れなおされ芳香な香りが部屋を包む。

静寂の中、そっと瞳をと閉じていたロイが目を開き俺を見ると、ゆつくりと告げる

「クレイディア様は望まれて産まれて来たのです。しかし…今の様は死を渴望するようになってしまった。自分が産まれてこなければ、と涙を流すのです。幸せな時だった…先帝が亡くなられるまでは。確かに姫様は心から笑っておいででした。」

「兄様！」

「クレイディア、今日も元気だね。変わったことはない？」

「はいっ！兄様は少し疲れて見えます、大丈夫ですか？」

「平気だよ。」

「無理をしないでくださいね？」

「もちろん。」

十四歳になったクレイディアは来月に迫った十五歳の誕生日で正式に第一皇女を宣下されることが決まっている。ロークランドは皇太子ハイーサンも第二王子として正式に、それぞれ立っていた。

クレイディア、十四歳

ロークランド、二十二歳

イーサン、十八歳

三人は大人へと成長したが、その関係が壊れることはなかった。影ながらにクレイディアを守る二人は、それぞれ帝国の仕事を任されておられ、ある程度の影響力も地盤も確固たるものにしていった。

全ては幼い妹のため。

「式の準備は進んでる?。」

「はいっ!伯父上が張り切ってドレスを作っています、父様はテイアラに色々つけるとかで騒いでいました。」

「クレイディアには甘いからね、もちろん僕もだけど。クレイディアのアイリスの剣のデザインは僕がするんだよ。」

「そうなんですか?嬉しいっ」

「きつと素晴らしい式になるよ。」

「兄様の皇太子への立太式のようなればいいんですけど。」

「何か不安が?」

「……あの神官や司祭のお喋りの途中に寝ないか心配です。」

「はははは、眠ったらクラリス妃に怒られるよ?」

「……頑張ります。」

笑い合っって他愛ない話しをする。今では忙しいローランドに合わせて会っているため週に一度か二度しか時間を取れないでいたが、クレイディアは充分に自覚していた。

皇妃の子である兄二人とは立場が違うということ。でもこうし

て会いに来てくれて、大切にしてくれる。それが、とても嬉しかったのだ。

「おい！何だよ、俺に声もかけずに二人で。」

「いや軍部で引っ張りだこの弟を気遣ったことだよ。」

「白々しいこと言つなよ、ロツキーだって今や宰相に近いことしてるんだろ？」

「イーサン…その呼び方は止めろって言っただろ？」

「ロツキーなんてファンキーな名前すげー似合ってるぞ？」

穏やかな時間だった。人々は皇族を崇め、それに報いるため皇族は無償の愛を提供する。兄二人が、それを自分に教えてくれたといつても過言ではない。賢帝と呼ばれる父。その横に立つべく母。それを支える兄二人。大勢の人に愛されクレイディアは育った。

* * * * *

アイリス皇城の横にそびえ立つ同じく白亜の宮殿。歴史ある帝国内で尤も権威あるソルエール神殿。

美しく大きい十字の後ろにあるステンドグラスが光を鮮やかに変える。広大なアイリス帝国を束ねる賢帝シュリウスは眼前に膝まづく一人娘を見つめている。美しいティアアラが最愛の妻と同じオーロラの髪の上で煌めいている。娘の晴れ舞台ともいえる今日。列席している妻も嬉しそうに娘の姿を見つめていた。

「クレイディア・シュゼール」ダリア・アイリス。本日十五の誕生日をもって成人した皇族とみなし正式にアイリス帝国第一皇女宣下する。前へ。」

アイリス帝国では生まれ時に皇位継承権のある正当なる皇子・皇女にアイリスの紋章と己を象徴するピアスが与えられる。もちろん相応の生活を与えられるが十五の誕生日の日にある、この成人の儀式で正式に皇子・皇女という地位を賜るのだ。

欲に溺れた皇子・皇女には、この日をもって地位は剥奪。皇族の証であるピアスを外され臣に下ることが決められている。

この日。

正式に認められた皇族の子にはピアスと同等の証が渡される。

「曇りなき《まなこ》で善悪を見極め万人のために、この剣を振るえ。」

「アイリス帝国のため微力ながら尽力していくことを心より誓います。」

控えていた祭司が恭しく皇帝に美しい装飾の施された剣を差し出す。アイリスの紋章が柄に描かれ、個人紋章が鞘に描かれた”アイリスの剣”

「とても綺麗だよ、クレイディア。」

「ありがとう、お父様。」

祭司にさえも聞こえない小さな声で短い会話をした二人は、とても幸せそうに微笑んだ。この式の情景は、ひどく美しく強く人の心に残った。

列席者たちの中には近隣の王族から貴族までも揃い、多くの芸術者もいたが、みな皇帝が隠し守っていたクレイディア皇女の姿を見たことはなかったのだが今日、式という機会を得て拝顔が叶った。

大陸一と名高い画家グダンは、その気性から一国には収まらず気に入ったものしか描かないという男だった。そんな彼は率先して式の絵を描き無償で皇帝へ献上するほどだった。

「クレイディア。」

「兄様っ！イーサン！」

「よ、お疲れさん！」

「とても綺麗だったよ。」

「ありがとう、二人とも。」

喜び祝いの表情を浮かべる兄二人に恥じらうような笑顔に向けたクレイディアは、いつになく大人っぽく少しだけ艶があるように見える。そんな三人から少し離れた場所で苦渋をかんだような表情を浮かべる。アイリス帝国皇妃の称号を持ち一国の王女である。

「忌々しい…あの女が産んだ娘が正式なるアイリスの皇女となるとは…！」

クレイディアの立后は大きい。美しく聡明な彼女のことだ。嫁ぎ先は数多とあるだろう。そして強大なアイリス帝国唯一の皇女である彼女が、嫁ぎ先で軽んじられることはあるはずがない。

皇女である彼女を崇め重きを置くこととなるだろう。

「苦労知らずの皇女…！」

自分がアイリスへ嫁いだ時は帝国の豊かさや歴史深いところに慣

れることは出来なかった。唯一の頼みの綱であった皇帝には、当たり前のように寵姫がいた。美しい笑顔を浮かべながら皇帝と並び笑い合っている姿を見て絶望だけが身に振り掛る。アイリスの有力な貴族の寵姫。

たまたま自国が鉾山を発見していなければ寵姫が滞りなく皇妃の座についていたのだろう。その娘は皇帝から惜しみなく愛される。皇帝は喜びに溢れる笑顔を覗かせ、娘を引き寄せ抱きあげている姿は自分の息子たちでは見たことがない。

「側妃と同じ髪を持ち皇帝と同じ瞳を持つ…クレイディア…!!。」

憎く、目ざわりな存在は二つもない。

なのに。

「母上、クレイディアに手を出せば私たちが許しませんよ。母国への援助もなくなると思っています。クレイディアはアイリスの正統なる皇女。そして、この先…貴方より確固たる地位に就くのですから。」

そう告げた兄ロークランドの瞳は母親を映しているとは思えないほど冷めものだった。

* * * * *

賢帝と名高い皇帝が体調を崩したのはクレイディアの十七歳の誕生日が来る、ほんの少し前だった。水面下ではあるがロー克蘭ドの即位手続きを進めていた皇帝は、全て分かっていたのだろう。

「ローク、イーサン。」

「父上。」

皇帝の寝室。

許可なくして入ることは許されない場所は、余計なものは何もない。しかし壁一面には側妃であるクラリスや子供たち三人の絵画が惜しみなく飾られていた。

「…お前たちに託す。この帝国を。民を導くは皇家の血のみ。抜かりなく先を見据えよ。」

「もちろんです。」

「ローク、お前には長男であり皇太子ということ、ひどく厳しく育ててしまったと後悔ばかりがつのっていた。しかしイーサンが生まれ、クレイディアが産まれたことで兄として二人を守るために心

を砕いたな。お前は優しい子だ。いや、兄妹のためにお前は優しさを手に入れたのか。」

「父上、本当に感謝してます。私に兄妹を守る力を与えて下さったこと。心から。」

「…そうか、良かった。」

皇帝は寝台に寝たままの状態で、かたわらに立つ愛しい子供たちを見つめる。

「イーサン、お前は自分の立場をしつかりと弁えているな。兄の皇位継承の妨げにならぬよう、正反対の軍事で力を付けてきた。継承争いとは醜いものだ。お前のそんなところに、この帝国は救われただろう。」

「親父…死ぬなよ。まだクレイディアの嫁ぎ先だって決まってないんだぞ。」

「ははは、馬鹿め。クレイディアを嫁がせるはずがないだろう。」

こんなときでもクレイディア溺愛主義を曲げない父に子供たちは声を出して笑った。ひとしきり穏やかな時が流れたが、厳かな皇帝の声は再び開かれた。

「二人に遺言を預ける。心して聞け。」

一、皇女クレイディアの婚姻は本人の自由である

一、側妃クラリスの地位を皇后へ上げるものとする

一、皇后と皇妃は同義なること

一、次帝ロー克蘭ドの宰相にヴィスタル公爵を起用すること

一、いかなることがあろうと皇女クレイディアを女帝へ擁立することを禁ず

一、皇后クラリス、皇女クレイディアが望むのであれば皇帝直轄領を与え暮らすことを可能とする

一、以上のことを破りシュリウスの二等身ならびにシュリウスの直系に連なる者の安寧を脅かす者は全て、シュリウス名代の元、即時に極刑に処すこと。」

淀みの無い口調は病床にあるにも関わらず、その空間を覆い尽くす。

「その全て承りました。」

立ちつくしている弟の横に膝まずき未だ威厳を保つ父である皇帝に頭を下げるロー克蘭ド。

「必ず。」

同じく跪いた子供を見て、穏やかにほほ笑みを浮かべる。薄く延ばされた唇は次には意地悪く変わる。

「今から、クラリスとクレイディアが来る。家族水入らずの時間を邪魔されるのは敵わん。もう、下がっていいぞ。」

「いいえ、家族水入らずならば私たちも同席しましょう。」

「そうだな、それがいい。」

「お前らは……！」

冗談をかわしながら三人で談笑していると、静かにドアが開きクラリスとクレイディアが入室した。シユリウスは嬉しそうに二人を見て笑うが穏やかなクラリスとは違いクレイディアは父親のその状態に悲しみを隠せずにした。

そっと近付いてきたクレイディアは、強く強く父の手を握り締めつくように腕に抱きつく。困った顔をしながらも開いている手で頭を撫でると、少し顔を上げた。

「父様…早く元気になって。今年はアルエミス湖の離宮に行くって

約束したのに……。」

「ああ……そうだったな。早く行かねば美しい木々の色づきも去ってしまう。」

「あら、そんな約束なさっていたのですか？私は何も聞いてませんけど。」

「ははは、娘と二人でというのも良いだろう？」

「いけません、クレイディアが行くならお守役として私も行きませんと。」

暖かい会話は永く続くことはなかった。

「母上、クレイディアとクラリス妃を呼びましょう。父上は、これ以上続かない。せめて最後は、みんなで見送ってあげましょう。」

「お黙りなさい！ここは皇帝寢所！皇后である私の許可なくして何人足りとも入れることは出来ぬ！」

「母上！」

「刃向かうことは許さぬ！この帝国で皇帝の次に地位が高いのは私だ！！」

ヒステリックになった母は、それでも正当な権利を主張し彼らの望みを打ち砕いた。今頃、皇帝危篤。という報せを聞きながら身体を震わす半分、血の繋がった妹に何も出来ぬまま。

泣いているのだろう、彼女たちに。兄たちは成す術もなく。

賢帝と崇められた父は意識を戻すことなく静かに息を引き取った。

彼が最も愛した女性の声を聞かぬままの最期に…だれしもが同情の意を抱いただろう。

「皇帝シュリウス陛下……」ご崩御あそばされました。」

たったそれだけが死後、1時間経過したころ寵姫とその娘に届けられた。長男である次帝の従者は眉を寄せ、痛ましい表情を浮かべ深く跪いていた。

「そうですか、新帝ロークランド陛下のご慈悲に感謝いたします。」

寵姫は静かな微笑みを浮かべ、そっと涙を流す娘を、かき抱いた。

「怒りを捨てなさい。これは当然のこと。国を治める方の死は…簡単に知ることは出来ない。それが皇帝の妻と皇帝の娘に与えられた1つの試練なのです。それよりも…このように早く報せを下さった、そなたの兄上に感謝するべきです。」

「…っなぜ！！見送ることも出来ないのですか！！父上の最期に…なぜ…っっ」

分かっけていても悲しみと怒りが入り混じるクレイディアに理解し

がたいことだった。落ち着いている母の表情にさえ憤りを感じるほど…彼女は深く傷ついていた。

「父は…私を…愛して下さいました！母上のことも…なのに……！」

「ロークランド殿下が皇帝へ立后するまで皇后さまのほうが立場は上。しかるべき対応が取られることは予想出来たはず。短慮すぎますよ、クレイディア。」

「母上は悲しくないのですか！」

「っ…悲しくないはずがないでしょう！？それでも受け入れなければならぬのです！！…それが……皇帝を愛した私の務めなのでから……！」

その言葉にクレイディアがグツと口を紡ぐ。愛した父の死は…見送ることも出来ず…その亡きがらを見ることも叶わぬまま葬儀まで静かに過ごすしか彼女には残されて居なかった。

父の死を悟っていた兄2人とは違い、クレイディアは回復を祈っていたため悲しみは深く。何日か寝込むほど憔悴しきっていた。

しかし、その悲しみさえも凌駕する出来ごとが起こるなど。誰も予想できなかっただろう。

* * * * *

シュリウス陛下の葬儀は盛大に行われ落ち着いた日々が戻ってきた頃。寵姫であったクラリスは皇妃に立后し、正妃であった皇妃は皇太后へそれぞれ地位があがった。

そんなとき、クラリスは立后式を目前に控えたロークランドの前に座っていた。

「お忙しいときに申し訳ありません、ロークランド殿下。」

「いいえ、本来ならば私が気を遣わねばならぬことです。」

「……皇帝となる殿下へお願いごとが御座います。」

「なんでも仰ってください。父もそれを望んでいました。」

穏やかにほほ笑んだロークランドに安堵の息をはきながらクラリスは、そっと口を開いた。

「私とクレイディアは…アイリス皇城から……去ろうと思います。」

「…何故です。」

「やはり…陛下亡きあとのことを考えれば…私たちの後ろ盾は兄であるヴィスタル公爵のみ。これからのクレイディアのことを考えれば…それが最善かと思っただのです。」

「しかし…」

「私たちは陛下の心の安寧のため…この城に留まっております。政務に忙殺され自我を見失うほどの陛下を…少しでも癒すことが出来れば、と…」

「存じ上げています。」

「しかし…その陛下はお隠れあそばしました。私共が…城に留まる理由は、もうありません。」

「…それは許可しかねます。」

「っ…しかし陛下は…！」

「確かに先帝は2人が望むのであれば皇帝直轄領を与え暮らすことを許可しています。」

「ならば…」

「しかし、それを継ぐべく私は、それを許しません。もし城から出るのならばクレイディアは置いて行ってもらいます。」

「何故ですか？私が居なければクレイディアは1人になるといふの

に…」

「私とイーサンが居ます。皇帝の血を引く皇子、皇女は共に生き支え合うもの。」

「…確かにそうですが…！」

「クレイディアを…私の、アイリス帝国皇帝の妻にしようと思いません。」

一瞬、時間が止まった。

この大陸の頂点にいた皇帝に最も愛された女性は、自分と同じオリラの髪を持つ娘を思い出した。

「…なんという…！」

「そんなに驚くことでしょうか。アイリスの皇族では近親婚は遙か昔より続けられ尊き血を守ってきた。」

「しかし…！」

「くだらない倫理を説くのはやめてください。現に貴方の夫であり我が父、先帝シュリウスの両親である先々代の皇帝と皇后は実の兄妹。」

「それは…存じております。しかし…」

「我々は正統なる皇家の血をひいています。それを貴方は否定することは出来ない。」

冷たくそう言い放った男は、燦々と降り注ぐ太陽の光を受け美しく微笑んだ。

「…それは母として承認出来ません。第一、クレイディア自身…貴方のことは兄としか思っていないはずですよ！」

「それでも幼少を共に過ごし、慣れ親しんでいる私であれば幾分かクレイディアも安心でしょう。他国に嫁がせるよりも貴方も安心では？」

「…他国に嫁がせるつもりなど、とうにありません！陛下も…シリウスも……想い合う方と添い遂げさせてやるっ、と…言っ…っ」

優しいな夫を思い出し、いまだ空虚に支配された心は荒れる。目頭に熱が集まり幸せだった日々が走馬灯のようにかけめぐる。

あの子は…逃げられない。

絶対的な権力を持つ皇帝に求愛され身分も申し分ないクレイディアを。誰が反対などするであろうか。

「後ろ盾はヴィスタルしかないと言われましたがクレイディアの後見には私が。貴方の後見にクレイディアが立てば…例え皇太后の称号を持つ母でも太刀打ちは出来ますまい。穏やかな日々を送ることが出来ましょう。」

「っ……そんなのクレイディアを身売りさせるようなものではありませんかっ！」

「婚姻はクレイディアの自由と父も遺言で残しています。…クレイディアに決めさせるのが良いでしょうね。」

「私のことが…あれば…あの子は領きます！私の安寧のため…あの子は貴方の妻となるでしょう！」

「それならばそれでいいではありませんか。クレイディアは弱くはない。己で決めたことであれば真つ当するような強い子です。私も妻となったクレイディアを心から愛します。何が不満のですか。」

空気が変わった。彼が発する気が部屋全体に広がりクラリスは背に汗が流れるのを感じる。しかし、そのオーラに当てられたクラリスも、また。心が落ちつていった。

「……許しません。絶対に。私が…あの子の母である以上。この婚姻は認めません。」

「それが貴方の答えですね。」

「はい。お時間を取らせました。失礼します。」

揺らいではいけない。夫がクレイディアと私の未来を憂い守ってくれたように。私も母としてクレイディアを守り抜くのだ。たとて…神にも近い皇帝へ盾突くことになっても。

することがある。

やるべきことがある。

立ち止まってなどいれない。

「クレイディア……強く……強くおなり。」

これが従者たちが見たクラリスの最期だった。

以前の部屋よりも幾分か狭いだけで中の調度品などは先帝から贈られた品の良いものが並んでいる。そつとクレイディアが産まれてから書き続けていた日記を抱く。

壁一面には夫が名手に書かせた私とクレイディアの絵が所狭しと飾られている。

愛している、と何度も囁き合った。

その愛は、いつしか子供へと形を変え。

「とても幸せだった。あの人の妻となり…娘を産み…あの人の癒しとなれたことが。」

「さようなら、クレイディア。」

+
+
+
+

「兄様……」

「一日中部屋に引き籠っていると聞いたよ。」

「……出たくないんです。」

「それでも、たまには日の光を浴びなければ身体に悪い。」

「いやなんです…」

母の部屋が幾分か狭くなったのと違い。私は以前と同じ部屋を与えられていた。庭に出れば思い出すの。ダリアのように綺麗な子になりなさい、と微笑みを向けてくれた父様を。

「クレイディア。」

「もう…どこにも居ない！私を抱き締めてくれる父様も…母様に怒られる父様も…政務を抜けて会いに来てくれる父様も…どこにも…
…どこにも居ないっ！」

「おいで、クレイディア。」

泣きじゃくる私を抱きしめてくれた兄様の腕の中。私は、もう居ない父様への愛と、これからの母様の身のふりのことで心が乱れた。

それでも辛抱強く背を撫でる兄様に安堵をおぼえ…少しずつ涙は止まっていった。

「クレイディア。」

「…はい。」

「私の妻になるかい？」

「……………え？」

兄の妻？

血の繋がる兄。

どうして……………

「母上のことでも心配しなくていい。私が守る。他国に嫁がせるつもりもない。クレイディアは…このアイリス帝国の皇后となるんだ。」

「兄様…………… なにを……………」

「不安だろうか？君の母上の立場を考えれば。皇太后が何をするかも分からない。その身の安全は…君にしか守ることが出来ないはずだ。」

多くを語られたわけじゃない。言葉少ない中で。私は何をすべきかを悟った。

「私が…兄様と…結婚すれば……………母は……………」

「もちろん、今まで通り暮らせる。クレイディアは本当に頭がいいね。」

先帝の側妃。その危うい立場を今まで見てきた。もし…新皇帝に害なすと判断されれば皇城から追放。ひどければ、誰かも知らぬ男の良くて後妻、悪ければ妾として嫁下。

唯一の後ろ盾であつた伯父も…爵位剥奪。

母に仕える仲の良い侍女も私の護衛である2人も私の侍女も。

周り全てが変わる。

「私が領けば……何一つ変化ない日常が続くでしょうか。」

「もちろんだよ。君一人さえ領けばね。」

答えは一つ。

「分かりました。兄様の妻に……この帝国の皇后にして下さい。」

「嬉しいよ、クレイディア。」

落とされる唇は、いつもの額とは違い唇に落とされた。嫌悪などない。兄として、ずっと慕ってきたんだから。あるのは空虚と…少しの絶望。

幸せな未来を、と願ってくれた父を裏切る自分への罪悪感。

「明日の朝、みなに言おう。先帝の病死で暗雲が立ち込めている帝国も…みなが、この慶事に喜びの声をあげることだろう。愛してるよ、クレイディア。」

「兄様…私は…」

貴方を恋情として愛することはないでしょう。

「今日の夜…また来るよ。」

立ち去った兄様の背。
いつも優しくかった人。

かくれんぼをして迷子になった私を。いつも1番に見つけてくれた。泣きじゃくる私を抱き上げて頬にキスをして何度も頭を撫でて

くれた。イーサンと一緒に悪戯をしたときは…本気で怒ってくれた。

覚悟は、もうある。

「姫様…今何と……」

「今夜、ロー克蘭ド兄上が来られるの。出迎えの準備をして。」

「何故…で御座いますか…？兄弟とはいえ…」

「明日、婚約を公示します。」

「っ」

「私と…ロー克蘭ド兄上の。」

自分のそばに常に控えるリンは青褪め小刻みに身体を震わした。アイリス帝国において兄妹婚は禁忌ではない。皇族だけでいえば奨励さえされている。なのにリンは何て絶望に瞳を染めているのだろうか。

「姫様…誰に何を言われたかは知りませんが貴方様の意志が全てです。誰もそれを覆すことはしないんですよ。」

「私の意志なの。いつか…会ったこともない他国の王族や権力目当ての貴族と婚姻を結ぶぐらいなら…愛するアイリスに残りたい、この国のために出来ることをしたい。父が亡くなって以来、この国の

民は悲しみに包まれている。でも私と兄上の婚姻を公示すれば民は久しぶりの慶事に憂いさえも感じなくなる。」

「お自分を犠牲にするおつもりですか…？」

「犠牲だなんて、おこがましい。私の選択なの。リン、準備をして。」

「

「いやです…っ」

「リン、準備をしなさい。貴方がしないなら他の侍女を呼びます。」

今までリンに命令したことはない。幼いころ一緒に居た。周りに近い年の女の子がいなかったせいも貴族の令嬢たちよりもリンとの時間が長かったし気負いしない分、とても楽だった。友人や姉妹のように中が良いと豪語出来るほどだ。私の望むものをリンはすぐに気付いてくれたし命令したくもなかった。

「姫様っ」

「お願い、リン。貴方にしてほしいの。」

「…分かりました。すぐに準備いたします。」

下がっていったリンを見ながら思案する。大事に守ってきてくれた母。今度は自分が守ることが出来るんだ、とグツと胸に込み上げ

る感情を抑え込む。

「…？」

部屋の外からは人の走る足音が何度も聞こえる。もしかしたら兄様が、婚約について示唆したのかもしれない。確かに明日、公示するとなると忙しくなるのは目に見えている。

母様は…心配するだろうな。大丈夫だって伝えたいな。だから、ずっとそばに居て、と直接言えたら。

「会うのは無理か…な。」

亡くなった皇帝の側妃である母は、当分、喪に服さねばならぬとされているため、あまり会うことは出来ない。でも手紙ぐらいなら渡してくれるだろう。いざとなったら兄様をお願いすればいい。きっと渡してくれるはずだ。

文に、何度も何度も書いた。愛してる、と。どうか、そばに居てほしい、ということも。今度、一緒に離宮にでも行く、と。

「姫様、湯殿の準備が整いました。」

「リン…」

書き終えた文を父から貰ったダリアの花の描かれた文箱に入れた。

「ごめんね、ありがとう。」

「っ……姫様」

「これを母様に。今日は湯浴み一人でするね。」

「かしこまりました。」

一人きりの湯殿の中で沢山の覚悟した。皇帝の次の権力を持つ皇后になるために。皇帝が不在のときには自分が上に立ち指示を出す皇后。父や兄と同じ地平線を見つめ、この目に見ることも出来ない広大な領土を守り抜くための。

そして何より、自分のそばに居る人たちのために。

しかし、その日、兄様が部屋へ来ることはなかった。

「何かあったの？ずっと城中が騒然としている。」

「…ロークの周りで緘口令が引かれてるらしい。俺の所でさえ情報は周ってこない。」

「そう…イーサンも知らないの。」

その言葉に溜息をつく。あの次の日、すぐ兄様からは手紙が来た。当分は行けない、と書かれ穏やかに過ぎすようにとも書かれていた。イーサンは何も知らないのか、いつもと変わらず私の部屋を訪れてくれていた。公示されていたらイーサンは、何と言うのだろうか。近親婚が奨励されているとはいえ私たちは正真正銘の兄妹だ。嫌悪

感はない。祖父母も兄妹だったと聞いている。

それでも…少し怖かった。

コンコン

「失礼致します。こちらにイーサン殿下がいらっしやると窺ってま
いりました。」

その声はロークランド兄上の側近中の側近。いつも兄様の隣に居
たウェインだ。兄様より二つしか上じゃないのに妻子を持ち、たし
か子供は、もう三歳になるはずだ。

「どうぞ、入って。」

「失礼いたします。」

いつも穏やかにほほ笑み携えるウェインの強張った顔に部屋の空
気が変わる。私の後ろに控えていたロイとバルトも何事かと背を伸
ばした。イーサンの重みのある声が響く。

「ウェイン、どうした。ロークに何かあったのか。」

「いいえ。陛下にイーサン殿下を呼んでくるように言われまして。」

「そうか、すぐに行く。」

「姫様と少し話があるので殿下は先に行って頂いて宜しいですか？」

「…ディア。」

ウエインの言葉に眉を寄せ、私を見るイーサンに笑った。大丈夫だから、と背を押し促すと渋々ではあるが部屋を出て行った。

「どうしたの？ウエイン。」

「真に申し上げにくきことなれど…御母上様…ご自害により、ご逝去あそばされました。」

「母が死んだ…？自害だと…？」

「はい…。」

「なに…を…冗談が…すぎる、ぞ…」

震えが全身に伝わっている。痛々しいほどに心情は表に出て、いやに静かな声色が響いた。

「…クレイディア様におかれましては…クラリス様のご法要時に喪主を務めて頂きます。」

「…いつのことです。」

「は……？」

「いつ…母は死んだのですか？」

「…… 八日前に御座います。」

ウェインの言葉に目を見開いた。震えを抑えながらテーブルの上に咲く一輪のダリアを持ちあげ、投げつけた。報告を淡々と告げていたウェインのすぐ横で花瓶が割れる。静かすぎた部屋に木霊した。

「…1週間も前ではないか！何故…娘たる私に…！皇女たる私に今まで何も伝えぬ！」

「…ご自害であられる場合、本来ならば慣例に従い三ヶ月はお知らせ出来ないところを唯一の御子であるクレイディア様への新皇帝口―クランド陛下よりの格別なるお図らいで叶った次第にございます。」

「慣例…慣例…と……何故、親の死に目にも会えぬ…！私はこの帝国唯一の皇女だ！先帝の残した皇女ぞ…！母はヴィスタル公爵の血筋ぞ…！」

「っお静まり下さい！」

「静まれ…だと？そなたの娘を殺してやろうか！そなたの居ぬ間に

「！！固まった娘にしか会えぬ苦しみを味あわせてやるうか！」

止まらない。感情が流れ出す。父が死んだときも、こんな風にはならなかった。皇女であることを第一と考え母と兄の前以外ではなかったほどだ。

でも、今回は違う。何故。どうして。自害など。

「私の…文を…読まれたからか…？」

嗚咽が漏れた。あれを読んだ母が私のために死んだのだろうか。そうであれば私は、どうすればいい。

「いいえ、違います。恐れながら姫様の文が届く前にクラリス様は亡くなっておいででした。こちらはクラリス様の遺品の一つであり…陛下がクレイディア様にお渡しするようにと。」

どうして。テーブルの上にコトリ、と音をたて置かれた一つの指輪。父が母に渡した初めてのプレゼント。生涯を共に生きる約束の指輪。どうして。生きること、何よりの幸せと笑って説いていた母が。どうして。

「遺書は…何か…ど、して…！」

「遺書は御座いませんでした。どうぞ姫様、心をお沈め下さい。まだ城のほんの一部の者しか知らぬことで御座います。」

どうして、そんな話が出る。どこかに居るはずだ。母は…私を置いて死んだりしない。

「姫様っ?!何を……。」

「はは…う…え…どこ、に…!」

死に一つ一つ意味があるのだとすれば、それは間違いだ。母の死に。いったい何たる理由をつけるつもりなのか。ただ父の心の安寧を求めた。本当に無欲な人だった。父が死んだからといって絶望し自殺などするはずがない。だって、母の隣には私が居るのに。

ダリアの庭園に飛び出した。邪魔なヒールを脱ぎすてて裸足で駆け回る。ここは本当に、あの暖かいダリアの庭園なのだろうか。陽の光が美しく咲き乱れるダリアを照らす。

なんと綺麗なのだろうか。

「なぜ咲くっ!!父も母も居ないのに…なぜ、そんなに美しく咲く必要がある!!」

憎い。全てが憎い。この国の慣例も。母を置いて死んでいった父

も。私を置いて死んだ母も。

「ロイ！火をもて！！」

「姫様っ」

「火を…！この城を燃やせ！ダリアを！全てを燃やせ！」

全て燃やしてしまえばいい。両親が愛したアイリスを一瞬でも憎んだ私も一緒に。何の力もない神に祈るぐらいなら燃やしてしまいたい。

「神が何をしてくれた…！何故…父の病を治してくれなかった？何故…母の自害を止めて下さらなかったのか…！神など空想だ…！こんなにも…生きるといふことは残酷なのに…！」

なのに、どうして。神は人を産みだし続けるのか。

「いやあああ！」

泣き崩れた私をロイとバルトが抱きしめる。リンも泣いて私の手を握る。それを全て振り払ってダリアに縋るように一輪そっと握った。ドロまみれになるのも厭わず、そのまま地面に突っ伏して泣いた。

掻き毟るように母と同じ髪を振り乱す。見えない。どこにも希望が見えない。どこへ行ってしまわれたの。両親は、いったい私に何をしろというのだろうか。

慣例など踏みつぶして父の最期に立ち会えば良かった。喪など気にせず母を訪ねればよかった。どうして、出来ることをしなかったのか。どうして…人は生きているのに我慢を強いられるのか。

そんなこと、今更後悔したくなかった。

「姫様、ロー克蘭ド陛下からの伝言です。部屋から一步も出ないように、とのことですよ」

それでは、失礼します。と声が聞こえた。あの日。全て受け入れると覚悟した日。兄様が私の部屋を訪れることが出来なかったのは母の死があったからだろう。これは偶然なのだろうか…？

胸騒ぎがする。

「姫様、中へ入りましょう」

呆然とする私にリンがそう告げるとロイの腕を感じたあとに身体が抱きあげられた。足に感じる土も美しいダリアも暖かい日差しも。全て現実の世界。

「姫様」

「…ライラ」

庭影から姿を現した彼女は母の唯一無二の親友であり侍女であった。いつも豪快で母と同様、娘のように愛情をくれた女性。その人は普段からは想像できないほど憔悴しきっていた。

398

「…ライラ、本当だったの…？母上が…自害したなんて…あなた…」

「っ…姫様、これを。クラリス様からのお手紙です。ロー克蘭ド陛下に奪われないようクレイディア様に直接渡してほしいと頼まれたのです」

「……………」

いつこうに受け取るうとしないのを気遣ってか抱きあげられたままの私の手を握ったライラは目にたくさんの涙をため続けるように手紙を握らしてきた。

「遺書です。クラリス様の。貴方様だけに当てた遺書です」

「…ほん、とに自殺だったの、ね」

「……はい」

「…おろしなさない」

ロイは、そつと私を地面におろしリンが足を綺麗にしヒールを履かせた。私は、ただ涙を拭い四人を見た。

「下がって。少し一人になりたいの」

愛するクレイディアへ

一年中、咲き誇るダリアの花の香りが今日もします。

本来ならば一年中咲くことなど出来ないダリアが咲き続けるのは貴方のお父様の愛情の賜物です。

貴方が名前にダリアを戴いた日。
つまり貴方が産まれた日。
私は本当に嬉しかった。
それを忘れないでね。

貴方を残して逝くことが心残りではありますが私は貴方の足枷にはなりたくなかった。

どうか逃げて。この帝国から。貴方の長兄ロークランド陛下は貴方を心から望んでいます。

この帝国では兄妹婚、近親婚を奨励しているかもしれないけれど貴方はそれを望んでいないでしょう。

だから逃げなさい。

貴方の愛する、この国を出なさい。

貴方が貴方らしくあるために。

貴方のお父様は貴方の幸せを願っていました。

貴方がまだお腹にいるころ、二人で話したことがあります。

皇子なら皇位継承権を放棄させ自由に育てよう。

皇女なら好いた者の元へ嫁がせよう。

そう私たちは決めたのです。

あの人が、貴方のお父様が最後まで貴方の幸せを願ったように私も貴方の幸せを願います。

自ら命を断つ私を許すこと無く貴方は生きなさい。

そして貴方の兄であるロークランド様を責めてはいけません。

これは私の選択なのだから。

私が言わなくても分かっていますね。

貴方は本当に兄上たちを愛しているのだから。

最後に忘れないで。

例え兄である皇帝でさえ貴方を縛ることは出来ないのだということ。
とを。

私とシュリウスが貴方を心から愛しているということ。

追伸

貴方が愛する方の隣で笑っている姿を心から望んでいます。

遺書にしては短いものだった。

簡潔なのに愛情に溢れ、どうしてこうも私のことを理解しているのか不思議だった。

兄様のことを恨むことなんて出来ない。母が母の決断で成したことを、どうして兄上に押し付けることが出来るのか。恨むとしたら、それは自分をだ。

母が選ばざる得なかったのは私が居たから。私が母のために求婚を受け入れたように。母も私を愛し、私のためにその身を犠牲にしたのだから。

母の自害が与えたものは二つ。

自由と命

自由を与えられ、生きることが義務付けられた。

「どんなに辛いことがあっても死ぬな、と…母上は言いたかったのですね」

「姫様、こちらが荷物でございます。当面の服や食事、金銭が入っております。クラリス様は自分の遺品も手紙も持っていくな、と仰せでしたので預からせていただきます」

母の手紙を読み終え、涙が枯れるまで泣いた。落ち着いたところを見計らったようにライラが荷物を抱え部屋へ入ってきた。彼女も、かなり憔悴しているのだろう。表情は硬いが強い瞳をしていた。

「…これは…持って行っていいでしょう？」

そっと差し出したのは母が大事にしていた髪飾り。美しいダリア

の花が咲き蝶が漂う姿が施されているものだ。父が母へ送り、いつか私が受け取るんだよ、といつも言ってくれていた。

「駄目です。クレイディア様…貴方は国を出るのです。アイリス帝国と繋がるものは全て置いて行っただきます」

「そんな…」

「クレイディア様、思い出は物ではありません。貴方が今、心に不安や孤独、その全ては忘れられぬほどの感情でございましょう。貴方は…クラリス様がご自害されたことを思い出し愛情を感じる…としか許されぬです」

「……分かった」

そして私は愛情溢れるものを全て置き、孤独だけを抱え帝国を出て行くのだ。

愛した人たちが愛した国を捨てて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5743n/>

ダリア、それは愛の序曲

2011年11月16日19時54分発行